
AnotherChapter

ノノ川玲二

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AnotherChapter

【Nコード】

N9302S

【作者名】

ノノ川玲二

【あらすじ】

クラス替えをした日の放課後に入ったばかりの教室で、平々凡々とした逆茂木高校の二年生の主人公・寺岡光輝てらおかこうきの前に、現れたクラスメートの女子がこう言った。「ねえ、並列世界って聞いた事ある？」この言葉で、突然現れると噂される異空間内に迷い込んだ主人公と他の人間による、未知の生物との生存と脱出を賭けた戦いが始まる。

登場人物紹介

寺岡 光輝（てらおか こうき）

この物語の主人公の逆茂木高校二年の男子。

川村の噂話から、並列世界の存在を知る。

髪は緑がかった黒のショートで、背は男子の中でもそれなりに高い。

適応者という並列世界で力を発揮できる人間でもある。

女子に耐性がなく、あまり大人数と絡むを好まない。

なので、あまり友達は多くはない。

だが、それに関しては本人は気にしていない。

好きな事は、寝る事。

最近ハマっているのは、寝る事。

自慢できる特技は、早く寝る事。

暇があつたら、とりあえず寝ようとする。

専用武器は、『フリー・シフト・カッター』という大きさや形を自在に変える事ができる刃物系の武器。

つまり、日本刀を除き、ほとんどの刃物を創り出す事ができる武器なのである。

川村 ひより（かわむら ひより）

寺岡のクラスメートで、寺岡に並列世界の存在を話す。

黒い長髪の持ち主で、なかなかの美少女ではあるが、一定の人間としか関わろうとしない暗い性格である。

しかし、寺岡は並列世界で共に戦う仲間として慕っている。

いつもは冷徹少女という雰囲気を漂わせているが、たまに女の子らしい一面もある。

使用する武器は、彼女が自作した、錘付きの鎖。

黒川 白刃（くるかわ しらは）

逆茂木高校のオカルト研究会の部長。

寺岡とは、入学当初から部活の勧誘で面識がある。

髪は手入れをしていないので、多少ボサボサしている。

校則に引っ掛かりはしないが、全体的に身嗜みがしっかりしていない。

口調があまりしっかりしてるとは言えないので、よく後輩にナメられる。

かなりの甲虫好きで、どの季節に彼の家に行っても常に甲虫が拝める。

稀に見る高校生のムシキング中毒者。

使用する武器は、家にあつた古い木刀。
この木刀はなかなかの破壊力があり、鉄パイプを折り曲げるくらいである。

三波 忍（みなみ しのぶ）

別のクラスにいる、寺岡の幼なじみ。
彼女の実家である波川神社で、巫女さんをやっている。

短い髪に、白いリボンを付けている。
奉納金をおこずかいの足しにしたり、髪を短く切ったりと、巫女としての自覚はあんまりない様子。

小学生時代から寺岡をからかって遊ぶのが好き。
本人曰く、絶対に飽きたりしないらしい。

並列世界で化け物を一度も殺した事がなく、化け物からいつも逃げ続けていた。

そのため、逃げる事等に関しては彼女がエキスパート。

常に持っている武器になりそうな物は、特別な木材できているお被い棒。

これはかろうじて、鈍器になる。

中城 里沙（なかしろ りさ）

滝川高校の対抗組織である、書道部の三年生。
彼女も寺岡と同じ適応者。

ポニーテールが特徴で、三年生という事もあり背が並の男子よりもずっと高い。

年下と関わるのが好きで、あまり同い年や年下と関わるのは苦手らしい。

本人は自分がシヨタコン気味な事を気にしている。

しかし、書道部の部員としての活躍は目覚ましく、数多の大会で賞を受賞している。

元陸上部でもあり、書道部で一番の体力を誇る。

ただ、優秀なせいで他人から距離を置かれているのが、彼女の唯一の悩み。

専用武器は、複数の銃系の武器である。

具体的には、ハンドカンの『シングル・チャージャー』、ショットガンの『マテリアル・ドライバー』、スコープ付きライフルの『エキスパート・ストライカー』、ロケットランチャーの『エクスプロード・ピリオド』である。

冴抜 渚（さえはら なぎさ）

城谷高校2年の演劇部部員。

数えるだけでも100を超える戦闘回数に、極めて高い身体能力で次々と功績を上げる。

髪の色は茶髪。外見はアクセサリなどを多々付けていて、若干不良に見える。

不良に見えても見た目は良いので、何度も演劇部で主役を務める。

性格は、ざつと言えば軽い感じ。

軽薄かつ皮肉屋で、軽口が絶えない。

だが、仲間が危険な状況になると、何かにつけて助けたり、戦い方のなっていない寺岡や川村などに、粗い教え方だが戦い方や弱点を教えたりと。意外と仲間思いな所が在る。

過去に並列世界の化物に妹を目の前で殺された経験をしており、普段表には一切出さないが、化物に激しい憎悪を抱く。

アスタリスク・クエイクボーダー

寺岡の前に現れた謎の黒いコートの少女。

並列世界をさ迷っている化け物を浄化と称して殺している、管理人の一人。

髪は白いショート、雪のように白い肌で、紅い目をしている。

容姿は、寺岡よりも少し幼い。

機械的な声の持ち主で、あまり表情を崩さない。

専用武器は、『スマツシユ・ジャベリン』という槍。触だけで切れる特殊な衝撃波を放つ事ができ、遠距離の敵も攻撃できる。

アディア・ブロックウェイ

アスタリスクと行動を共にしている栗色の髪の毛の少女。並列世界をさ迷っている化け物を浄化と称して殺している、管理人の一人。

黒いコートを羽織り、中に白いランニングシャツを着ていて、十字架のアクセサリを首から下げている。マイペースな性格で気まぐれに色々な行動を起こす。

専用武器は、『クローズ・ギロチン』という全長2メートル近い巨大な斧。非常に切れ味も良く、ダミー・カッターのナイフをも切り落とすしてしまう。

さらに、投げるとブーメランのように手元に戻って来る特性がある。さらに、投げるとブーメランのように手元に戻って来る特性がある。

シグマ・レイティーナ

アスタリスクと対立する管理人で、並列世界をさ迷っている化け物を殺す事はしない変則的な存在。

髪は所々赤みがかつた黒で、ヘアピンをしている。

着ている衣装は黒い学校の制服に近い。

アスタリスク達に、並列世界を支配している『アブソール・ワールド・バインダー』を倒すのは不可能と言い切る。

専用武器は、『ジャスト・ストライク』と言う巨大なハンマーで、少しでも触れた物を無条件に吹っ飛ばす特殊な特性を持っている。

柳川 瑞穂（柳川 みずほ）

オカルト研究会の新人部員で、黒川が設立した甲虫同好会の数少ないメンバーの一人である。

何故か男装が趣味であり、隠せる範囲まで男性を装っている。

髪は、男装をするのに余り長くできないので、セミロング。

基本的には、男子の制服を着ている。

本人曰く、女子のスカートは、どうも恥ずかしいらしい。

さらに、一人称のオレは、男装をしていく過程で、いつの間にか定着したらしい。

専用武器は、『リメイン・ツリー・ブレイド』という木刀。

モンスターブック

ダミー・カッター

並列世界に最も多く生息していると考えられる、ダミー系の化け物の一種。

主に近距離戦闘を得意とする。

両手首に付いているナイフのような刃物の切れ味は異常に良い、下手をすれば指を切り落とされるので注意が必要。

弱点と考えられるのは、人間の顔面に当たる部分の空洞。

そこで体の全てをコントロールしていると考えられる。

つまりは、空洞を攻撃すれば、ダミー・カッターを倒す事が可能である。

ダミー・サターン

並列世界に最も多く生息していると考えられる、ダミー系の化け物の一種で、ダミー・カッターの変異種だと思われる。

ダミー・カッターを何体も引き連れて行動しているのが目撃されている事から、ダミーのリーダー格だと思われる。

ダミー・カッターよりも一回り大きく、チェーンソーが特徴的。

手に付いているチェーンソーの切れ味は、ダミー・カッターの刃物を遥かに越える。

ビルを切り倒したという目撃情報もある。

弱点は、ダミー・カッターと同じ、人間の顔面に当たる部分の空洞である。

ダミー・ハウンド

並列世界で一番多く生息していると考えられるダミー系の動物型の化け物。

犬のように四足歩行で、体格も犬に非常に近いことから、元々は捨て犬だったと考えられる。

顔の端まで口が裂けており、木製の体とは対照的な輝かしさを持った金属の歯がある。

この歯で、目に映った獲物にひたすら噛み付こうとする。

この歯の鋭さは、ダミー・カッターをも凌ぐ。

さらに移動速度はダミー系のなかでも一番で、とにかく数が多い。

弱点は得に分かっていない。

だが、とりあえず攻撃すれば倒せる。

トーテム・ウィッチ

ダミー系の亜種だと考えられるトーテム系の化け物。

数少ない武器を持たない化け物で、呪術を使ってくるのが厄介。

呪術をかけられた人間は、負の感情に侵され、精神崩壊のような状態にされてしまう。

その際に、この化け物はその人間の首を絞めて殺す。

弱点はダミー系と同じ頭だと考えられるが、実際の所は正しいか分からない。

しかも、呪術は防ぐ方法が今だに不明なので接近は難しい。

ただ呪術の対象は一人だけなので、罠を使って接近することはできる。

しかし、一人で倒すには依然として難しい相手である。

オッド・ボクサー

並列世界で死んだ人間がなると言われるオッド系の化け物。
寺岡の友人の北沢治郎が、化け物と化した姿である。

その姿は、生前の北沢がなりたがっていたボクサーに近い。
殴る相手を探して並列世界をさま迷っていた。

岩でできたグローブのような武器を装備している。
目に映った相手は無差別に殴る性質がある。

弱点は、人間で言う心臓。

オッド系の化け物は、まだ人間に近い形をしているので心臓を狙うのが手っ取り早い。

頭を狙ってもいいが、オツド系は隙を突くのが大変なので、心臓を狙うのがいいだろう。

オツド・ゼリーフィッシュ

並列世界で死んだ人間がなると言われるオツド系の化け物。
冴被渚の妹の冴被乙佳が、化け物と化した姿である。

その姿は、上半身が人間、下半身がクラゲという異様な姿をしている。

彼女が生前に自分の事をクラゲのようだと言っていた事が、彼女をこの姿にした原因だろう。

その下半身から生えている触手の中には、刃物が大量に仕込まれている。

自分の意志で体を動かすことができないので、他の化け物と違い、機動性がやや鈍い。

目に映った生き物をひたすら触手で切り殺す。

こちらも弱点は心臓。

ただ、心臓を持っていて本体はクラゲの笠の上に付いているので、攻撃するには笠の上に乗らなければならない。

さらに、笠の上でも触手は届くので十分注意が必要。

くプロローグ

「ねえ、並列世界って聞いた事ある？」

あまりクラスに馴染めないで一人で座り込んでいた時、長髪のクラスメートの女子の一人がこう言った。それは、クラス替えをした日の放課後に入ったばかりの教室での出来事だった。

俺、寺岡光輝（てらおかひろてる）は帰宅部所属の得（とく）にこれといった取り柄も無い、平々凡々とした逆茂木（さかしろぎ）の高校二年生だ。

こんな俺に話し掛けて来る奴はあまりいないし、しかも女子それごととなると嫌でも印象が強かった。

「あー、それは俺に言ってるのか？」

一応、確認してみる。

「ええ、もちろん寺岡君：貴方の事」

「…まあ、そうだよな」

今、この教室にいるのは、俺とこの女子と、他のクラスメイト合わせて七人だった。

しかも、残りの五人は話に夢中になっていて、こちらに気付いてす

らないようだ。

「えーと…並列世界？聞いた事無いな」

その女子の期待を裏切ってしまったかもしれないが、俺は正直に答えた。

「じゃあ、教えてあげるわ」

「へ？」

「多分…貴方の救いになるだろうから」

「そ、そうか…？」

予想外の反応だった。
女子というのは話が合いそうもない異性には、結構冷たい態度を取るものだと思っていた。

とりあえず、俺は彼女の話を書くことにした。

「並列世界は…ある日、突如として出現する、私達が住んでいる次元とは違う次元の世界の事よ…」

「えーと…俺達が住んでいる違う次元の世界？」

俺は、予想外の言葉返って来たので少し返事に困った。

この女子…俺の事をからかっているのか？

それとも、ただのイタい子なのか？

どちらにせよ、言っている事がよく分からなかった。

「そうよ。この並列世界の存在自体は噂なんだけど…」

「へ、へえ…そうなんだ」

信じる気にはなれなかった。

俺はどちらかと言えば、噂とかは信じない方だから。

「噂では自分を見たことがある場所で、見たこともないような化物に追いかけて回される…」

「…ば、化け物？」

「そう、この世にいるものとは思えないような生物…そう言われて
いるわ…」

「うわ…マジで？」

「ええ、所詮は噂だけど…」

「…そうか」

なんだかんだいってもやつぱり噂か。

「絶対に並列世界が存在するなんて言い切れないけど、私は並列世界は存在すると思う…」

だから寺岡君、貴方も気をつけた方がいいわ…」

「それは…俺が並列世界に迷い込むとでも言いたいのか？」

「今は、私の勘…何の根拠もないわ…」

でも、私は貴方が次の犠牲者になるような気がして仕方がないの…」

「犠牲者？どういう意味だ？」

「気にしないで、こっちの話だから…」

その女子はその場から立ち去ろうとした。

俺は、今思った事を率直に聞いた。

「待て、一つだけ教えてくれ！

お前…何者なんだ？」

その女子は少し笑って答えた。

「そういえば、言ってなかったね…」

私はオカルト研究会の副部長であり、貴方のクラスメートの川村ひより（かわむらひより）…」

そう言った彼女は、俺の前から立ち去った。
彼女の後ろ姿は、あっという間に廊下に吸い込まれて行った。

「オカルト研究会の川村ひよりか…」

外を見ると、もう夕方頃になっていた。

「よし、帰るか…得に用事もないしな」

とりあえず俺は暗くなる前に家に帰る事にした。

だが、この時の俺は知らなかった…

川村ひよりの勤が当たってしまう事になるとは…
増してや、それがこの後にすぐに起こるなんて…知るよしもなかった。

第一話 パラレルワールド

外の景色は今、夕焼けの色に染まっている。

俺はいつものように、高校から自宅への帰り道を辿っていた。

いつもと違うのは…クラスメートの川村ひよりから並列世界の噂を聞いた事だ。

<私は並列世界は存在すると思う…

だから寺岡君、貴方も気をつけた方がいいわ…>

<今のは、私の勘…何の根拠もないわ…

でも、私は貴方が次の犠牲者になるような気がして仕方がないの…

>

彼女から言われた言葉が、俺の頭をぐるぐると回っている。
なんだかとても落ち着けなかった。

「気をつけた方がいいって言われてもな…

何に気をつければいいんだ？」

俺は独り言を言った後、ため息をついて空を見上げた。

ただ赤い空が広がっている。

とても真っ赤な空が…

ん…？真っ赤な…空？
何かがいっつもとは違うような気が気がする。

夕焼けで空が赤く染まる事は当たり前前の事だけど、今日は何かがおかしい…

俺は気付いてしまった。
空が…いつもより赤過ぎる。

さらに、夕方頃だというのに、夜のように薄暗くなっているのにも気がついた。

しかも、夕方にしては人通りが全くない。
これは絶対にありえない…

「…」はどっだ？」

すると、どこからか悲鳴が聞こえて来た。

「うわああああ！！」

く、来るなあああ！！」

「…！！」

悲鳴が聞こえた方に顔を向けると、そう遠くないところに見覚えがある人間が怯えながら逃げようともがいていた。
元同じクラスメートだった、北沢治郎きたざわじろうだ。

そして、彼の目線の先には…
見たことがない化け物がいた。

一言で言うと、操り人形のような化け物だった。

木の体には、返り血のようなものがついていて、人間の顔に当たる部分には、大きな穴が一つ空いているだけだった。

そして、手には刃物らしきものが握られていた。

その時、俺の頭にある言葉が浮かんだ。

<噂では自分は見たことがある場所で、見たこともないような化け物に追いかけて回される…>

「まさか…これが川村が言っていた並列世界なのか？」

ここが並列世界で、川村が言っていた事が本当ならば…
あの見たことがないような化け物がいる事もつじつまが合う。

並列世界は本当に存在した…

それはそうと、北沢がどう考えても危ない。

「おい北沢！！大丈夫か！？」

俺は真っ先に声を掛けた。

「て、寺岡か！？頼む、助けてくれ！」

「ああ、もちろんだ！

早くこっちに逃げて来い！！」

しかし、北沢は立ち上がろうとした勢いで転んでしまった。

「うわっ！！」

その後ろで化け物の手が振り上げられた。

「止めろおおおおお！！！」

容赦無く化け物は北沢の背中を引き裂いた。

「ぎああああ！！痛い！！助けてくれえええ！！！」

化け物はしつこく北沢の背中をえぐり続けた。

その度に、辺りに返り血と断末魔の叫び声が飛び交う。

返り血が俺の顔にかかった。

それは生暖かった。

間違いなく本物の血だ。

「そんな…嘘だろ、おい…」

北沢の背中からありとあらゆるものがえぐり取られてゆく。

「うっ…！」

俺は思わず吐きそうになった。

内臓やら骨やらが見えて来たからだ。

「て…らお…か…たす…け…」

段々血の吹き出る量と、叫び声が弱くなっていき…やがて、止まった。

化け物が握る刃物に滴る血。

背中から中身を掻き出された変死体。

これが意味するのは、目の前で仲が良かった知り合いが殺されたという事…

「うわああああああああああああ！！

嘘だ！！絶対嘘だ！！

こんなの認めない、絶対に認めない！！」

しかし、目の前にあるのは間違いなく死体。少し前まで生きていた友人に間違いはない。

「くっ…なんで…なんでこんな事に…！？」

化け物がこちらを振り返った。

その顔には、穴が一つ。
そこにあるのは、ただ永遠と続く空虚な空間だけだった。

そして、その生気が感じられない化け物が、俺に向かって迫って来た。

俺は思わず後退った。

「お前…これ以上俺から何を奪う気なんだ…!？」

俺に…俺にこれ以上近づくなああ!!」

その足に何かが当たった。

…錆びかけた鉄パイプだ。

俺は咄嗟にそれを手に取った。

それと同時に、ある考えが浮かんだ。

「そうだ…あの化け物を…殺してやる」

俺の中から憎しみと殺意がどんどん湧いてくる。

俺は鉄パイプを構えて、その化け物に突っ込んでいった。

「覚悟しろよ…」

この人形野郎お!!」

俺は化け物の頭を思いつ切り殴りつけた。

殴られた化け物は、唸り声のような声を発してよろめいた。

攻撃が効くと確認できた俺は、何度も化け物を殴った。

「この…化け物め…!」

くたばりやがれ!!」

化け物の傷口からは黒い液体が流れ出ている。

おそらく、人間の血にあたるものだろう。

だが、その時の俺はそんな事など気にも留めなかった。

目の前の化け物を殺す事しか頭にない。

「この!!このおおお!!」

許さねえ!絶対許さねえ!!」

響き渡る鈍い音、化け物を狂ったように殴り続ける自分の姿…
自分でも悍ましい光景がそこにはあった。

遂には、俺は化け物を殴り倒した。

「これで…終わりだ!!」

俺は化け物の顔に鉄パイプを突き刺した。
何か裂けるような音と共に、黒い液体が勢いよく吹き出す。

俺は何度も化け物の顔をほじくり回した。
その度に化け物の体が痙攣するかのよう振るえた。

やっと俺が手を止めた時には、もうその化け物が動かなくなっていた。
俺はひどく息が上がっていた。

「な、なんとか…倒せたみたいだな…」

周りを見ると、黒い液体が飛び散って真っ黒になっていた。
多分、全部化け物を殺した時に出たものだろう。

そして、無惨に切り裂かれた北沢治郎の死体がある。

「北沢…助けられなくて、すまなかった…」

俺は北沢の死体の前で、うなだれた。
今頃になって涙が出てきた。

なんだか罪悪感で一杯だった。

「うう…なんでだ、北沢！」

なんでお前が死ななきゃいけなかったんだ…！！」

そんな中、化け物と北沢の死体が消え、夕焼けは元の自然な明るさを取り戻していた。

そう、俺は皮肉にも元の世界に帰ってきていたのだ。

第二話 レジスタンス

並列世界から生還した翌朝、俺は今だに現実を受け止められずにいた。

友人の一人が、自分の目の前で化け物に殺された事。

そして、その化け物を俺が殺した事。

「違う…あれは夢だ…
あんなの夢に決まってる…」

何度も自分に言い聞かせるが、あの鮮明な記憶は間違いなく現実のものだった。

あの生暖かい返り血。

友人の断末魔の叫び声。

内臓や骨がえぐり出された友人の変死体。

そして…化け物を殴り殺したあの感触。

いくら否定しても、すべて現実には変わりはなかった。

その後、俺は学校には行ったものの、ほとんど授業に集中できなかった。

そして、気が付いた時には放課後になっていた。

昨日と同じように俺は一人でした。

けれど、今はクラスに馴染めないで一人で座り込んでいた時とは違う理由だ。

「寺岡君…どうしたの？」

川村ひよりが声をかけてきた。

「あ、川村…」

「…気分でも悪いの？」

もしかして…私の話のせい？」

「……………」

なんとなく気まずい空気が流れた。

「あ、やっぱりそうなのね…」

昨日は変な事言って…」

「いや、違う…お前のせいじゃない。
並列世界には行ったけど…」

「…!!」

川村は不意をつかれたように驚いていた。

「て、寺岡君…貴方は死人なんかではないわね？」

「俺が死人だったら、こんなところなんかいないよ」

「そ…そうね」

川村は俺が並列世界から生還した事に驚いているらしい。

まあ、あの状況で戦う発想がなければ死んでただろうけど。

「俺は死ななかつたが、元クラスメートの北沢って奴が化け物に殺
されてさ…」

俺は思わず、その化け物を殴り殺した…」

「それなら…気分が悪くて当然ね…」

「まあな…」

それからいきなり、川村は真剣な眼差しで俺を見てきた。

「な、なんだよ…?」

川村に見詰められ、思わず目を逸らした。
女子に見られるのは、どうも苦手だからだ。

「その話…今から詳しく聞かせてもらえないかしら?」

「え、ああ、いいけど…?」

川村の顔がパツと笑顔になる。

「ありがとう…」

じゃあ、私について来て」

「あ、ちょっと…どこに行くんだよ!」?

川村は、俺の手を掴んでぐいぐい引っ張っていく。

「…オカルト研究会の部室よ」

「だからって、そんな引つ張んなくてもいい…
…っ！！」

俺は重大な事実気付いた。

女子と手を繋いでいる。

誰がどう見ても、間違いなく繋いでいる。

多分、女子と手を繋ぐのは幼稚園以来だろう。

要するに、とても恥ずかしいのだ。

「あー、川村さん？」

「ん？寺岡君、何？」

「ちょっと手を繋ぐのは恥ずかしいんだけど…」

「えっ…！？きゃあっ！！！」

「…っわっ！！」

川村が、手を離すと同時に俺を地面に突き飛ばした。

俺は顔面から見事に着地。

川村の顔がみるみる真っ赤になる。

「あ…えーと、ご、ごめんなさい…！
私ちょっと話に夢中になりすぎて…」

「全然いいけど…
急に突き飛ばしたりするなよ」

俺は額からだらだらと血を出しながら答えた。
川村が心配そうに俺を顔を見つめている。

「ちょ…寺岡君、大丈夫!？」

「多少痛いけど、大丈夫だ…」

「いいえ、駄目よ…
ちょっと動かないで…」

「え…か、川村…!？」

川村が俺の額に絆創膏を貼ってくれた。

「あ、川村…ありがとうな」

「ううん、気にしないで。
私が勝手にした事だから…」

川村はちよつと照れ臭そうに言った。

「じゃあ、オカルト研究会の部室に行きましょうか…」

「お、おう…」

「ここがオカルト研究会の部室よ…」

「へえ…意外とちゃんとした教室なんだな…」

オカルト研究会の部室は、大きな空き教室だった。使っていない多目的教室か何かだろう。

「一応、オカルト研究会は、生徒会公認の部だからね…」

「なつ、生徒会公認!？」

「生徒会長が部長のお友達らしくて…」

「おいおい、そんなんでいいのか生徒会!？」

友達が多いに越した事はないってよく言うけど、こんなところで役に立つとは…

「とりあえず入って…」

こんなところで立ち話もなんだから」

川村が部室の部屋のドアを開けた。

中は予想に反して、普通の教室だった。

そして、見覚えがある二人組が居た。

「黒川先輩に、忍!？」

「あれ?寺岡じゃないか!

やっぱり、甲虫同好会に入る気に…」

「いや、違いますよ!！」

今俺と話しているのは、黒川くろかわ白刃しろは先輩。

後輩を甲虫同好会に入れようと必死である、高校でも有名な変わった先輩だ。

「あ、光輝！」

…なんでこんな所に？」

「ああ、こいつにちょっと呼ばれてな…」

「何？光輝って…こういう根暗な子が好きなの？」

「それも違う…！」

今、俺をからかっているのは、俺の数少ない女子の幼なじみの三波みなみし忍しのぶだ。

そういえば、この二人…オカルト研究会の部員だったんだな。

「あ、寺岡君…この二人とは知り合いなの？」

「まあ、そうだな。

小学校からの幼なじみと、

しつこく同好会に勧誘してくる先輩ってところだな…」

「あ…そうなの？」

川村が意外そうな顔をして言った。

「お互いに認識はあるみたいだけど…」

一応、紹介はしておくわね…」

部長の黒川先輩と、情報収集係の三波さんよ…」

「ぶ、部長!？」

黒川先輩部長なんですか!？」

俺の記憶が正しければ…黒川先輩は、甲虫同好会の部長だったはずだった。

「え?僕は虫だけじゃなくて、オカルト関係も好きなんだが…それじゃ駄目なのか?」

「いやいや、駄目も何も…」

先輩が立ち上げた、甲虫同好会はとうしたんですか!？」

「大丈夫、掛け持ちだし」

「か、掛け持ち!？」

「部員少ないし、先輩会長も認めてくれてるしね」

「また、生徒会長のお友達権力ですか…」

生徒会長の許可があれば、掛け持ちができるらしい。

あの必死な甲虫同好会の勧誘はなんだったんだか。

「ところで、忍はなんでオカルト研究会に?」

「あたしは、職業柄かな？
ほら、巫女としての知識を身につけるにはここがもってこいじゃない？」

「…神仏とオカルトは違うと思うぞ？」

忍は波川神社の神主の一人娘、言うならば巫女さんだ。
俺も小さい頃、何度もお参りに行ったのを覚えている。

「ところで…光輝はなんでここに来たの？」

「あ、すっかり忘れてた…」

「入部希望かい？」

君ならもちろん大歓迎だよ！

ついでに、甲虫同好会でも入らないかい？」

「いや、入りませんよ！！」

先輩は、もう一人寂しくゲーセンでムシキングでもやって下さいよ！」

「そ、そんな…！？」

黒川先輩は異常にショックを受けていた。

高校三年で今だに、ムシキングやっている人は先輩ぐらいだ。
せいぜい中学生で卒業しろよ。

「あー、先輩のせいで話途切れちゃったな……」

「いいわ、寺岡君…続けて」

「実はな………」

「え、並列世界に行った!？」

「多分…そうだと思います」

黒川先輩は、少しの間をおいて言った。

「…そうか、これで4人目か」

「4…人目？」

「オカルト研究会が確認できてる、並列世界に行って生還した人間の数だよ」

「え、たった4人ですか？」

生還したのはたったの4人。

つまり、それ以外の人達は…

もし、帰って来れなかったらと思うとぞっとする。

「そして、最初に生還できたのは…他でもない僕なんだ」

「先輩がですか!？」

意外過ぎる。

黒川先輩なら、ぼけっとしててすぐ殺されそうだし。

「僕は寺岡と違って、逃げ続けてたら帰ってきてたんだよ。それから、しばらくは外に出るのが怖くて嫌だったけど…」

「はあ、そうですか…」

という事は…先輩みたいに逃げ切る事も可能って事ですか？」

「多分、そうだろうね」

「それなら、逃げた方が楽そうですね！」

あんな化け物の相手をしなくていい程ありがたい事はない。

「確かにそうだけど、それはそれで問題があるんだ」

「問題って…？」

「僕の経験上の話だけど、逃げ切った場合は、またすぐに並列世界に迷い込みやすくなるみたいなんだよ…」

「逃げるのも可能だけど、それなりのリスクを負う…って訳ですか？」

「まあ、そうなんだけど…」

逃げた以前に、一度迷うとまた並列世界に迷い込む可能性が高いみたいなんだ」

「うわ…マジですか？」

「そうだ。现阶段では、戦い続けるしかないんだ」

思ったよりも、現状は深刻だった。

これから生存を賭けた戦いを続けたいいけないなんて…

「だから、僕はオカルト研究会と称して並列世界対抗組織を創ろうと思ったんだ。」

人数が多ければ、より多くの情報を、より多くの人間が知る事ができる。

並列世界から、皆で生き残るためにね…」

「黒川先輩…」

「だからさ、寺岡も並列世界に行った訳だし…オカルト研究会に入ってくれないかな？」

俺の中の答えは一つだった。

「わかりました、一緒に戦いましょう！」

俺はこの人達と共に戦い、絶対に皆で生き残る。

「さすがは僕の後輩だ！」

君がいれば、とても心強いよ」

「やった！光輝が仲間なんてうれしいよ！…！」

「寺岡君…本当にありがとう」

「いやいや、皆しておおげさだな」。

俺は大した奴じゃないって！」

こうして、俺は並列世界対抗組織の一員となった。

第三話 ダミー・フェスティバル

俺がオカルト研究会に入って丸一日が経った。

俺はその日の授業が終わると、

真っ先にオカルト研究会の部室に向かった。

俺は、部室の扉を勢いよく開けた。

「どうも、こんにちはー」

「あ、寺岡君…」

「おっす、光輝！」

初日から来るとはなかなかいい心掛けだね！」

現在部室に居たのは、川村と忍だった。

「あれ？黒川先輩は？」

「部長なら…」

多分、部員勧誘だと思うわ…」

「あ…そうか。」

でも、あの人…部員の勧誘できるのか？」

黒川先輩は、言うならばかなり口下手だ。
俺も初めて先輩に甲虫同好会に勧誘された時、半分ぐらい意味が分からなかった覚えがある。

「光輝！そんな事よりあたしの話を聞いてよ！」

「え、ああ…なんだ？」

忍は昔から下らない話を、よく俺に愚痴る。
今日は何を話すつもりなんだろうか。

「昨日ね、お賽銭箱に17円しか入ってなかったんだよ！」

「あー、中途半端だな…」

やっぱり下らない話だった。

しかも、この賽銭箱の話は、ほぼ毎日と聞かされている。

「この前なんか、捨て猫が6匹も入ってたんだよ！
皆、本来の神社の役目を分かってないよ！！」

「あの一、忍…？」

それ、おとといも聞いたよ…」

忍の話は、こういうパターンも数が知れない。

その時、部室の扉が勢いよく開いた。

「みんなー、ただいまー」

「あ、黒川先輩！

部員勧誘お疲れ様です！」

「部長…お疲れ様です…」

「お、黒川先輩！

部員の勧誘できましたか？」

黒川先輩は、苦笑いをした。

「今回も全然駄目だったよ…
やっぱり、並列世界を知ってる人はあんまりいないね」

「それはそうですよ。

地道にやりましょう、地道に」

「ははは…そうだね」

黒川先輩が戻って来た後、
オカルト研究会部員全員で、並列世界対策が始まった。

「寺岡、ちょっと見て欲しいものがあるんだが…」

「はい、何でしょう?」

俺は、黒川先輩から黒い表紙の本を渡された。

「これ…何ですか?」

「この本は、部員が並列世界で目撃した化け物の情報についてまとめた本…
いわゆる、モンスターブックってところだな」

「へえ、なかなか手が込んでますね…」

「重要な情報だからね。
また化け物に遭遇した時、それなりに対応できるようにしておかないと困るだろ?」

「なるほど、じゃあ見てみますか…」

一番最初のページを開くと、見たことがある化け物の絵が描かれていた。

「こいつ…!」

「ああ、この化け物は一番目撃数が多いんだよ。
僕達はとりあえず、ダミー・カッターって呼んでる」

「ダミー・カッター…ですか」

Dummy・cutler

日本語に訳すると、マネキンの刃物師。
俺にとって、あの化け物のインパクトは異常に強い。

「まあ、他にもいくつかあるから目を通しておいてくれよ?」

「はい、わかりました」

俺は、モンスターブックに目を通し始めた。

俺がモンスタースタックを全て読み切った時、外は夕方になりかけていた。

「うわっ！もうこんな時間になつてのか…」

「寺岡君…貴方、随分読み耽つてたわ…」

「そうみたいだな…」

今、部室に居るのは俺と川村だけだった。
忍と黒川先輩はいないから、多分先に帰つたのだろう。

「何で川村は残つてたんだ？」

「寺岡君を待つてた…
私が…鍵持つてるから」

「ああ、悪いな…
俺達もそろそろ帰るか！」

「そうね…」

俺と川村は部室に鍵を掛けて、玄関までやって来た。
靴を履きながら、俺は川村に言った。

「あ、川村！」

よかつたら、一緒に帰るか？」

「え…？私と一緒に…？」

川村が驚いた顔をする。

「あ、嫌ならいいんだけど…」

「嫌じゃないわ…」

さっきのは、驚いただけだから気にしないで…」

「そ、そうか…？」

「ええ…一緒に帰りましょう」

意外にも、川村は少し嬉しそうだった。

夕方の空の下、俺と川村は並んで道を歩いていた。そして、二人で色々と話していた。

「川村が初めて並列世界に行ったのはいつなんだ？」

「一ヶ月前ぐらいだと思う…」

最初は…逃げ切ったけど、

その三日後にも並列世界に遭遇したの…」

「へー、随分早いな…」

「その時は…武器を持ってたから、化け物を倒せたわ…」

「お、川村の武器って？」

「…鎖よ」

「く、鎖!？」

叩かれたら、なかなか痛そうだな…」

「大丈夫…寺岡君を叩いたりしないわ」

「ああ、そう願ってるよ…」

こつこつ感じで、ずっと二人で話していた。
家に帰る最後の分かれ道に差し掛かった時、川村が言った。

「寺岡君…私こつちだから」

「あ、そうか…」

「じゃあ、また明日な？」

「ええ…」

「また明日…会いましょう」

川村が反対側の道を歩いて行った。

俺は、手を振りながら川村の後ろ姿を見送っていた。

その時、俺は気が付いた。

川村が歩いて行った方の景色がおかしい事に。

その方角の空が異常に赤い。

まるで血の海のように…

そう、それはまるで…

あの並列世界に初めて行った時のようだった…

「…並列世界!？」

「という事は…川村が危ない!」

俺は急いで川村の後を追った。

「川村！！待ってくれ！」

「て、寺岡君…！？」

俺は何とか川村に追いついた。

川村は、並列世界が出現したことに気が付いていないようだ。

「川村、並列世界が…！」

「並列世界が…どうしたの？」

「今、ここに並列世界が出現したのが見えたんだ！！」

「…！！」

その時、建物の陰から化け物が何体も出てきた。

俺が最初に出くわしたダミー・カッターだった。

「出たな…ダミー・カッター」

俺は、モンスターブックのダミー・カッターの記述を思い返した。

『ダミー・カッター』

《並列世界に最も多く生息していると考えられる、ダミー系の化け物の一種。

主に近距離戦闘を得意とする。

両手首に付いているナイフのような刃物の切れ味は異常に良い、下手をすれば指を切り落とされるので注意が必要。

弱点と考えられるのは、人間の顔面に当たる部分の空洞。

そこで体の全てをコントロールしていると考えられる。

つまりは、空洞を攻撃すれば、ダミー・カッターを倒す事が可能である》

「よし、空洞を狙えば……」

「待って……寺岡君」

「え、どうしたんだ？」

「こいつらは……私が一人で片付けるわ」

「何、言ってるんだよ!？」

「だから、私が…こいつらを片付ける。

寺岡君は…向こうの奴をお願いするわ…」

「向こうって…?」

俺は川村が指を指した方向を見ると、また違う化け物がいた。

ダミー・カッターに似ているが、手にナイフのような刃物が付いておらず、代わりにチェーンソーのようなものが付いている。

モンスターブックに載っている、現段階では危険度が最高の化け物だった。

「ダミー・サターン…!？」

あんなのと…戦えてか!？」

『ダミー・サターン』

《並列世界に最も多く生息していると考えられる、ダミー系の化け物の一種で、ダミー・カッターの変異種だと思われる。》

ダミー・カッターを何体も引き連れて行動しているのが目撃されている事から、ダミーのリーダー格だと思われる。

ダミー・カッターよりも一回り大きく、チェーンソーが特徴的。

手に付いているチェーンソーの切れ味は、ダミー・カッターの刃物を遙かに越える。
ビルを切り倒したという目撃情報もある。

弱点は、ダミー・カッターと同じ、人間の顔面に当たる部分の空洞である」

俺は、近くにちょうど落ちていた鉄パイプを拾った。

「…ったく、人形祭かよっ!？」

川村:「ここは任せたぞ!」

「ええ…わかったわ。

寺岡君:「くれぐれも無理しないでね?」

「ああ、言われずともな…
いざという時は逃げるさ!」

俺はダミー・サターンに向かって走り出した。

俺は、ダミー・サターンの目の前まで来た。
この距離では、逃げようにも逃げれない。

「さて、どうするか…
勝てる気がしねえ…」

ダミー・サターンのチェーンソーが回転し始める。
そして、不自然な動きをしながら突っ込んできた。

「うわっ…！こっち来んな！」

俺は、咄嗟に左に体を移動させた。

それと同時に、ダミー・サターンが俺がさっきいた場所を切り付けた。
すると、地面に大きな亀裂が入った。

「くそ、当たったら一たまりもないな…
全く、川村も無茶言っぜ…」

俺は、切り付けた隙を狙って、ダミー・サターンに鉄パイプを振りかざした。

「せいっ!」

ダミー・サターがもう片方の手に付いたチェーンソーを突き出してきた。

「…っ!?!」

俺は咄嗟に鉄パイプで受け止める。
もちろん、鉄パイプは真っ二つに切り落とされる。

「しまった…鉄パイプが!」

勢い余ったチェーンソーが俺の肩を掠めた。

「う、痛えっ…!!」

「やっぱり駄目かよ…」

俺の肩にぎっくりと大きな切り傷ができた。

俺は傷口を庇いながら、化け物と距離を取った。

「くそ、やっぱり逃げるしかないのか!?!」

俺は逃げながら、周りに使えるものがないか見渡した。

そこで、あるものが目に留まった。

頭がもぎ取られたダミー・カッターの死体だった。

おそらく、川村が倒したのだろう。

「うわー、川村何したんだよ…」

でもこれは…使かもな！」

俺はダミー・カッターの腕を踏んで割り、腕に付いている刃物無理矢理外した。

意外にも、刃物には柄が付いていて、手を切る心配はなさそうだった。

それを手に取った時、後ろからチェーンソーの音が聞こえた。

「…うわっ！またかよ！！」

…しつこい奴だな！」

俺は振り返って、刃物を手に取って身構えた。

「…まったく、いきなり来たりしないだろうな！？」

俺の言うことに従うように、ダミー・サターンが物陰から飛び掛かってきた。

俺は後ろに下がって、迎撃体制に入った。

「く、やっぱりかよ！」

俺は、ダミー・サターンが次の攻撃を予測して、ナイフを構えた。

その直後、ダミー・サターンが俺に向かって両手を振り上げて迫って来た。

「大丈夫だ、寺岡光輝…」

お前ならいけるっ…!!！」

俺は咄嗟にダミー・サターンの足元に潜り込んで、攻撃を避けた。

「下の方がなら隙できる…」

これなら…!!！」

俺は、ナイフを化け物の喉元掛けて突き上げた。

しかし、ダミー・サターンは物凄い速さで腕を動かし、チェーンソーで攻撃を弾き返した。

「なっ…!?!」

俺は攻撃を弾かれ、後ろに弾き返された。
さっき切り付けられた肩の傷口が痛む。

「くっ…!血が…!!」

こいつの動きを少しでも動きを止められれば…!!」

ダミー・サターンが追い撃ちをかけるように、片腕をこちらに向けて突進してきた。

「まずい…このままだと殺られる…!!」

「うわあああああああ!!」

しかし、いつまで経っても化け物は襲って来ない。

「な、何だ…?!」

よく見ると、体に鎖が巻き付いている。

そして、向こう側から聞き覚えがある声が聞こえた。

「寺岡君…！大丈夫…！？」

「か、川村…！」

「…今のうちに攻撃して！

私がこいつを止められるのは…そう長くないわ…！」

「わ、わかった！」

俺は改めてナイフを構えてダミー・サターンに突っ込んだ。

「うおおおおおおおおおっ…！」

俺はダミー・サターンを押し倒し、頭目掛けてナイフを振り落とすた。

ナイフがダミー・サターンの頭を貫通し、黒い液体が飛び散った。

ダミー・サターンは刺された後、しばらくの間、黒い液体を吹き出しながら、ガクガクと震えていたが、やがて一切動かなくなった。

「やったみたいだな…！」

「…そうみたいね」

「くそ、肩が…痛っ…！」

「あ、寺岡君大丈夫…？」

俺は肩からかなり出血していたようだった。
痛みで、肩の感覚が無かった。

「痛みで肩の感覚がない…結構ヤバいかもな…」

「寺岡君…！」

その状態じゃまずいわ…
早く手当てしないと…！」

「そうか…自分が情けないよ…
勝手にこんな状態になっちまって…」

「いいえ…貴方は最後まで戦ったわ。
情けなくなんかない…」

川村は傷口に何か当て始めた。
応急手当てをするみたいだ。

「そう…なのか？」

「ええ…貴方は、私を守ろうとしてくれたわ…
それだけでも十分よ…」

「あはは…仲間を助けるのは…当…然だろ…？」

俺は段々意識が遠くなっていった。
遠くで川村の声が聞こえる。

そして俺は、睡魔に負けて、意識を失った。

気が付いた時、俺は見知らぬ部屋にいた。
清楚で、何だか落ち着く部屋だった。

「じじい…どこだ？」

すると、部屋の扉が開いた。

「あ、寺岡君…気が付いたのね…」

「川村…じじいは？」

「私の家よ…」

「まあ、そうだろうな……」

俺は川村の家で寝ていたようだった。

「悪いな、手間かけたみたいでさ……」

「いいえ……気にしないで。」

大した事はないし……」

ふと、横に置いてあるものに目が留まった。
それを見て俺はぞっとした。

「な……なんで、ダミー・サターンのチェインソーが……!？」

「寺岡君がああな化け物倒した後で……私が死体から奪ったの」

「あ、そうなんだ……」

川村がチェインソーを手に取って言った。

「でも、電源の入れ方が……全然分からないの。
やっぱり……人間じゃ使えないのかしら？」

「うーん…そうなのか？
ちよつと貸してくれないか？」

俺は川村からチェーンソーを受け取る。

大部分は、普通のチェーンソーとなんら変わりはないが、
どこにも電源らしきボタンだけが無かった。

「念じて動いたりするか？」

「いいえ…駄目だったわ。

私があつても…反応が全然無いわ…」

「ま、俺も駄目元でやってみるか…」

俺はチェーンソーの持って、動けと念じてみる。
すると、たちまちチェーンソーが高速回転し始めた。

「動いた…！！」

「な…！？」

チェーンソーから、すごい振動が伝わってくる。
このままだと落としそうだ。

「あ…危なっ！」

「寺岡君、一旦止めて…！」

「わ、わかってるって！」

俺は止まれと念じた。

すると、チェインソーは急に大人しくなった。

「…何で急に動いたりしたんだらう？」

川村がやつても、全然反応無かつたんだろ？」

「そうね…私には動かせなかつたわ」

川村は、何か考え込んでいるようだった。

「寺岡君…ちょっと聞いていいかしら？」

「ん、なんだ？」

「さっき並列世界に行った時の鉄パイプは…どこで手に入れたの？」

「足元に都合よく落ちてたんだよ。

それがどうかしたか？」

川村が俺の顔をまじまじと見はじめた。

「ねえ、寺岡君……」

「な、なんだよ……すごく顔が近いぞ……」

「貴方……並列世界になんらかの形で適應する才能があるんじゃないかしら？」

「て、適應……？」

「そう……私はそう思う。」

並列世界に行った時……貴方の足元に都合よく鉄パイプが落ちていたのよね……？」

「ああ、2回ともな……」

「そんな都合がいい事……普通ならありえる……？
私でも、鎖は常に持ち歩いてるぐらいだし……」

「た、確かに……」

そして、川村の推測は続く。

「それに……そのチェインソーも同じ事よ……」

貴方にしか…反応しなかったわよね…？」

「…ああ、そうだ」

「つまり…私が言いたいの…」

貴方には、並列世界になんらかの形で適応する力…

他の人間にはない才能があるんじゃないかしら…？」

「そんなの…偶然だ。」

俺にそんな事ができる力は多分ねえよ…」

俺は川村の家で、衝撃的な才能を持っていると推測された。

並列世界に適応する才能があるかもしれないと…

第四話 アナザー・レジスタンス

川村の家から出た俺は、暗くなった帰り道で、ずっと考え込んでいた。

今の俺は、他人から見るとチェーンソーを持った危ない人に見えかねないが、持って帰るには手に持つしかない。

「俺は…本当に適応する才能があるのか？」

俺は、川村から貰ったチェーンソーを見た。

俺だけがこれを動かせる…
ただ、それだけだ。

「まあ、考えたところで何も変わらないか…
さあ、帰ってさっさと寝るか」

「ただいま…」

家に帰ると、俺は小声でこう言っつて、部屋に直行した。チェーンソーを持ったままなので、家族に気づかれなくなかったからだ。

部屋に入って急いで部屋の鍵を閉める。

「はあ、とりあえずはこれでよしと…」

机の上にチェーンソーを置いた後、ベッドに横になった。そして、ダミー・サターンに付けられた傷口に手を当てた。

「ったく、今日は酷い目にあつたな…」

川村が治療してくれたけど、まだ痛いな…」

でも、川村の治療はなかなかのものだった。治療した後と前では、腕の調子がまるで違った。

本人曰く、看護の進路に目指す過程で身につけたらしい。

「それはそうと、あのチェーンソー、使えそうなんだが…使っにはちよつと嵩張りすぎだからな…」

俺はチェーンソーを手に取ってから、よくよくチェーンソーを見た。

「…どうにかならないのか？」

そう思ってチェーンソーに触っていると、チェーンソーが音をたて始めた。

「うわっ！なんだ!？」

すると、たちまちチェーンソーが消えた。

「な、消えた…!？」

まさか…俺がさっきどうにかならないって思ったからか!？」

俺はチェーンソーを思い浮かべた。

たちまち、手の平にチェーンソーが現れる。

「これなら…持ち運べるな」

俺は、チェーンソーを再び消した。

「川村の言う通り…俺には、適応する才能があるのか？
まあ、今はとりあえず寝るとするか…」

俺は明日の準備もせずに、そのままベッドで寝てしまった。

次の日、俺は朝早く起き、今日の勉強道具を調べていた。

「えーと、今日は数学に、英語と…」

突然メールの着信音が鳴り響いた。

「うわっ！誰だよ…
今、5時だぞ!？」

メールを確認すると、黒川先輩からだった。

『至急確認したい事があるから6時半に学校に来てくれないか？
あ、チエーンソーもちゃんと持って来てくれるといいんだが』

「黒川先輩か…」

6時半に来いって面倒だな…」

俺は仕方なく、早く学校に行く準備を始めた。

俺は6時半ちょうどに学校部室に着いた。
早速、部室に向かう。

「はあ…こんな朝から一体何の用なんだ？」

俺は部室の扉を開いた。

「黒川先輩、こんな朝から何の用ですか？」

「おお、寺岡！待ってたよ！」

「先輩、普通ならあのメール…絶対気づきませんよ？
たまたま早起きしてただけですからね…」

黒川先輩は、苦笑いしながら言った。

「いやー、ゴメンゴメン。」

早く確認したい事があったからね……」

「まったく…何ですか？」

「君が持つてるチェーンソー…ちょっと見せてくれる？」

「ああ、いいですよ。」

ちよつと待ってて下さい……」

俺は、チェーンソーを思い浮かべた。

すると、チェーンソーが姿を現した。

それを、黒川先輩が目を丸くして見ている。

「寺岡…君はチェーンソーを自由に出現されるのか!？」

「はい、何かできました」

「そうか…やっぱり寺岡にはあの可能性があるね……」

「あの可能性…?」

「そう…ちょっと待ってて」

黒川先輩は、ロッカーから何かを引っ張り出してきた。

『並列世界極秘資料』と書かれたファイルだった。

「黒川先輩…これは？」

「逆茂木高校並列世界対抗組織作成の並列世界に関する極秘資料だよ。」

一応、他の対抗組織からも情報を貰って作ってるから、世界的にも認められてる大事な代物だよ」

長くてなんだかややこしい。

俺には分からない事だらけだった。

「え、他の対抗組織…？」

それに…世界的に認められてるって？」

「ああ、まだ教えてなかったっけ…」

並列世界対抗組織は、世界各国のいくつもの高校に存在しているだけだよ」

「…世界各国!？」

「そう…並列世界の出現場所となるのは、この逆茂木高校周辺だけ

じゃないんだ。

日本中疎か、海外にだって出現するんだ」

「そ、そうなんですか!？」

世界で同じ現象が起こっているなんて、予想だにしなかった。

むしろ、この逆茂木高校周辺だけの問題だと思っていた。

「得に関わりが多いのは…国内なら、滝川高校とか城谷高校の対抗組織だね。

海外なら、アメリカ支部、中国支部、オランダ支部とかだね」

「あれ…？海外は支部でまとまってるんですか？」

「ああ、そうだよ。

分かりやすく言えば、日本人はどちらかと言えば、オカルトとか信じないだろう？」

でも、海外だと宗教とかの関係で、オカルトを信じる人の割合が多い気がしないか？」

「まあ、確かにそんな気が…」

「だから、考え方が割とドライな日本人に比べて、オカルトを信じる外国人は、かなり固まりやすいわけだ…」

まあ、日本人が危機感無いだけかも知れないけど…」

「はあ…なるほど…」

並列世界の存在は、思っていたよりも遥かに大きいものだとわかった。

そして、このオカルト研究会の存在も、大きく頼もしい集団に思えてきた。

「組織の事は、大体理解しましたが…さっきの話題は…？」

「ああ、並列世界に関する、極秘資料の話だったね！」

黒川先輩はいそいそとファイルを開いて、あるページを俺に見せてきた。

「この資料は、滝川高校と城谷高校と、その他海外の支部との共同で作られている資料なんだが…
そこに、君とよく似た力を使う人間がいたというデータがあるんだ。

この滝川高校の中城里沙なかしろさという高校生三年の女子さ」

「滝川高校の中城里沙…」

「一応、先輩に当たりますね」

「そうだな、僕と同年だし。
で、彼女は…並列世界に行く度に、都合よくハンドガンを持って戦ってるんだ。

寺岡の鉄パイプもなかなか都合よく落ちてたと思うけど、包丁なん

てそう簡単に落ちてる事なんて無いよね？

さらに、彼女は化け物から武器を奪い取る事もできたみたいなんだ」

「…武器を奪い取る？」

「そう…寺岡は死んだ化け物の武器を扱えるみたいだけど…」

その中城里沙は、生きている化け物から奪い取る事ができるみたいなんだ」

「生きたままって…」

「一体どうやって!？」

黒川先輩は、資料の違うページを見て言った。

「…本人曰く、化け物の腕を掴んで、外れろと念じるだけみたいなんだ。」

すると、化け物の腕から武器が外れて、自分の手の中に転がり込んで来る…らしいよ」

「それ…本当なんですか…？」

「信じられないなら、本人に会ってみるといいよ。」

同じ対抗組織の一員なら、他校の組織に行く事も少なく無いしね」

「な…直接会っ!？」

「ああ、会えるよ。」

徒歩15分程度で滝川高校に行けるし」

「あ、ここから歩いて行けるんですか!?!」

俺は、先輩の意外な言葉に驚いた。

さっきまで話していた、自分に似た力を持った人が近くいて…しかも会えるなんて…普通ならなかなか無いだろう。

「そこで、寺岡が並列世界に適應する才能を持った人間…つまり、中城里沙と同じ適應者なのかはつきりするよ…」

「適應者…?」

「そつだ。並列世界の道具を使ったり、並列世界において、無意識に望んだ事を現実にする能力を持った人間の事だよ」

「…お、俺がその中の一人だつて言いたいんですか?」

「まあ、僕らの勘ではね…」

とりあえず、そういう話がしたかったから早く来てもらったんだ。悪いね、わざわざ早く来てもらつて…」

「…いえいえ、大丈夫ですよ」

俺は部屋を後にしようとした。

すると、黒川先輩が急に喋りだした。

「あ、そうそう…」

今日の放課後なんだが…」

「え、なんですか？」

「中城里沙が来るからね」

「なっ…!?!?」

俺は、あまりの急展開に驚かすにはいられなかった。

放課後、俺はオカルト研究会の部室に向かった。
朝の話がどうも気になって仕方がなかった。

「もし、俺が適応者だったら…
何かが変わるのか？」

緊張を胸に、部室に入る。

「ど、どうも…失礼します…」

すると、聞き覚えが無い声が聞こえた。

この学校と違う制服を着た、ポニーテールの女子が一人座っていた。

「あら、貴方が寺岡君？」

「あ、はい。そうですが…」

「話は…多分聞いてるよね？
適応者の一人…中城里沙よ」

「え、貴女が!？」

「そう、寺岡君よろしくね！」

「は、はい…よろしくお願ひします…」

今、目の前にいるのが適応者の中城里沙。

俺にはこの人が、人間離れした才能を持っているとは思えなかった。

「あの…中城さん？」

「里沙でいいよ。」

それで、どうしたの寺岡君？」

「あ、じゃあ里沙さん…
貴女が本当に適応者という確信が欲しいないんです。
だから、何か証拠を見せてくれませんか？」

「なるほどね…私が特殊な力を持っているとは思えないと？」

「はっきり言ってしまえば、そうですね」

里沙さんは、少し考えた仕草をした後、こう言った。

「それなら、私の仕事に付き合ってみない？」

「仕事…って？」

里沙さんは、立ち上がって俺に言った。

「私の仕事は、この町のパトロールなの！」

「…パトロール？」

「そう！これ以上犠牲者が出ないように、私が毎日町を歩いているの！」

「なるほど…」

「だから、今から寺岡君も一緒にパトロールしようと思うの」

「え、今からですか？」

「もちろん！今から行くよ！」

里沙さんが俺の手を引っ張る。
本人はやる気満々だった。

「私のすごい所見せるから、ちゃんと見ててよね!!」

「は、はあ…分かりました」

そして、俺は里沙さんに連れられて、学校を飛び出した。

里沙さんに連れられて、才能者の事を知る為のパトロールが始まった。

第五話 アダプター/キーパー

今、俺と里沙さんは、町を歩いている。

「あの…里沙さん？」

「ん、何？寺岡君？」

「本当にこんな感じでパトロールになるんですか…？」

「そうよ、いつもこんな感じ」

「はあ、結構暇ですね…」

「そんな事ないよ！

だって、男の子とデートしてるようなものだもの」

俺は思わず咳込んだ。

急に、変な事いいやがった。

「げほっ…！！」

急に、な、な、なんてことですか！？」

「ふふ、寺岡君ったら…やっぱりかわいいー！」

「もう、からかわないで下さいよー！」

「あー、ゴメンね！」

寺岡君かわいいから、ちょっとイジメたくなったの」

「あ、そうですか…」

これだから、年上の女性は苦手だ。
ただ、目を合わせるだけでも恥ずかしくなる。

今も里沙さんの横を歩いていると、何だか変な気分になる。

「ねえ、寺岡君？」

「は、はい何ですか!？」

「腕組んでもいいかな？
せつかく町に来たし…ね？」

「え、ええ…!？」

益々、変な気分になってきた。

里沙さんは俺に一体何がしたいんだか。

「あ、嫌ならいいんだけど…」

「あ、いや、嫌ではないですけど…その…」

「じゃあ、いいよね！」

「な、なっ…!!?」

里沙さんが俺の腕に飛びついてきた。
腕に柔らかい感覚が伝わって来る。

「私、一度男の子とこういう風に腕組んで歩きたかったの！」

「あ、あ…そ、そ、そうなんですか…」

心拍数がいつもより増えているような感じがした。
そろそろ色々と限界だった。

「ねえ、寺岡君…」

もう一つお願いしていい？」

「な、な、な、何ですか？」

「キスしない?…なんてね」

「つつつ…!!!??」

見事に止めを刺された。
頭はもう、真っ白だった。

「もつ……無…理……!!」

俺は、里沙さんの甘い言葉耐え切れず、腕を振り払った。

「うわあああああああ!!」

俺はその場から全力疾走した。
その場にはいるのは、もう無理だった。

「ああ、ちよつと!？」

どうしたの、寺岡君!？」

里沙さんを見無視して、俺は全力で逃げた。
とりあえず、この人としばらくは一緒に行動したくなかった。

俺はある公園まで逃げて来た。
息が上がって、死にそうだ。

「うう…疲れた…」

俺は公園のベンチに勢い良く倒れ込んだ。

「熱い…もう歩けないぜ…」

その時、頭に冷たい物が当たった。
自動販売機で買ったジュースのようだ。

「大丈夫？ほら、ジュース買ってきてあげたから」

「あ、どうも。」

…って里沙さん!？」

横にいたのは、紛れも無く里沙さんだった。
いつからいたんだろうか。

「もー、寺岡君が逃げちゃったから、すぐに追いかけて来たんだよ
」!

「めっちゃ足速いですね…ジュースまで買ってるし…」

「実は私…元陸上部だから体力には自信があるの!」

「そうだったんですか…」

あ…:さっきは急に逃げたりしてすみません…」

「いやいや、私もちょっとからかい過ぎたと思っから、気にしなくてもいいよ」

俺は、さっきのパトロールの事を思い出した。

「あれ?俺が逃げてる間、パトロールはどうしたんですか?」

「もちろん中止。」

かわいい後輩を放ってなんか置けないもの!」

「…すみません」

「そんなのいいから!」

ほら、今から再開しよう!」

「は、はい!」

俺と里沙さんは、公園を後にした。

それから、約30分ぐらい経った頃、パトロールに変化が起きた。

「来るわ…!!」

「え…!?!」

里沙さんの様子がさっきまでと違っていた。

目の前の景色が段々薄暗くなってきた、
空が灰色に染まっている。

並列世界の出現だった。

「里沙さん…何で分かったんですか？」

「並列世界が出現する時、微かに目の前の景色が揺らぐの。
もし、貴方も適応者なら、こういう所に気をつけた方がいいと思う
わ」

「はあ、なるほど…」

里沙さんの手元から、いきなりハンドガンが出てきた。

「これが私の専用武器のハンドガンよ！
もう一つ、スコープ付きライフル銃もあるんだけど…」

「という事は…俺の専用武器っていうのはこれですか？」

俺はダミー・サターンのチェインソーを出現させた。
相変わらずの禍禍しさだ。

「これは…!」

「実は、ダミー・サターンから奪いました」

「という事は、専用武器ではないわね。」

専用武器は、適応者が自分で創り出せる武器の事を言うの。
まあ、専用武器が出せるまではそれでいいと思うけど…」

「へー、そうなんですか」

その時、ダミー・カッターが3体同時に突進してきた。

「うわっ!いきなり来た!」

「寺岡君、下がってて!」

里沙さんが俺の前に立って言った。
改めてハンドガンを構える。

「相手がダミー・カッター3体ぐらいなら、ハンドガンの弾3発

で充分ね！」

「り、里沙さん！？

それぞれに1発しか撃たないなんて、無理してカッコつけてませんか！？」

「カッコつけてはいるけど、無理してなんかないわ！」

里沙さんは、咄嗟に化け物達に近づき、ハンドガンの銃身で1体のカッターの頭を殴った。

その動きは、カッターよりも格段に速かった。

それが、カッターが鈍いだけなのか。

そのカッターは、殴られた勢いで地面に倒れ込んだ。

「さあ、喰らいなさい！」

銃口をカッターの頭部に向かって発砲した。

辺りに銃声が響く。

化け物の体が動かなくなる。

「まずは1匹！！」

その時、里沙さんの右と左の両側から、カッターが襲いかかって

来た。

しかし、里沙さんは動揺しなかった。

「そんなんじや、私は倒せないわよ!!」

里沙さんは、その場にしゃがんでカッターの攻撃を避けた。

それと同時に、2体のカッターの足を蹴り飛ばした。
カッターはバランスを崩して無防備になる。

「よし、これで終わりよ!!」

里沙さんは、空いているもう片方の手に、もう一つハンドガンを出
現させた。

そして、カッターに向かって走りながら、二つの銃口を2体のカ
ッターのそれぞれ頭部に向けて発砲した。

二つの銃声が、戦いが終わった事を告げる。

今までの光景を見て、俺は思わず呟いた。

「里沙さん、スゲエ……」

「ふふ、そうかしら？
最初に言った通り、弾は3発で充分だったでしょ？」

戦いを終えた彼女は、俺の方を見て笑顔でそう言った。

その後も、パトロールは続き、何度も並列世界に行った。

そして、俺と里沙さんが今いるのは、三度目に出現した並列世界だ。

「寺岡君、援護お願い！」

「分かりました!!！」

そして今は、ダミー・サターンと、それが率いる2体のダミー・カ
ットラーとの戦闘の真っ最中だ。

俺は2体のカットラーを、チェーンソーの相手をしていた。

里沙さんは、ライフル銃のスコップを里覗いている。

「この化け物オー!!」

俺はチェーンソーでダミー・サターンに突っ込んだ。

「うおおおおおおおおおおおおおー!!」

俺とダミー・サターンで鏝ぜり合いになった。

その隙に、里沙さんが引き金を引いた。
見事に、ダミー・サターンに命中し、勢い良くぶっ倒れる。

「うわ、すごい…」

ダミー・サターンを一撃で…」

「ふふ、当然よ!

私のライフル銃の威力をナメてもらっては困るわ!!」

だがその時、倒したはずのダミー・サターンが起き上がった。

「寺岡君、後ろ!!」

「な…うわっ!?!」

今にも切り付けられそうになった時だった。

ダミー・サターンの胴体に槍が刺さった。

そして、その槍は胴体から抜けたと思った時には、頭を見事に切り裂いていた。

- 刹那の沈黙 -

今さっき、自分達を襲おうとしていた化け物が真っ二つにされている。

俺と里沙さんは、訳が分からず呆然と立ち尽くしていた。

「ど、どうなってるんだ…」

そして、化け物の死体の前に、神秘的な槍を持った、黒いコートを着た少女が立っていた。

彼女がダミー・サターンが殺したようだ。

「あ…もしかして、私達を助けてくれたの?」

「…ソウネ」

その少女は、機械的な声で里沙さんに答えた。

「アナタ…適応者ナノネ」

「な、なんでその事を!？」

「気配デ分ル…隣ノアナタモソウ…」

少女は、俺を見て言った。

「俺は…適応者なのか？」

「ソウヨ…ワタシ達ト同ジ気配ガスルモノ…」

俺は少女に聞いた。

「それなら、お前は何者だ？」

「ワタシハ…コノ世界デ戦ウ者ノ一人…
名前ハ…アスタリスク…」

「アスタリスク…」

「アナタ…変ッテルワネ…
ワタシ達、管理人ニ興味ヲ示スナンテ…」

「…管理人？」

「ソウ、ソレガワタシ達…
化ケ物ヲ浄化スル存在…」

少女は、背を向けて立ち去ろうとした。

「おい、待て！」

最後に一つ、答えてくれ！！
管理人って奴は、俺達の味方なのか！？」

「敵味方デ言ウナラバ…」

今八、味方ヨ…アナタ達ミタイナ同胞二八…手出シハナイ」

「俺達みたいな同胞…？」

「ソウ、ソレガ適応者と管理人ノ関係ナノヨ…」

謎の言葉を残し、アスタリスクは並列世界とともに消えていった。

この管理人という存在…

それが、並列世界出現の鍵を握っているなんて…

まだ、この時は誰も知らなかっただろう…

第六話 コモン・ザ・ストロンク

アスタリスクと名乗った少女と並列世界が消えて、しばらく経った。

「里沙さん…さっきの子は、なんだったんでしょうか…？」

里沙さんは、いつもより険しい顔つきで言った。

「私にも…よくわからないわ

でも、あんな子を見るのは初めてだわ…」

「…そうですか」

里沙さんみたいなベテランであっても、管理人というのは一度も見
たことがないらしい。

里沙さんは、額に手を当てて言った。

「あの子、本当に何者なのかしら？」

あなたたちは私達と同じ気配がする…って言ってたから、適応者で
はないみたいだけど…」

「あのアスタリスクって奴は…自分を管理人って言ってましたよ。」

とりあえず、管理人という人種である事にしません？」

里沙さんは、ため息をついて言った。

「そうね、これは皆に報告しないと…」

じゃあ、今日のパトロールはここまですね。

今日は戻って、黒川に報告しないと」

俺と里沙さんは急遽、逆茂木高校に帰ることにした。

高校に戻った俺は、黒川先輩に今までであったことを話した。

「なるほどね…」

君達は、管理人に会ったのか」

「もしかして…知ってるんですか？」

「ああ、知ってるよ。」

僕の知識を甘く見てもらうと困るよ」

「は、はあ…」

俺は、意外だと思った。

黒川先輩の頭はただ虫の事だけで一杯だと思ってた。

「今、僕が知っているのは…管理人は全員女子である事と、浄化と称して化け物を殺している事だね…」

黒川先輩は、ペン回しをしながら言った。

「あ、確かアスタリスクがそんな事を…」

「…アスタリスク？」

君が会ったという、管理人の名前かい？」

「多分、名前だと思います。」

俺が何者かと聞いた時に…」

「ふーん、珍しいね…」

黒川先輩は、そんな事は聞いた事がない…というような様子だった。

「僕が知る限りだけど…管理人は、基本的に自分から人間と関わる

のような事はしないらしいよ」

「…じゃあ、何で俺と里沙さんを助けたりしたんですか？」

黒川先輩は、苦笑いしながら言った。

「うーん、それはさすがにわからないな。

多分、君達が適応者だからじゃないかな？

適応者と管理人は、とても似た特性を持ってるし」

「あー、確かにそんなような事言ってた気がしますね…」

俺は、アスタリスクが言った言葉を思い出した。

《敵味方デ言ウナラバ…

今ハ、味方ヨ…アナタ達ミタイナ同胞ニハ…手出シハナイ》

何か引つ掛かる言い方だと、俺は思った。

今は見方という事は、何かあれば敵になるのだろうか？

同胞とは、どついう意味だろうか？

「あー、管理人か…」

考える程益々分からないな…

あ、そうだ黒川先輩…

俺、今からここで寝ます。

とりあえず、4時になったら起こして下さい…」

「ええ！？寺岡ちよつと！！」

俺は、そう言った後、部室の机に俯せになった。

黒川先輩の反論の声が聞こえたが、眠いので別に気にしなかった。

そして、俺はあつという間に睡魔に負けて眠りに堕ちた。

「寺岡君…4時だから…」

起きてくれないと…困る…」

俺は、どこからか聞こえて来る声で目を覚ました。

その声の主は、川村だった。

「あれ？何で川村が…？」

「実は…寺岡君を4時に起こすようにつて…部長に…」

「あー、なるほどね…」

黒川先輩が…逃げやがった。

俺を起こすのが面倒になったから、逃げたに違いない。

俺はさっと起き上がり、体を伸ばした。

「うーん…よく寝たな。」

ただの昼寝で待たせて悪かったな、川村」

「ううん、気にしないで…」

私も…あんまり予定ないし」

川村は、微笑して言った。

どうやら、本当に何も予定がなかったらしい。

俺は、スツと立ち上がると鞆を持ち上げた。

「さ、もう遅いから帰るか…」

あ、川村も一緒に帰るか？」

「ええ…ぜひそうさせてもらおう…」

俺は川村を連れ、学校を出た。

そして、いつもの通学路を川村と二人で歩き始める。

俺が初めて並列世界に遭遇したのも、この通学路である。

歩いていると、川村が急に話し掛けてきた。

「寺岡君…誰が私達を尾行してるわ…」

「…何だって!?!」

「寺岡君…どうする?」

「このまま走って…撒く?」

「それとも…返り討ちにする?」

俺はしばらく考えた後、結論を出した。

「よし…決めた。」

「正体も気になるし、返り討ちにしよう…」

俺と川村は、曲がり角に差し掛かると武器を構えて待ち伏せすることにした。

しかし、なかなか追尾して来た奴が現れない。

余りにも遅いので、俺は思わず呟いた。

「まさか…感ずかれたか？」

その時、背後で声がした。

「へえ、今回は気付いたか」

「なっ…！いつの間に!？」

俺達の背後に立っていたのは、茶髪で、同い年ぐらいの男だった。そして、彼は薄笑いしながら俺に言った。

「あんだ、中城といた適応者だろ？」

「フン…ずっと見てたぜ、中城と一緒に戦ってるどころとかな」

「…!!」

俺は、そいつと距離を取った。

化け物ではないとはいえ、油断はできなかつたからだ。

「お前は…何者なんだ？」

「おお、そういえば自己紹介がまだだつたな。

俺の名は、さへはらなせき 冴袮渚。

滝川高校の隣にある、城谷高校2年の演劇部部員だ」

俺は距離を取りながら、質問した。

「もう一つ、聞こうか…」

冴袮…お前はなぜ俺達を尾行していたんだ？」

「中城が新しい適応者に会つて言うから、どんな奴か拝みに来た
か見るためだけだ」

「…それ以外の理由は？」

冴袮は、ため息をついた。

「なんでビギナーはこう警戒心が強いんだか…
いや、化け物を前にしたらこれくらいは当然か」

冴袮は俺達に向き直る。

「寺岡と…川村だったか、お前らちょっとついてきな」

「…どういつつもりだ？」

「いいから来いよ。」

今から行いよ、今行かないと間に合わなくなるからな」

冴祓に言われて、川村と一緒にについて行ったら

いつの間にか周りには紅く染まっていた。

間違いない

「…並列世界！！」

「…どういう事かしら、冴祓さん」

川村がそう言うと、前を歩いていた冴祓が

顔だけこちらに向けて薄い笑みを浮かべながら返事をした。

「寺岡の戦い方は、この前見せて貰った。とんでも無く危なっかしくて、隙だらけで、見てるこっちがソワソワした
多分、適応者でない川村なら尚更そうだろう。」

「…だから？」

「あまりにも危なっかしくて怖いから、基本中の基本だが戦い方を教えてやる」

「…え？」

「ほら、そうこう言ってるうちに、敵さんが出てきたぞ？」

薄い笑みを浮かべたまま前を見る冴祓。

何かと思い、俺たち二人も前を見据えると化物が出現していた。もう何度も見た。木で出来たマネキンに手に2つ装着されたナイフ。

ダミー・カッターだった。

けど前に戦った時とは決定的に違う点が在った。

「数が多いな…」

ガシヤガシヤと蠢く気味の悪い物体がこちらに向けて
なんと4体。

4体もこつちに向かっていた。

「数が多いわね…一度退いた方が…」

「退く？何言ってるんだよ、むしろ好都合だ。

常に敵が一体な訳がねえだろ。一人で複数を相手にする事もある
筈だ。

手本を見せてやる」

「それにしたって4体も、あまつさえ武器も持たないで…」

「出来るさ、武器も常に持つてる訳もねえ」

「そ、それは幾らなんでも無謀だろ!？」

どれだけ腕に自信があるかは分からないが、アレを4体も一遍に敵
に回すのは

あまりにも危険だ。武器を持ってようといまいと関係ない。
アレは危険だ。

「良いからそこで黙って見てろ。こつち来んなよ。
足手まといは御免だからな」

そう言つてポケットに手を突っこんだまま、カッターの元へと歩み寄る冴抜。

そして4体のカッターがそれぞれ襲いかかる。

「良いか？こいつらの動きは鈍いうえに、攻撃が単調かつ直線的だ」

バラバラに襲いかかるカッターの8本の刃を次々と難無く避けて行く冴抜。

縦横斜め突き、様々な攻撃を全て避けて器用に避けて行く。

上半身を逸らし、身体の重心を右に寄せ、左に寄せ、半歩退き器用に避けていく。

「冷静になつて攻撃を見れば、予備動作でどう攻撃してくるか分かる」

そう言つて、腕を振り下げて隙だらけになつた1体のカッターに狙いを定めて、

冴抜は顔面に、下に振り下げる蹴りを入れた。

するとなんとこの事か、群がってたからか蹴り倒された1体のカッター以外のカッターもドミノ倒しに倒れて行った。

冴袂の足元で蠢いてるカッターと、

向こうで3体が蠢いているカッターとで二手に分かれていた。

「そして幾らなんでも分かっていると虽も思つが、カッターの弱点は頭だ」

頭を踏みつけてる足をもう一度宙に浮かせ、再び振り抜くと、

カッターの頭が黒い液体を辺りに撒き散らしながら潰れた。

「こうすれば死ぬ」

まずは一体。

そう言いたげな薄い笑みで、淡々と説明していく。

そして冴袂は、足元で絶命したカッターの両手首を踏み砕いた。

「獲物が無い時は、敵から奪う」

踏み砕いた手首のナイフを足先で弾き宙に浮かべ、手に取った。

何とも慣れたような手つき。

間違ひ無く手練だ。宙を舞う2本のナイフを手で掴むのに全く恐れも無く抵抗も無かつた。

そして次は2体一遍に襲いかかっていた。

両手を振りまわし、攻撃してくる2体のカッター。

それも難なく、次々と避けていく。

2体のカッターは全く考えずに攻撃しているのか、振り回している腕同士が勢い良くぶつかった。

そしてそこで出来た隙を、冴抜は見逃さなかった。

獲物を狙う蛇の様な鋭い動きで、一体のカッターの頭部に横からナイフを深々と突き刺した。呻き声を上げる間もなく、更にもう一体のカッターを倒していた。

更にまだ突き刺していないもう一本のナイフで、止めを刺したカッターの細い手首を切り落とした。

それを素早く手に取り、もう一体の隙の出来たカッターの頭部に突き刺した。

「出来る限り、無駄な戦い方はしない。弱点を一撃で突く」

速すぎた。

あまりにも速かった。

5秒にも満たない間に、2体のカッターを仕留めた。

- 次元が違う -

そう思わざるを得なかった。

「そして最後に1つ。これは丸腰だと不可能だが…」

そう言って、片手を振ると手に持っていたナイフが消えていた。

そしてそのナイフの行方は…

「接近戦の相手には、遠距離武器で戦うのが望ましい」

消えたナイフの行方は、最後のカッターの頭に突き刺さっていた。
た。

ガシャンという音を鳴らしながらカッターが崩れていった。

距離にして5メートル、素人がナイフを投げて刺さって当たる距離じゃない。

何度この場数を踏めばそこまでなれるのか、俺は疑問になった。

「まあ、基本はこんな感じだな」

パンパンと手を払って、こちらを向く冴被。

何事も無かったように、まるでこれか日常だという様に、相も変わらず薄い笑みを浮かべていた。

「……恐くないの？」

俺の隣に居た川村が、何かを探る様に冴被に尋ねていた。

「もう恐くねえな。慣れたからな」

軽く笑い飛ばす冴被。

そこに続け様に尋ねる川村。

「一体何度戦ってきたんですか…？」

「何でそんなに戦うんですか？」

それを尋ねた途端、一瞬冴祓の顔から笑みが消えた。けど、また直ぐにまた笑みを取り戻した。

「さて、何でだと思っつ？当たったら300円やるよ」

軽口を叩きながら、軽く笑い飛ばして、直ぐ返事が帰ってきた。けど、その返事を直ぐ返すことが出来なかった。

笑みが消えた途端、なんだか哀しいような感情を感じ取ったからだ。

「さて、帰ろうぜ。」

俺の何か釈然としない気持ちと裏腹に、空は綺麗な夕暮れに変わっていた。

第七話 シングル・ウォー

俺は、長い寄り道を経て、無事家に帰って来ていた。

家についてもなお、あの帰り道で出会った異常な強さを持った人物の事が頭から離れない。

冴被渚。

あの人間の強さは異常だった。

しかも、本人が言うには、適応者ではないらしい。

「冴被は、本当に適応者じゃないのか？」

チェーンソーを使ってる俺と大差ない気がするが……」

俺はベッドに寝転がると、自分の武器を展開した。

里沙さんが言うには、適応者には専用武器があるらしい。

だが、俺は殺した化け物のチェーンソーを使っている。

自分の専用武器は、まだ何か分からない。

「やっぱり俺ってダメだな……」

せめて、専用武器でもあれば違うのにな……」

俺はチェーンソーを消して、目をつぶった。

「もう、今日は寝ておこじつ…」

こうして、激動の一日が終わった。

次の日から、放課後に中城里沙と冴抜渚がオカルト研究会によく来るようになった。

何度も会う度に、二人の事もかなり分かってきた。

中城里沙さんは、滝川高校の3年の書道部。

元陸上部で、インドア派でありながら体力は書道部で一番。

年下で名前で呼んでくれる人が好きらしい。

冴抜よりも、俺みたいなお奴がいいとの事。

武器は、ハンドガンとスコープ付きライフル、ショットガンにマシンガンと多彩。

今のところ、適応者で唯一の遠距離武器の使い手。

一方の冴被渚は、城谷高校2年の演劇部部員。

数えるだけでも1000を超える戦闘回数に、極めて高い身体能力で次々と功績を上げる。

主力武器は日本刀。

持っている武器と戦い方の為に主に単独殲滅を好む。

日本刀はバットケースに入れてカモフラージュし常に持ち歩くようにしている。

不良に見えても見た目は良いので、何度も演劇部で主役を務める。

里沙さんによると、過去に並列世界の化物に妹を目の前で殺された経験をしており、普段表には一切出さないが、化物に激しい憎悪を抱いているらしい。

これが俺が知った二人の大まかな特徴だ。

ただ一つだけ、冴被の妹の名前等の詳しい事は分からない。

里沙さんでもこういう話は聞いてないらしい。

ただ何となく分かる、あの異常な強さは、妹の復讐のために手に入れたに違いない。

並ならぬ努力で適応者と同等、またはそれ以上の強さを手に入れた

んだろう。

そして、二人に会ってから、三週間が経った。

今は、二人がオカルト研究会に来るのが当たり前前の光景になって来た。

今日も、里沙さんが早々とやって来た。

「寺岡君！遊びに来たよ！」

「あ、里沙さん。」

「いつも来てますが、書道部とか行かなくていいんですか？」

里沙さんは、どこか遠くを見て言った。

「別にいいの…私、同級生の女子にも、男子にも相に手さねないから…」

「あー、何かすいません…」

「…謝る必要なんて無いわ。寺岡君が居てくれれば…」

その時、部室に勢い良く冴菰が入って来た。

「よお、中城。
今日も寺岡に求婚か？」

「求婚っ…！？
そ、そんなんじゃないわよ！」

珍しく、里沙さんは顔を赤くしている。
いつもは俺がこんな感じだが…

「まあ、仕方ないか。
中城は年下としかハッスルできない寂しい三年生だったな」

「ひどい…！
冴被君、もう少し私が先輩って事を意識できないの！？」

「いや、できないな。
年下の男子しか興味が無い奴が先輩とは…片腹痛いな」

さすがの里沙さんも、この一言にはカチンと来たようで、顔がさらに真っ赤になっていた。

「…もう、許さないわ…！
表に出なさい…！」

「ほう、やるかい？
シヨタコンが俺に勝てるなんて思っなよ？」

そうやって二人はドカドカと部屋を出て行った。
そして、俺は二人に取り残された。

「里沙さん…行っちゃった」

「何？気になるの？」

忍がいきなり俺の前に現れた。
不意をつかれた俺は思わず倒れそうになった。

「うわっ！脅かすなよ！！」

「ゴメンゴメン！
だって、光輝がずっと里沙さんの事ばかり一人で言ってるからさ
」

「いや、そうでもないが…」

すると、忍はつまらなそうな様子だった。

「なーんだ、面白くない。」

後でみんなに広めて、楽しもうと思ったのにさ…」

「余計な事しようとするな！」

また、俺の変な噂が流れたら困るから！！」

忍は、昔から何かと俺の噂を広めたがる。

そのせいか、日常生活で色々と誤解される事も多かった。

ふと忍は、また別の話をし始めた。

「まあ、里沙さんの事はもういいや！」

それよりも、光輝って適応者なんだよね？」

「そうらしいぜ。」

ああ、確かお前には直接言っていなかったな」

思い返せば、つい最近まで忍とは最近部活で会っていなかった気がする。

ここ何週間、里沙さんとのパトロールや、冴袂から模擬戦で戦ったりと予定があった。

多分、会えなかったのはそのせいだろう。

「じゃあさ、光輝は専用武器とか出せる？」

「いや、まだ出せてない。」

里沙さん曰く、専用武器を出すには、強い感情が必要なんだってさ。里沙さんの場合は、化け物を前にして、死にたくないと思ったたら出せたらしいよ」

「ふーん、そうなんだ。

でも、できてないんでしょ？」

「そうなんだよ…」

現実には、強い感情って言われても難しいんだよな…」

俺は思わず、ため息をついた。

自分の強い感情って言うのがよく分からない。

ため息をついた俺を見て、忍が言った。

「そんなに悩む事じゃないよ。

あたしなんて、適応者でも何でもないんだよ？

光輝と違っていつ殺されるか分からないんだから…」

「そ、そんな事ないって！

俺だって、毎回殺されないかヒヤヒヤしてるし」

忍は、いつもよりも顔色が悪かった。

いつの間にか、忍の手が震えていた。

「あはは…あたしどうしたのかな？
急に怖くなってきちゃった…」

「忍…」

段々忍の様子がおかしくなる。

「あたし死にたくない…」

殺されて死ぬなんていやだ…」

いやだ、いやだ！いやだ！いやだ！いやだ！いやだ！いやだ！いやだ！いやだ！

「おい、どうしたんだよ！？」

忍は、頭を抱えて絶叫した。

「いやあああああああああああああああああああああ！…！」

その後ろで、部室の景色が揺らいだ。

段々と、部室の風景が赤く染まっていく。

「なっ…並列世界！？」

なんで学校なんか…！？」

忍は机にしがみついて、唸っている。

「うっうっうっ……！」

「おい、忍……！」

何してんだ！？逃げるぞ！」

「うっ、うっうっうっ……！」

忍は急に気を失ってしまい、俯せの状態で机に倒れ込んだ。

その時、妙な声を上げて、派手な色をした化け物が教室に入ってきた。

毒々しい色使いの偶像のような化け物だった。

ダミーと違って、顔の穴は空いておらず、指紋のような模様が描かれていた。

そして、人間と同じ五本の指の手を、忍に向けていた。

俺は、モンスターブックでその化け物を知っていた。

「こいつは……トータル・ウィッチ！」

『トータル・ウィッチ』

《ダミー系の亜種だと考えられる化け物。》

武器を持たないトーテム系の化け物で、呪術を使ってくるのが厄介。呪術をかけられた人間は、負の感情に侵され、精神崩壊のような状態にされてしまう。その隙に、この化け物はその人間の首を絞めて殺す。

弱点はダミー系と同じ頭だと考えられるが、実際の所は正しいか分からない。

しかも、呪術は防ぐ方法が今だに不明なので接近は難しい。ただ呪術の対象は一人だけなので、罠を使って接近することはできる。

しかし、一人で倒すには依然として難しい相手である。》

トーテム・ウィッチは、忍に向かって歩いて来ている。

このままでは、確実に忍は殺される。

俺はチェーンソーを出現させると、トーテム・ウィッチに突っ込んだ。

「喰らえ!!!この化け物オオオ!!!」

トーテム・ウィッチは、俺の存在に気付いたらしく、俺に手を向かって襲った。

「く…なんだ…!？」
くそ…体が…重い…!」

そのせいで、俺はチェーンソーにうまく操作できなくなり、自分が動くのが精一杯になってしまった。

その間にも、トーテム・ウィッチは、どんどん忍に近づいていく。

「くそ…! たった一人で…どうすればいいんだ!？」

俺は為す術も無く、ついにはチェーンソーを取り落としてしまった。

トーテム・ウィッチは、もう忍の目の前だった。

「くそ…! 俺は幼なじみの一人もを助けられないのかよ!？」

その時、俺の手の平に何かが出現した。

それは、機械的な外見の小さなナイフだった。

それと同じ時、トーテム・ウィッチの手は、忍の首を締め付けようとしていた。

「俺の大事な幼なじみに触るんじゃねえええ!!」

俺は咄嗟にそのナイフを、トーテム・ウィッチに向かって投げ付けた。
前に冴袂がそうしたように。

そのナイフは、トーテム・ウィッチの頭に向かって一直線に飛び、見事に頭を突き刺した。

トーテム・ウィッチはよろめきいて、忍から手を離れた。

俺はその隙に、トーテム・ウィッチに体当たりをした。

トーテム・ウィッチの体が地面に叩きつけられる。

俺は、トーテム・ウィッチの頭からナイフを引き抜いた。

トーテム・ウィッチの頭から、黒い液体が吹き出してくる。

俺はナイフを手にとると、トーテム・ウィッチの体のありとあらゆる場所を刺しまくった。

「このっ、この化け物おおおッ!!」

化け物の体を刺す度に、黒い液体が返り血のように俺に体にかかった。

そんな事では、俺の手は止まらなかった。

俺がやっと手を止めたのは、化け物が完全に動かなくなるのを確認できた時だった。

「なんとか…一人でも勝てたみたいだな」

その時、近くで声がした。

「あ…痛たた…」

「あ、忍！お前大丈夫だったのか！？」

「うん、大丈夫だよ。」

強く掴まれて、ちよつと喉が痛いぐらいだから

「そうか、ならいいんだが…」

「光輝、あたしを助けてくれたんだね…ありがとう」

「気にすんなって、幼なじみを助けて当然だろ？」

忍が無事で本当によかった。

もし、ここで忍を助けられなかったら、一体どうなっていたのか…
考えるだけで恐ろしい。

ふと、忍が俺が握っているナイフを見て言った。

「光輝、そのナイフはどうしたの？」

「ああ、いつの間にか持ってたんだ。一体、何だろうなこれ？」

忍が、何か思いついたように言った。

「もしかして、それが光輝の専用武器じゃない？」

「これが…俺の専用武器？」

もっと強そうな物だと思ってたんだが…」

忍と話していると、いつの間にか現実世界に戻って来ていた。

そこにはいつもの部室の風景がある。

まるで何事もなかったかのように。

「並列世界が出現したという事は、この部室も安全じゃないんだな…」

「そうだね…あたし達どうすればいいんだろう?。」

新たな化け物。

新たな並列世界の出現場所。

そして…俺の専用武器。

これらの出現は、俺達に新たな戦いを予感させた。

第八話 エネミー・バイ・ナチュラル

オカルト研究会にトータル・ウィッチが出現した事件が起こった次の日、臨時で三つの対抗組織による会議が開かれた。

その会議には、各組織の代表が集まって開かれた。

逆茂木高校の黒川白刃。

滝川高校の中城里沙。

そして、城谷高校の冴抜渚。

各代表の判断で、並列世界の出現に備え、部員は武器を持ち歩き、なるべく二人以上で行動するように義務付けられた。

そして、並列世界に遭遇した場合は、無理をせずに冷静に対処するようにという事だった。

そして、その会議内容は、世界各国の対抗組織の支部にデータ化されて送られた。

対抗者達は、全国体制で並列世界に対する危険意識を高めていった。

その会議の時、俺は忍と近くの公園のベンチに座っていた。

「会議長いな…」

もう二時間は経ったよな？」

「うん、もう二時間はとっくに過ぎてるよ」

「まあ、そうだよな。」

ちよつとぐらいなら、こんなに疲れたりしないよな…」

俺と忍は、すっかり待ち疲れてしまっていた。

「川村は、家で待機してるって帰ったからな…」

あー、暇でしようがないな」

すると、忍はこちらを振り向いて言った。

「あたしは、別にいいけどな。」

光輝と久しぶりに、二人つきりになれたし…

むしろ、嬉しいかな？」

「え…？そ、そうなのか…」

忍が言った言葉に、俺はちよつと驚いた。
昔の忍ならこつという事はわなかったからだ。

忍は、雲が行き交う青空の方を向いて言った。

「ねえ、光輝…」

最近のあたしって、足を引っ張ってばかりで、何の役にも立って
ないよね？」

「いやいや、そんな事ないぜ。

あの化け物を目の前にしたら、誰だって…」

忍は、首を横に振った。

「ううん、やっぱりあたしは足を引っ張ってるよ。

だって、あたしは一度も化け物殺した事ないんだもん。

みんなを面倒な事に巻き込む…とんだトラブルメーカーだよ」

それを聞いた俺は、忍にはっきり言った。

「忍…それは違うぞ！」

「え…？違つて…」

「確かにお前は、逃げてばかりで化け物と戦つた事なんてないし、みんなを面倒事に巻き込んでいるかもしれない。…だけど！お前は足を引つ張つてなんかいない！！」

「光輝…」

俺は忍の肩を掴んで言った。

「いいか、お前は俺が絶対守るから。

だから…絶対に変な事しようと考えたりするな！」

「え…うん、分かった…」

「よし、それならいいな」

すると、忍は何か落ち着きなさそうに言った。

「じ、光輝…」

「ん？どうした？」

「さっきから、顔がすごく近いんだけど…」

「え…！？ああ、悪い…」

俺はガバツと忍から離れた。
何だか気まずい空気になってしまった。

俺はこの流れを変えようと、違う話題を振った。

「なあ、忍。

今度暇があつたら、お被いしてくれないか？」

「え、何で急にお被いな？」

「いや、これから並列世界で戦いが増えそうだからさ…
簡単に死んだりしないように、忍のお被いを受けた方が心強いなと
思つて」

これを聞いた忍が、くすくすと笑い出した。

「ふーん、お被いなんて珍しいね…」

どうせ、光輝の事だからあたしの巫女服の姿をみたいだけじゃない
の？」

「なっ…違つて！」

「やっぱり凶星じゃないの？」

「だーっからっ！…」

そういう目的じゃないって!」

忍は、いつもの表情に戻っていった。

「いやー、やっぱり光輝を弄るのは楽しいわー」

「…ったく、どうしようもない幼なじみだな」

「まあ、話は分かったよ。

先輩達の会議はまだしばらくかかりそうだからさ、今から波川神社
に行ってお被いしよっ!」

「え、今からか?」

「もちろん! さっさと行こ!」

忍が、俺の手を掴んで走る。

「ああ、ちょっと待てよ!」

忍に連れられて、俺は波川神社に向かった。

俺は今、波川神社のある一室で忍のお祓いを受けている。
忍は、俺の目の前で舞うような動きをしている。

それにしても…お祓いは長い。
もう45分はこうして座っている。
華やかな忍は見飽きたりしないけど、なかなか暇だった。

忍に話し掛けようにも、あまりにも真剣なので、俺は話し掛ける勇気がなかった。

そうこうしている間に、忍の動きが止まった。
集中していたせいか、忍は汗だくだった。

「はあ…終わったよ！
光輝、長らくお疲れ様！」

「はあ、疲れたぜ…
それにしても…お前、汗すごいぞ？」

「あはは…そうかな？
光輝のお祓いだから、ちょっと張り切っちゃってね」

忍は、恥ずかしそうに笑った。
何だかいつもよりも可愛く見える気がする。

俺は鞆から持っていたタオルを取り出すと、忍に渡した。

「ほら、使えよ。」

俺もまだ使ってないし」

「あ、ありがとう。」

それじゃあ、あたし着替えてくるね!」

「おう、後でな」

さっさと部屋から出た忍だったが、すぐにこの部屋に戻ってきた。

「ん? どうした?」

「着替えようとしたら、他の人がその部屋を使っててね...
あの...ここで着替えていい?」

「な...なんだって!?!」

「ちよつと後ろ向いててくれればいいんだけど...
もし嫌なら、空くの待つよ」

「いや...嫌ではないが...」

この時の俺は葛藤していた。

汗だくで、巫女服を着た、幼なじみの着替え...

この思春期の健全な男子、女性の魅力にとっても耐えられるとは思えない。

だが、ここで女の子の頼みを断るのも腑に落ちない。

迷っても仕方がないので、俺は無理に答えをだした。

「…仕方ないな。

頼むから、さっさと済ませてくれよ…？」

「うん…分かった」

忍は、服を脱ぎ始めた。

「ん…しょつと」

俺は後ろを向いて、何も考えまいと必死だった。

昨日見たお笑い番組、学校の先生の説教、並列世界の化け物…いろいろ考えた。

しかし、汗が滴る体、荒い息遣いで服を脱ぐ巫女の格好をした幼なじみが頭を過ぎる。

どうしても、考えが忍の着替えに戻ってくる。

「れ、冷静になれ…
俺の全ての煩惱は消すんだ…」

俺はそう呟きながら、必死に待った。

時間が経つのが、とても遅い気がする。
忍は、俺をいつまで待たせる気なんだろう。

その時、救いの声が聞こえた。

「光輝、終わったよ」

カバツと俺は振り返った。
そこには、いつものよう私服の忍がいた。

「スゲー長かった気がする…」

「あたし的には早めに終わらしたんだけどな…
もしかして、あたしの着替えがずっと気になって仕方がなかったか
ら？」

「違うっ！俺はあんまり待つのが好きじゃないからだって！！」

「ふーん、そう？」

まあ、今日のところはそういう事にしておいてあげる」

正直なところ、凶星だった。

むしろ、男子なら気にならない訳がないと思う。

それから、俺は立ち上がって言った。

「まあ、いいか…」

そろそろ学校に戻るか」

「あ、そうだったね。

そろそろ戻ろうか…」

何だか微妙な雰囲気でお祓いは終わってしまった。

高校の部室に戻ると、黒川先輩と冴祓がいた。
俺は二人に声をかけた。

「あ、終わっただんですね」

「ああ、たった今終わったばかりだよ」

ふと、俺は里沙さんがいないことに気づいた。

「あれ？里沙さんは？」

「ああ、涙目で帰ったよ」

「何したんですか!？」

冴祓がわざとしくため息をついて言った。

「俺が昨日みたいに会議でちょこちょこシヨタコンって言い続けたらさ、涙目になったと思うとダツシュで帰っちまったんだよ。いやー、参ったね」

「冴祓：お前、悪いと思ってないな」

「おいおい、俺は先輩に一定以上の敬意を払っているぞ」

「お前の敬意ってのは、一体何なんだよ……」

「ま、会議の内容は伝わったみたいだから問題ないだろ」

「なんでそんなに偉そうなんだよお前……」

その後、俺は二人から会議の決定事項を聞いた。

「なるほど、とりあえず並列世界の危機感を高めようって事ですね？」

「そんなところだね。」

冴抜と中城の抵抗組織にも同じ対策をするように言ったよ」

「ああ、滝川高校の書道部と、城谷高校の演劇部ですか……」

対抗組織の部活は学校によって違い、滝川高校では書道部、城谷高校なら演劇部と各高校バラバラである。

ふと、黒川先輩が言った。

「寺岡、ちよつと頼んでいいかい？」

「え、何ですか？」

「俺の代わりに、中城に謝ってくれないかな？」

俺は思いがけない言葉に、思わず吹いてしまった。

「ちよつ、黒川先輩も里沙さんに、何したんですか!？」

「実は、中城と一緒に帰る人いるのかって聞っちゃってさ……」

「先輩、それ里沙さんの前で、その言葉は禁句です……」

「あはは……そうなんだ。」

「だから、謝ってくれない？」

「まったく、わかりましたよ……」

「おお！寺岡、頼むよ」

黒川先輩はそう言って、部屋を出ていった。
残ったのは、俺と忍と冴祓の三人になった。

「寺岡、ちょっと聞きたいんだけどいいか？」

「ああ、別にいいけど」

冴祓は、椅子に座った。

「そんじゃ、遠慮なく聞くか。お前、この前管理人に会ったらしいな」

「ああ、アスタリスクって奴に会った」

冴被はいつもよりも真面目な表情になる。

「そいつから、何か化け物の事を聞かなかったか？」

「えー、確か…化け物を浄化するのが自分達の役目とか言ってたけど…」

「その言い方、何か引つ掛かると思わないか？
殺すと言わずに、なぜわざわざ浄化と言うのか」

「あ、言われてみれば…」

確かに、アスタリスクは管理人がやっている事を浄化と言っていた。

今まで、深い意味はないと思って気にしていなかったが。

そして、冴被の話は続く。

「俺も少し前に管理人に会った時は、それと同じような台詞を言っていた。

まあ、俺の場合は適応者じゃないから大した聞けなかったが」

「つまり、どの適応者も化け物を殺す理由は…おそらく同じって事だな？」

「そういう事だな。」

まあ、一番は本人に聞ければいいんだろうが…」

そう冴袂が言った時、忍が会話に割り込んで来た。

「ちょっと！あたしすごく暇だから早く話を終わらせてよ」

「おっと、悪かったな。」

寺岡の隣に、三波がいるの事忘れててな」

「あー、冴袂君って結構酷い事をサラっと言うね…」

「すまない、俺はそういう性格だからな」

冴袂は立ち上がると、鞆を持って言った。

「さて、俺は帰るかな…」

もし、アスタリスクか管理人にに会ったら、さっきの事聞いておいてくれ」

「ああ、分かった。」

聞けたら、聞いておくよ」

冴袂は、部室から出て行った。

「さて、あたしらも帰る！
光輝と帰るの久しぶりだなあ」

「おい、まだ俺は帰るなんて一言も…」

忍が、いきなり俺の足に蹴りを入れて来た。

「…痛っ！なんだよ!？」

「黙って一緒に帰んなさい！
どんな理由があるうが、拒否権はないよ!！」

「うわー、いつものお前に戻っちまったな…」

こうして、俺は仕方なく忍と帰る事になった。

俺は別れ道で忍と別れて、一人で歩いていた。

別れてしばらく経った頃、背後に気配を感じた。
俺は専用武器のナイフを展開すると、後ろを振り向いた。

「なっ…お前…!？」

振り向くと、そこにはアスタリスクが立っていた。
今、この場所は並列世界にはないはずなのに。

「アスタリスク…なんでお前がここにいるんだ？」

アスタリスクは、相変わらずの機械的な声で答えた。

「貴方八、私ト会ウ事ヲ望ンダカラ…」

「何でそれが分かったんだ？」

「私達八、貴方達適応者ヲ監視シテイル…時ガ来ルマデ」

「時ってなんだよ？」

アスタリスクは、表情を変えずに言った。

「貴方達八、イズレハ私達ノ仲間トナル…
ソウ…適応者八、管理人ニナル運命ナノ」

「て、適応者が管理人になるだって!？」

「ソウヨ…私達モ昔ハ適応者ダツタ…
アル日突然、元ノ世界ニ帰レナクナリ…私達ハ管理人トシテ生キル
事ニナツタノ…
ソレハ、貴方達モ同ジヨ…」

「そんな…俺達はいずれは管理人になるなんて…」

俺は、アスタリスクに言葉を返せなくなっていた。

その後、アスタリスクの話は続き、彼女が発する言葉は、容赦なく
現実を語り続けた。

適応者として生まれた以上、管理人になる運命から逃れられない事。

適応者は、並列世界に長時間滞在するか、並列世界で死ねば管理人
になる事。

逆に、普通の人間が並列世界で死ねか、負の感情を抱いて死ぬと化
け物になる事。

管理人は、負の感情の殻に籠った魂である化け物と、死ぬまで続け
なければならぬ事。

アスタリスクは、他にも色々と話した。

それを聞いた俺は、ただただ驚くばかりだった。

「コレデ並列世界ノ事ハ、大体話シタ…
他ニ何力知シリタイ事ハ…？」

「いや、もう充分過ぎるくらいだ…
一つ聞くとすれば、並列世界に束縛されているお前が、なぜここに
いれるのかって事だな」

「ソレハ私達ヤ化ケ物ノ能力…空間転送。
化ケ物ト違ッテ、私達ハ狭イ範圍シカ転送デキナイ…
ダカラ、ココニ立ッテイルノガ精一杯…」

「そうか、なるほどね。
だからそこから微動だにしないのか」

アスタリスクは、遠くを見て言った。

「モウ、私ハ戻ラナクテハイケナイ…
貴方ノ幸運ヲ祈ッテル…」

そう言って、アスタリスクは影のように消えた。

「化け物は、負の感情を抱いて死んだ人間の魂…か。
俺達は、元々人間だった奴らを殺してたのか…」

俺は内心、アスタリスクが話した事実には愕然としていた。

第九話 ダーク・ファクト

俺は、荒れた果てた学校の門の前に立っていた。

昨日までは、ここは逆茂木高校だったはずだ。

しかし、逆茂木高校なら、ここまで校舎は荒れてなかったはずだ。

窓ガラスは割れて、地面に崩れ落ちている。

ガラスどころか、校舎全体がひび割れているように見える。

そして、窓ガラスの所々に返り血のようなものがついていた。

「一体、どうなってるんだ…」

並列世界が校舎自体にも浸食してきたのか…？」

そして俺は、部室の事が気にかかった。

以前も部室に並列世界が出現したので、今回も何かあったかも知れないからだ。

俺はそう考えて、校舎内に入った。

校舎内では何人も生徒と教師が逃げ回っていた。

それを追い掛けている無数の化け物。

そして、この学校の生徒らしき人間の死体。

無惨に切り裂かれて、目を向けられないような状態になっている。

「くそ…数が多過ぎてあいつらを助ける暇がない！
今回の並列世界は規模はヤバいぞ！！」

俺は仕方なく化け物から逃げながら、部屋までたどり着いた。
そして、勢いよく扉を開けた。

「おい！誰か……っ！？」

そこにいたのは、返り血で赤くなったダミー・サターンと、見覚えのある人間の死体だった。

右肩から左の腰にかけて大きな傷口がある川村の死体。

手足がバラバラにされた黒川先輩の死体。

腰から下が完全に無くなっている忍の死体。

「そんな…どうして…」

その時、三人の死体が動き始めた。
傷口が消え、手足等が木製のものに変わっていく。

「はっ…!」

気が付くと、俺はベッドから勢いよく起き上がっていた。

「さっきのは…ゆ、夢だったのか？」

今だに心臓が壊れんばかりに、激しく動いている。

全身から、大量の冷や汗をかいていた。

夢にしては、現実と思えるぐらい鮮明だった。

「嫌な夢だったな…」

まさか、予知夢なんかじゃないよな…

いや、悪い方に考えるな。

ただの悪い夢に決まってる…」

俺はそう呟いて、学校へ行く準備を始めた。

高校の自分のクラスに着いた俺は、自分の机にぐったりと倒れ込んだ。

今日みたいに、朝から疲れているのは久しぶりだ。

俺が机でうなだれていると、川村が話し掛けてきた。

「寺岡君…朝から疲れてるみたいね」

「あ、川村か…」

今の俺って、やっぱりそういう風に見えるか？」

川村は静かに頷いた。

「だって…いつもよりも元気がないもの…」

いつもの貴方なら…もっと生き生きしてるわ」

「まあ、いつも元気って訳ではないがな…」

俺は、ため息をついて川村を見た。

「それにしても、朝から俺のよく気づくよな…」

川村は、ちょっと焦ったようになって言った。

「そ、それはいつも貴方を見てるから…」

「あ、ああ…そんなんだ」

俺は、なんか余計な事聞いてまったと思った。

「ま、まあ…」

授業受けたあとでな」

「うん…また後で…」

何だか微妙な空気で、話が終わってしまった。

俺は放課後になると、いつも通り部室に向かう。

今日はアスタリスクと会った事を冴蓑に話さないといけない。

そして、部室の前までたどり着いた。

「おいつす、冴蓑いるか？」

「おお、寺岡か。」

あれから何かあったのか？」

「ああ、話さないとならない事があってな…」

それから俺は、冴袂に昨日知った事を話した。

「なるほどな…」

化け物は、負の感情を抱いて死んだ人間なんだな」

「アスタリスクによるとそうらしいぜ。」

もしそうだとしたら、化け物は並列世界にあり余るほど溢れかえってるよな」

冴袂は、頭をかいて言った。

「ま、俺達は生きる為に戦うまでだ。」

例えそいつが、知り合いだったとしてもな…」

「そうならないといいな…」

俺の頭の中では、夕べに見た夢が浮かんでいた。

惨殺された仲間の死体が、体の一部が木に変わって復活し、自分を

襲ったあの夢が…

段々と、あれは予知夢なのかもしれないと思えてきた。
もし、そうだとすれば…川村は俺の敵として立ち塞がるのだろうか。

俺は、そんな余計な心配をするなど自分に言い聞かせた。

そんな時、忍が部室に駆け込んで来た。

全力で逃げて来たのか、息が上がっていた。

「はあっ…はっ…」

誰かあたしと来てくれない!?
今、ちょっと大変な事がおこったの!」

「忍!どうしたんだ!?!」

「川村さんが、死んだはずの北沢君と戦ってるの!
あたしじゃ戦えないから、代わりに助けてあげて!?!」

俺は、心臓が跳ね上がったような気分だった。

「なっ…北沢!?!」

わかった、俺が行く!?!」

俺は考えるよりも先に、忍と勢いよく部室から出た。

「寺岡、待て！」

お前一人が助けに行っただとところで…っ聞いているのか!？」

その後ろで、冴抜の音がする。

しかし、俺はその声を無視して忍と走った。

「それで…川村はどこにいるんだ!？」

「ここから近くの公園！」

ほら、いつも帰りに寄るところだよ!！」

「ああ、あの公園か！」

急ぐぞ、忍!！」

俺は、さらに走るペースを上げて走り出した。

自分の目で、現実を確かめるために。

俺と忍は、公園の前までやって来た。
公園の遊具が不気味に赤く光っている。

そこは、間違いなく並列世界だった。

「川村！どこだ！？」

どこからか、川村の声が返ってくる。
どうやら、遊具の後ろで戦っているようだ。

「寺岡君…！？」

どうして…きゃああっ！」

悲鳴と共に、川村が俺の目の前に吹っ飛んで来た。
俺は、川村の側に駆け寄った。

「川村…！大丈夫か！？」

「大丈夫…ちょっと隙つかれてを掠っただけだから…
寺岡君、私よりも…あの化け物を何とかして…！」

そう言って、川村が向こうを指差した。

その指差した先にいたのは…

体の一部が木に変化している北沢治郎だった。

俺の目の前で死んだはずの友人が、今日の前にいる。

ただ、あの時の北沢とは違い、両手に巨大なボクシングのグローブのような物が装着されていて、虚ろな目をしている。

背中への傷も、まるで足りない部分を補うかのように木で修復されていた。

俺は北沢に話し掛けるように言った。

「北沢…まさか、お前が敵になるなんてな」

すると、北沢が俺の言葉の返事ように言った。

「ああ…お前が…お前が助けてくれないかったから…!!」

「…北沢っ!?!」

北沢は物凄い速さで、殴り掛かってきた。

俺は咄嗟にナイフ出現させると、北沢の攻撃を横移動して回避した。

殴られた地面に大きくえぐられた。

「くそ、こいつ速い…!」

俺は攻撃を回避した後、ナイフを北沢の頭に向けた。

「ちょっと気は引けるが…

化け物もどきなら、頭を狙えば倒せる!」

しかし、北沢の攻撃はまだ終わっていないかった。

北沢の殴った地面から岩の鎖のような物が出てきて、俺の足に絡み付いた。

「くっ…動けない!?!」

その隙に、北沢は俺の体に向かって拳を突き上げた。

俺は殴られた勢いで、10メートルぐらい吹き飛ばされた。

「…ぐはあっ!?!」

「あっ、寺岡君っ…!?!」

「しっかりして光輝い!!」

俺は、滑り台に体を打ち付けられた。

胸部に今まで感じた事がない激痛が走る。
今の衝撃で、四本ぐらいの肋骨が折れたようだ。

「くそ…すごく痛え…」

このままだとあいつに…!!」

化け物と化した北沢が、じりじりと近寄ってくる。
俺は何とか痛みを堪えながら、後ずさる。

「寺岡…お前のせいで…お前のせいで…!!」

北沢がそう叫びながら、どんどん近付いて来る。

「おい…北沢！止める…止めてくれえ!!」

「何で…あの時助けてくれなかつたんだ…!!？」

あの時…！あの時…!!あの時…!!あの時…!!あの時…!!

「う、うわあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああ
!!」

その時、化け物になった北沢の胴体を日本刀が貫いた。

冴蓑が、日本刀で北沢を刺したのだ。

「あ、あ、あの時……あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ……」

北沢の目から段々光りが失われ、声も小さくなっていく。

弱っていく北沢は、俺に向かってこう言った。

「て……寺……岡……う……め……ん……
お前……は何も……悪く……なく……ない……」

そう言った北沢の体はどんどん崩れ落ち、黒い灰になってしまった。

冴蓑が、日本刀を鞘に納めて言った。

「寺岡、さっきのは結構危なかったな。」

まさか、この前死んだお前の友人が襲って来るなんてな」

俺はすっかりうなだれて、瞳から涙が出ていた。

「くそぉ…あの時、俺が北沢を助けられていれば…！
こんな事にはならなかったかも知れないのに！」

俺は、やり切れない気持ちで一杯だった。
自分のした行動を心底後悔していた。

すると、冴袂はこう言った。

「…たく…馬鹿だな。」

あいつが最後に言った事を忘れたか？」

「最後に…言った言葉？」

「言っただらる？」

俺に刺された後、『お前は何も悪くない』ってな」

「…！！」

俺は、北沢が最後に言った言葉を思い出した。

「でも、北沢は…本当にそう思っていたのか？」

「死ぬ前ぐらいは正直になるだろうさ。」

「きつと化け物になって、少しだけ気が狂ってただけだろう。」

「そうか…そう信じたいな…」

川村が、俺に駆け寄って来た。

「寺岡君…大丈夫なの…!？」

「今は…ちよつと大丈夫じゃないかもな。」

「肋骨が四、五本折られたみたいだから…」

「今…三波さんが黒川先輩と、救急車を呼んでるから…
もう少し…頑張つて…」

「ああ、それぐらいは全然大丈夫だ」

その時、黒川先輩と忍が公園に入って来た。

「寺岡っ！大丈夫か!？」

「ああ、何とか生きてます…」

黒川先輩は俺の姿を見ると、落ち着いて言った。

「激しく動かなければ、得に問題はなさそうだね。まあ、もう少しで救急車が来るから……」

その時、俺はある事に気が付いた。

空や遊具がまだ赤く染まっている事に。

「なんで……まだ並列世界が消えないんだ？」

この廃墟のような景色が、元に戻る気配がまるで無かった。

その時、向こう側から何かが近付いている音がしてきた。

地面と金属が擦れるような音がどんどん近付いて来る。

「まさか……まだ化け物があるって事か!？」

黒川先輩は、焦っていたようだった。

「そんな馬鹿な……!？」
僕がこの公園に来た時、

この並列世界は化け物が何体も出て来るような規模じゃ無かったはずだ!!」

忍もパニックになっていた。

「でも、実際にこっちに向かっているじゃないですか!!」

そう言っているうちに、冴菰が刀を抜いた。

「おい、おしゃべりはそこら辺にしておけ。

さっきの奴が…来るぞ!!」

そして、公園にその化け物が入って来た。

それは今まで見てきた化け物中で、一番大きな化け物だった。

20メートルぐらいの巨大な白いクラゲのような物の上に、人間の女性の上半身がくっついていっているような化け物だった。

「な、何だこいつ!？」

こんな化け物…見たことがないぞ!!」

黒川先輩は、化け物をじつと睨むと言った。

「多分…寺岡の友人と同じタイプの化け物だね。
上についてる、あの女の子が本体ってところじゃないか？」

その時、冴菰の表情がガラッと変わった。
だんだん顔が青ざめていくのが分かる。

ついには、日本刀まで取り落としていた。

「そんな…嘘だろ…」

「おい、冴菰どうしたんだ？」

「嘘だ…なんで…乙佳が…」

「…イツカ？」

冴菰は、暗い表情で言った。

「俺が並列世界に初めて行った時に、化け物に殺された冴菰
乙佳
さ…」

「え、冴菰って…？」

「つまり、俺の妹だ…」

「な、妹…!？」

俺達の前に立ち塞がった化け物は、なんと冴被の妹だった…

第十話 テウル・フィーリング

今、俺達の前にいるのは冴祓の妹だった化け物だ。

上半身が人間、下半身がクラゲという奇妙な姿である彼女は、刃物が付いた触手を引きずって近付いてきた。

「まずい、来る！！」

化け物の触手が俺達に向かって突っ込んで来た。

黒川先輩は、どこからか持って来たのか木刀で触手を振り払おうとした。

「っ！あ、よっ！！」

黒川先輩は、なんだか頼りない声で木刀を振るう。

だがその声に反して、黒川先輩は木刀で見事に触手を弾き返している。

人は見かけだけで判断してはいけないな。

一方の川村は、鎖を使って自分の身を守っている。

あの鎖：良く切れないものだ。

冴祓は日本刀を振るい、触手を切り落として抵抗している。

「くそ、乙佳：何故なんだ！

もしかして、俺が助けられなくて、助けてやれなかったからか恨んでるのか…！？」

冴祓は敵として現れた妹に対して、かなり困惑していた。

見ている、こちらもあり切れない気持ちになる。

そして俺は、その三人の後ろに立っていた。

しっかりと専用武器のナイフを握りしめて、怪我を自分が何かできないか考えていた。

「く…うつ…！！」

身構えようとすると、肋骨が折れた部分が痛む。

それを隣で見ていた忍が、俺に近付いて言った。

「光輝！そんな体で無理したら駄目だよ…！」

「分かってるって…」

くそ、自分は何もできないなんてな…」

「それは、あたしも同じ。」

いつも逃げてばかりだし、この前も光輝に助けられて…」

「まあ、それは見捨てられないからな…」

忍は、俺の顔をしっかりと見ると言った。

「だから、今回は逃げない!!」

光輝は、この前あたしを守ってくれた。
だから、今度はあたしが光輝を守る!」

「忍…お前…」

その言葉を聞いた時、急に気が遠くなってきた。
貧血にでもなったのだろうか。

「忍…わりい…早速お前に守って…もらう事になりそうだ…」

「え…?あ、光輝!？」

俺はそのまま意識を失い、倒れてしまった。

「ちょっと光輝！しっかりしてよ！！」

人が倒れる音と、三波の音がするのが冴抜には聞こえた。恐らくは、寺岡が倒れたのだろう。

だが、今の俺にはそれを確かめる余裕などなかった。

自分の妹の化け物を触手を切り落とすのに必死だった。

「くそっ…！このまま続けば全滅するぞ！」

俺は、日本刀を振るいながら黒川に声をかけた。

「おい、黒川！何か手はないのか！？」

「今、考えてるよ！」

ただアドバイスをするなら、この化け物のタイプは普通の化け物と違って、頭を狙っても効果が薄いって事だけだね」

「じゃあ、どこを狙えばいいんだ!？」

「人間の心臓に当たる部分…
ようするに、胸を狙えばいいんだよ!」

「なるほど、心臓か…」

俺は触手を切り付けながら、化け物の上半身に目をやる。

「乙佳…お前を止める!!」

俺は兄として、乙佳を止める。
できるなら、知りもしない相手には倒されて欲しくない。

知りもしない相手に殺されるよりは、俺が乙佳を殺した方がいいに
決まってる。

これが俺が考えた末に出した答えだった。

俺は乙佳の事を思い返した。

乙佳は歳が四つ離れた中学入学前の妹だった。

乙佳は優しくいい子だった。
俺の言う事はしっかり聞くし、いつも笑顔で、俺の回りの人間にもとても好かれていた。

そして病弱であった乙佳は、ほとんどの時間を病院で過ごしていた。
外に出掛けると、すぐに貧血で倒れてしまうからだ。

乙佳は、限られた時間しか外に出れなかった。
それでも、乙佳の笑顔は絶えたりしなかった。

しかし、今から約一年前：
俺との久々の散歩の途中、悲劇が起こった。

俺と乙佳は、入院している病院の前で散歩をしていた。
激しい運動ができない乙佳は車椅子に乗り、俺が車椅子を押していた。

「お兄ちゃん、いつかは中学校に行けるのかな？」

乙佳はこちらを向いて言った。
俺は優しく答えた。

「ああ、行けるぞ。」

このまま良くなれば、入学式前日には退院できるって先生も言っていたしな」

「ほ、本当!？」

それを聞いた乙佳の顔がぱあっと明るくなる。

「そつだよ、俺が嘘付いたりするか？」

「ううん、付かない。」

イツカ、やっと退院できるんだね」

「乙佳、よかったな」

「うん…!」

乙佳は前に向き直って言った。

「イツカね…ただ助けられるだけなんて嫌だったの。海で一匹漂ってるクラゲみたいに、ただ何もできないで、時間という波に流されるまま生きてるなんて…嫌だったの」

「乙佳…」

俺は乙佳の心情を知り、なんだか心が痛かった。

乙佳は、俺の表情を見ながら言った。

「お兄ちゃん、乙佳は退院できるんだからそんな暗い顔しないで！
イツカは、もう一人で大丈夫なんだから」

俺は、その言葉で気持ちを切り替える事ができた。

「そうか。」

でも、俺をいつでも頼っていいんだからな」

「うん、お兄ちゃん……」

その時、回りの景色が赤くなりはじめた。

これが俺が初めての並列世界に遭遇した瞬間だった。

「なんだ…景色が赤い？」

そして、病院の陰から木でできた犬のような化け物が現れた。

その化け物は、体は犬のように小柄で、ぎこちなく四足歩行で歩いていた。

そして、顔の大半を口らしきパーツが占めていた。
その口から、金属のような輝きが見える。

明らかに危険な生き物がそこにいた。

「乙佳！逃げるぞ！！」

「う、うん…！」

俺は車椅子を走って押した。

どうにかして、この得体の知れない化け物から乙佳を守らなければ
ならない。

案の定、犬のような化け物が後を追ってきた。

とてもじゃないが、車椅子を押しながら逃げれそうもない。

「くそっ！仕方ない…！」

俺は車椅子から手を離し、乙佳を背後に待機させるような形で化け
物と向き合った。

「お兄ちゃん…！？」

何するつもりなの…！？」

「このままじゃ、この化け物から逃げきれない…」

俺の中で、何をするか既に決めていた。

「だったら…返り討ちにしてやる！」

「お兄ちゃん、本気なの！？

そ、そんなの無茶だよ！」

「乙佳、俺がこいつの相手をしている間に逃げるんだ。俺なら、お前が逃げれるぐらいは時間を稼げる」

「そんなの嫌だ！」

私、お兄ちゃんと一緒に…」

俺は乙佳の言葉を遮って、自分の思いを告げた。

「本当なら、俺もそうしたい。

だけど、このまま二人で一緒に居ても一緒に殺されるだけだ」

「そんな…」

「乙佳：せめてお前には生きてほしいんだ！

さあ、早く行くんだ！！」

乙佳は涙を堪えていたが、車椅子から立ち上がると、走り出した。

「乙佳…生きていてくれ！」

「…お兄ちゃんもね！」

乙佳が見えなくなるのを見届けると、化け物に向き合った。

「この…化け物め。」

こっから先は、絶対遠さないからな！」

俺は近くに落ちていた太い木の棒を拾うと、化け物と睨み合った。

急に、化け物が飛びかかってきた。

俺は、反射的に木の棒で化け物を殴り付けた。

殴られた化け物は、ピクピクと震えながら倒れていた。

「うわっ、危なかった…」

俺は、まだ生きている化け物の止めを刺そうか迷った。

このまま放っておいてはマズイ気がしてならない。

「殺した方がいいよな…?」

俺は、その化け物の頭を思いっ切り踏み付けた。
化け物の周りから、黒い液体が辺りにほとばしった。

「うえ…あまり気持ちが良いものではないな…」

その時、乙佳の悲鳴が遠くから聞こえた。

「い、いやあああああああつ!!!」

「乙佳…!?!」

俺は嫌な予感を胸に、悲鳴がする方に走った。

「あ…ああ……」

俺がその時目にしたのは、食い荒らされた乙佳の死体だった。

間違いなく…乙佳だ。

どうも否定しようがない。

でも、認めたくなかった。

俺が…俺が逃げるように言ったからだ…

俺が…おれが…オレガ…オレガ余計ナ事ヲ言ワナケレバ…

…オマエガソナ事言ワナケレバ、コンナ事ニハナラナカッタんだ
！！

俺の中で、もう一人の俺の言葉が響く。

「ああっ、あああああああああああっ！！

違う！俺は…俺はただ…！！

…助けたかっただけなんだ！！

こんなつもりはなかった…なかったんだああああああああああ
あああああああっ！！」

その時、さっき倒した化け物が三体出てきた。

化け物の口がそれぞれ赤く染まっている。

今は、その妹の化け物との戦闘中だ。
化け物は、相変わらず触手で攻撃してくる。

ふと、黒川が言った。

「おい、冴袂！川村！

このままだと、きりがない！

この際、一気に攻めるよ！！」

「攻めるって？

こいつがそんな隙を見せるとは思えないが…」

黒川は触手を弾き返しながら続けた。

「僕が動きを止める。

その隙に攻撃するんだ！」

「俺が乙佳を…」

「そう、君が倒すんだ。

どうせ倒すなら、君がやった方がいいだろ？」

「そうだな…」

俺がやるしかないみたいだな」

俺は、改めて刀を構える。

ひたすら攻撃できるタイミングを待った。

そして、しばらく触手を切り付けていると、傷付けられた触手の動きが一瞬遅くなった。

「今だ…!!」

俺は、弾力がある触手を踏んで本体である乙佳を目掛けて飛んだ。そして、クラゲの笠のような部分に乗った。

しかし、後ろから触手が迫って来ていた。

「くそ、早…!!」

しかし、俺の前に黒川が立ちはだかった。

黒川の全身に、触手に付いている刃物が刺さる。

「く…やっぱり痛いな…」

「お前、何やってんだ!？」

血を吐きながら、黒川は俺に向かって叫んだ。

「ここは僕が食い止める！」

その隙に冴祓は化け物を倒すんだ!!」

「お前でなんとかできる相手じゃないだろ!？」

「僕は大丈夫だ！」

いいから行ってくれ!!」

黒川は、自分に刺さった刃物を無理矢理抜き取ると、触手に猛攻し始めた。

「ぐおおおおおおおおおおおおおおおっ!!」

俺は、黒川に背を向けて走り出した。

おそらく、彼は俺が戻るときには生きてはいないだろう。

「く、黒川……すまない……!!」

そして、俺は乙佳の目の前に来た。
無意識に鞘から刀を抜く。

「乙佳…許してくれ！」

俺は乙佳の心臓目掛けて刀を突き出した。

しかし、乙佳が虚ろな目を見開いた。

俺は驚いて動きを止めた。

「…!!」

なんと、乙佳が口を開いた。
まっすぐに俺を見ている。

「そこにいるのは…お兄ちゃんなの？」

「乙佳…!？」

「やっぱり…お兄ちゃんだ…
声で分かるよ…」

乙佳は、変わり果てた姿にも関わらず笑顔を見せた。

「お兄ちゃんは変わらないね…
でも、イツカはこんな姿になっちゃって…」

「乙佳…どうしてそんな姿になったんだ？」

「化け物に襲われて、目が覚めたら今の姿になったの…」

乙佳は、悲しそうに言った。

「それからね…イツカの体は勝手に動くようになったの…
自分の目に映った人達は…みんなイツカの触手に絡まれて死んじや
うの…」

こんな悪い事すぐにでも止めたかったけど…
イツカの体は言うことを聞かないの…」

「乙佳…」

その話を聞いた俺は、辛かったらろうなと思った。

乙佳は優しい性格だ。

自分の目の前で人が死んで、それが自分が殺したともなれば、精神
的ショックも大きかったらろう。

乙佳は、とうとうこんな事を言い出した。

「だからね、お兄ちゃんが…乙佳を殺して…
乙佳はこれ以上悪い子になりたくないよ…」

俺は、思わず戸惑った。

改めて本人に殺して言われると何か抵抗を感じる。

「お、俺にそんな事…」

「お兄ちゃんお願い…」

は、早くしないとまた誰か死んじゃう…

あ、あああああつ！！」

突然乙佳が悲鳴を上げた。
頭を抱えて震えている。

「嫌だ…嫌だよ…」

このままじゃ…またイツカがイツカじゃなくなる…」

「おい、乙佳！？」

「嫌…嫌あ…いやあああああああああああああああああああ
あああああああああああああああつ！！…」

その時、触手が俺の両サイドから覆いかぶさるように襲ってきた。

「くっっ…!!」

咄嗟に避けるたが、肩を刃物が掠る。
掠ったその刃物から濃い血の匂いがした。

それは、黒川を殺したという事を示していた。

「く…やっぱり黒川も!!」

俺は刀で触手を切り付けて対抗する。
触手は相変わらず勢いを弱める事なく襲って来る。

それを防いでいるうちに、俺は暴走して意識が朦朧としている乙佳
が、何かを言い続けているのに気付いた。

「お兄…ちゃん…イ…ツカを…殺…して…イツ…力を殺し…
…て…」

この時の俺はおかしくなりそうだった。
ただ、死ぬ事が乙佳の俺に対する最後の願いだ。

俺は、無理に決心をつけ、日本刀に力を加えると一気に乙佳に突っ
込む。

俺は妹の乙佳の心臓を突き刺した。

しかし、俺に刺された乙佳は、この死に際のような状態で笑顔を作
って言った。

「お兄ちゃん…もう、これでお別れだね…
ずっと一緒に居てくれて、助けてくれてありがとう…」

「く、乙佳あつ…!」

俺は、涙目になりながら悲痛の声を上げていた。

「そんなに悲しそうにしないでお兄ちゃん…
せめて、笑顔で送ってよ…」

俺は涙を拭き、無言で頷いて、無理に笑顔を作った。

「お兄ちゃん、最後まで言うこと聞いてくれてありがとう…
イツカは…お兄ちゃんと会えて幸せだったよ…
イツカは…お兄ちゃんが大好きだったよ…
イツカは……………」

声が途切れ、乙佳は黒い灰と化した。

俺は何とも言えない気分で、その場に立ち尽くすしかできなかった。

景色がいつものように戻り、遠くに仲間達の声が聞こえる。

俺にとっては、複雑な心境での生還だった。

第十一話 リメイン・パーソナル

俺こと寺岡光輝は今、夕日が差し込む病院のとある一室の隅でうずくまっていた。

この何ヶ月で学校関係で色々となり、精神が疲れ切っていた。

並列世界で死んだはずの友人が襲ってきたり、

仲間の妹が敵として現れて黒川先輩を半殺したり、

挙げ句の果てには、黒川先輩が出血多量で病院に搬送されたが死亡、

自分は胸部の複雑骨折で即入院中という散々な日々だった。

入院してからはや二週間、しばらく対抗組織の面々と会っていないかった。

お見舞いぐらい来てくれないのかと思うが、きっと彼等なりの理由があるのだろう。

確か、黒川先輩の死因やらで警察沙汰になっていた。

きっと事情徴収など（俺は怪我で動けないが、何度か警察の人が直々に来ている）で放課後も時間が無いのだろう。

コンコン…

色々と考え事をしていると、突然病室の扉を誰かがノックしてきた。

俺はとりあえず、ノックに返事をする。

「はい、何か用ですか？」

「あ、光輝いる？」

「今、入っていいかな？」

その声は、幼なじみの忍だとすぐに分かった。

「ああ、いるよ。」

「遠慮しないでさっさと入れよ。」

「う、うん…お邪魔します。」

忍がベッドの隣にあった椅子に座る。

「久しぶりだな。」

「もう二週間ぐらい会ってなかったっけ。」

「うん、黒川先輩の事情徴収とか、お葬式があったから忙しくてね…。」

「そうか、黒川先輩の葬式か…
あんまり実感湧かないな。」

俺は黒川先輩が救急車に運ばれる前に言われた事を思い出していた。

『寺岡、話したい事があるんだけど…いいかい？』

『はい、いいですよ』

『じゃあ一言で言わせてもらおうよ…』

僕にもしもの事があれば、オカルト研究会の部長は君に任せたよ』

『え、俺っ…ですか!?!』

『そう、君になら任せられる』

『なんで俺なんかにもオカルト研究会の部長を…』

『そろそろ三年は部活を卒業する時期だし、いいかなと…』

『…俺なんかでいいんですか』

『ああ、もちろん！』

グフ…僕もそう長くはなさそうだしね…』

今の内に約束しないと、死んでも死に切れないよ』

『く、黒川先輩…』

俺、頑張ってみますよ!!』

『おお！オカルト研究会と甲虫同好会のみんなを頼んだよ!』

『こ、甲虫同好会も!?!』

そんな感じで会話した後、黒川先輩は搬送され、搬送先で死亡した。

これをきっかけに、俺は自然とオカルト研究会の部長になる事となつてしまった。

あと、甲虫同好会も…

「光輝は勢いでそんな事言つたみたいだけどさげどさ、本当にこれでよかつたの?」

「うーん…確かに部長に自信は無いけど、先輩にできたんだから何とかなるんじゃないか?」

「うわー、なにその自信…」

忍は湿った目でこつちを見ている。

そんな目で俺を見るな。

「寺岡君…いるかしら?」

うわ、扉から音を立てずに川村が部屋に入ってきた!!

「あー、川村も来たのか」

「あ…三波さんもお見舞いに来てたの…？」

「ま、まあね」

「そっ…」

「…」

誰も喋らず、何だか気まずい空気になった。
俺はこの白けた空気が嫌いだ。

ふと、忍は口を開く。

「あ、ちよつと質問していい？」

「おう、なんだ？」

忍は窓の外を指差して言った。

「あれ、里沙さんと冴袿君じゃない？」

「…え？」

以外すぎる質問に俺と川村の声が重なった。
というか、俺自身への質問じゃないのかよ。

それは置いておくとして、俺と川村は窓の外へと視線を向ける。
確かにあの二人が並んでこちらに向かって来ている。

「おい、そこのお二方！

光輝はここにいますよー！！」

忍は窓から身を乗り出して二人に手を振っている。

「おい、そんなに身を乗り出したら危ねえぞ」

「そんなの分かってるよ！

おい、こつちこつち！」

忍はさっきと変わらず手を振っている。

うわー、この人俺の忠告無視したよ。

「また…うるさくなるわね…」

「はあ、全くだ。

大人しく寝かせてくれよ…」

俺は深いため息をついた。

その後、病室が騒がしくなるのは言うまでもないだろう。

「あー、疲れた…」

つい何分か前に対抗組織の面子から解放された俺は、ベッドでぐったりとしていた。

なにせ三時間も冴抜の愚痴を聞いたり、出番が少なかった事をネタに弄られる里沙さんを慰めたりとなかなか面倒な事をこなしていた。

気が付くと、夕日が綺麗に輝いていた外の景色はすっかり夜の闇に包まれている。

「さてと、腹も減ったし食堂にでも行くか」

俺はベッドから起き上がると、病院の食堂に向かった。

その姿を、窓の縁に座っているアスタリスクが見ていた。

「テラオカコウキ…私達ノ唯一ノ希望」

夜の空の色が赤く光っている。

さらに、さっきまで寺岡が寝ていたベッドの下から犬型の化け物が沸いて来た。

つまりは、今此処に並列世界の出現したという事だ。

「ダカラ…貴方ハ私ガ守ル！」

アスタリスクは専用武器の『スマッシュ・ジャベリン』を出現させると、目の前の化け物に切り掛かった。

俺は、食堂で食事を終えて病室に戻ってきた。
そして、目の前の光景を見てぞっとした。

病室中に犬型の化け物の死体と黒い液体が飛び散っていたからだ。

「ダミー・ハウンドの死体!？」
…俺がいない間に何があったんだ?」

「コイツラハ私が始末シタ…」

その機械的な声の先にいたのは槍を片手に持ったアスタリスクだった。
夜闇に暗さに対抗するかのようには赤い目と白い肌が不思議に光っている。

「アスタリスク…!!
一体何があったんだ?」

「マトモニ動ケナイ貴方ノ代ワリニ戦ツタダケ…」

アスタリスクは相変わらず無表情で答える。
こんなアスタリスクが笑う事なんてあるのだろうか。

「あー、要するに助けしてくれたんだな。
ありがとな、アスタリスク」

「…!!」

アスタリスクは、驚いた顔をしていた。

初めて仏頂面ではないアスタリスクの顔を見た気がする。

だが、アスタリスクの顔はすぐに仏頂面に戻った。

「貴方ヲ監視スル上デ当たり前ノ事ヲシタダケ…
気ニスル事ハナイ…」

「そ、そうか？」

怪我で思うように動けないとはいえ、俺にもプライドがある。

だから、アスタリスクに守ってもらうとなると気が引けた。
自分の身は自分で守れると言えない自分が情けない気がして仕方がないのだ。

色々考え込んでいるとアスタリスクが口を開いた。

「貴方ノ専用武器…見セテクレナイ？」

「え？…ああ、いいぞ」

俺は専用武器のナイフを思い浮かべる。
機械的なデザインのナイフが出現する。

アスタリスクはナイフをしげしげと眺めて言った。

「ナルホド…『フリー・シフト・カッター』…」

「『フリー・シフト・カッター』…?」

「この武器ノ名前ヨ…」

「この部分ニ書イテアル」

アスタリスクは柄を指を指して言った。

柄には英語で文字が書かれている。

「あ、本当だ…」

俺はその文字に全く気付かなかった。

いつも握っている部分だからあまり見る事はないからだろう。

「因ミニ私ノ武器ハ『スマツシユ・ジャベリン』…」

「触ルダケデ切レル特殊ナ衝撃波ヲ放ツ事ガデキルノ…」

「貴方ノ武器ニモ特殊ナ能力ガアルハズ…」

「は、はあ…そうなのか」

俺は『フリー・シフト・カッター』を眺めてみた。

特殊な能力があるようには見えなかった。

「うーん、全然そうは思えないが…」

「今分カラナクテモ…ソノウチ分カルト思ト思ウ。
貴方カラハトテモ強イチカラヲ感ジルカラ…」

アスタリスクは俺に背を向け、窓の縁に立った。

「私、モウ行カナイト…
忘レナイデ。モシモ、貴方ガ私ヲ必要トスルナラ…直グニ私ハ駆ケ
付ケル…」

俺は今にも窓から飛び降りそうなアスタリスクに聞いた。

「おい、一つだけ教えてくれ！
どうして俺をこんなに助けてくれるんだ!？」

アスタリスクは、少し顔をこちらに向けて言った。

「貴方ハ…期待サレテイル。
管理人ヲ並列世界カラ解放スルチカラヲ持ツテイル人間トシテ…」

「管理人を解放する力…？」

「アブソール・ワールド・バインダーヲ倒ス強大チカラ…
貴方ニハソノ才能ガアル…羨マシイグライニネ」

そう言ったアスタリスクは窓から飛び降りた。

「ちょ、アスタリスク!!」

アブソール・ワールド・バインダーってなんだよ!？」

俺は窓に駆け寄って、窓から外を見下ろした。

そこには四階の部屋から見える夜景だけが存在し、アスタリスクの姿はもう見えなくなっていた。

「ったく、行っちまったか…」

管理人を解放する力を俺が持っているって？

はあ、なんだか面倒な事になったな…」

俺は再び気の向くままにベッドに顔を埋めた。

その頃、アスタリスクは並列世界のとある廃墟になったビルに入
て行った。

古びた階段を上がり、六階の部屋に入ると、そこにいたのは壁に寄
り掛かったアスタリスクと同じ黒いコートを着た少女だった。

「アスタリスク・クエイクボーダー、偵察ご苦労様」

「イエ…コレグライ八大シタ事デハナイワ…」

アスタリスクに声をかけてきたこの少女の名前は、アディア・プロ
ツクウエイ。

アスタリスクとは一風変わった姿をしている。
黒いコートを羽織り、中に白いランニングシャツを着ていて、
十字架のアクセサリーを首から下げている、あまり長くなく栗色の
髪の毛が生温い風になびかせている。

「トコロデ…アディア…」

貴女ノ担当ノ…ナカシロリサノ方ハドウナノ？」

「ああ、彼女も中々センスがあるね。

現段階で最強の適応者かもね」

「ソウ…」

アスタリスクはそう言って部屋にある古いソファアに座った。

このソファアールが彼女の数少ない落ち着ける場所だった。

それに対してアディアは壁から体を起こし、あくびをした。

「ふああ…眠いが中城里沙の様子でも見に行くか。

そんじゃアスタリスク、留守番頼んだよ」

「エエ…分かつたワ」

「じゃーね、アスタリスク」

アディアは窓から外に出て行った。

いつまで経っても部屋の出入口から出ようとしなない。

「アディア…相変ワラズネ」

アスタリスクは、そう呟くと眠気に身を任せた。

そのアスタリスクの様子を見ている、もう一人の黒いコートを着た少女がいた。

フードを深く被っているので顔はよく見えない。

その少女がぼそつと呟いた。

「アスタリスク…僕らはアブソール・ワールド・バインダーの前ではただの人形に過ぎない。
無駄な足掻いを止めないなら、僕は君の希望を絶ってやる…」

その少女は、そう言ってどこかに向かって飛んで行った。

アスタリスクがこの少女と対峙するのは、そう遠く日の話である。

第十二話 クラブ・ルーキー

俺が入院してからしばらく経った。

その後も対抗組織の集まりや、部長としての仕事がいくつもあり大変だった。

そして、時は流れて俺は退院していた。

退院後、俺は正式にオカルト研究会の部長となった。

黒川先輩の仕事を引き継ぐ事になった俺は、以前よりも劇的に忙しくなった。

生徒会長に事情を説明したり、部活の部長会議に出たり…

そして何よりも大変なのは、部員をまとめる事だった。

川村は得に問題ないとして、忍の無断欠席、冴袂と里沙さんの乱入と対処に困る事ばかりが起こる。

つくづく、黒川先輩がどれだけすごい人なのか思い知る。

ぼーっとしているようで根はしっかりしてたんだな…

そして、今日もまた部長としての活動が始まった。

今日も俺は放課後誰よりも早くオカルト研究会の部室の前まで来て、部室の鍵を開けて中に入ってばーっとして時間を潰していた。

と、その時だった。

背後から聞いた事がない声が飛んできた。

「寺岡先輩ーっ!!」

「ん？」

ズドガッ!!!

「いつ、痛あああっ!!!」

「…ったく、なんなんだ!？」

痛みが走った背中を押さえながら、さっき声が出た方に振り向いた。

そこにいたのは痛みで頭を抱えている男子だった。

赤い校章バッジを付けているから多分一年生だろう。

「痛たた…オレとした事が、勢い余ったよ」

「いや、勢い余ったとかそんなレベルじゃないだろ!？」

俺はさっきこの男子が背中につかつた時、勢い余ったというよりも、タックルのような気がしてならなかった。
くそお、マジで背中痛てえ…

「あ、ごめんなさい!

オレ、ドジっ子なんで許して下さい」

「うわぁ…この人、自分の事ドジっ子って言ったよ…」

「テへ」

「いやいや、『テへ』じゃねーよ…!」

俺は、体勢を最初来たのように戻し、その一年に向き直った。

「それで…?」

お前、俺に用があるのか?」

「はい、寺岡先輩にお願いがあります!」

その一年は、キリッとした表情になって言った。

それにしても、なんで俺の名前を知ってるんだろっ。
まあ、心当たりはいくつかあるんだけど…

「で、お願いって何？」

「寺岡先輩、我が甲虫同好会の部長になって下さい！」

思わず吹いてしまった。

まさか、あの黒川先輩が部長をやった同好会の話だとは。

「なんで俺なんだ…？」

「いやー、寺岡先輩が黒川先輩のお墨付きと聞きまして…」

「うわ…またか…」

俺が部長になってから、このパターンのお願いはもう五万とされてきた。

これも黒川先輩の無駄に広い人脈のせいだ。
死んで部長を任せておいて本当にいい迷惑だ。

まあ、ほとんどのお願いは断って来たわけだが。
もちろん、今回も引き受ける気はない。

「悪いが俺は忙しいんだ。
代わりなら、他にたくさんいるだろ？」

「そ、それは困ります！」

だって、甲虫同好会の部員は、黒川先輩を入れてたったの二人しかないんです！！」

「えー……」

つまり、今はこの男子一人だけという事になる。

まあ、暇だからムシキングばかりやってる同好会だから当然といえは当然だが。

「もちろん、ただとは言いません。

寺岡先輩が部長になってくれれば、オレはオカルト研究会の部員になります！」

「……！！」

そ、それは本当か？」

「はい、もちろん！」

「うーん、甲乙つけがたくなっ たな……」

実は、オカルト研究会も存続の危機にあった。

黒川先輩がいなくなり、部活動規程人数を下回って、このまま行く

と廃部になってしまふ状態にあつた。

「それに、黒川先輩と約束したんですよね？」

「な、なぜそれを知ってるんだよ…！？」

「噂で聞きましたよ」

「うっ…断りずらくなつた…」

とつか噂流したの誰だよ。

本当の高校生の噂というのは恐ろしいな…

そして、俺は覚悟を決めた。

「…仕方ないな。」

今回は引き受けてやるよ」

「本当ですか！？」

「お前が約束を果たしてくれるなら…だけどな」

「もちろんです！

こき使ってくださいよ！」

「なんか語弊がありそうな言い方だな…」

ふと、俺は肝心な事に気がついた。

「ところで、名前は…?」

「あ、自己紹介してませんでしたね」

その男子は、堂々と胸を張って言った。

「オレの名前は、柳川やなぎかわ 瑞穂みずほです。

寺岡先輩、これからよろしくお願いします!」

「柳川な…よろしく」

こうして、俺は甲虫同好会の部長にもなり、部員を増やす事に成功した。

俺は、また多忙な生活が始まる予感を感じ取り、ため息をついた。

「はあ…また面倒な事が起きそうだな」

それから少しして、オカルト研究会の部員が少しずつ入ってきた。部室に最初に入ってきたのは忍だった。

「おいつす、光輝って…アレ？
横にいる人は誰なの？」

「ああ、こいつは新入部員の柳川だよ。
俺が甲虫同好会の部長もやるという条件で入ってもらった」

「へー、新入部員…
いるには越した事はないけど、今更って感じだよね」

柳川は今の一言で涙目になっていた。
結構ショックだったらしい。
仕方ないからフォローするか。

「そんな事言うなよ。
今は部活存続の危機にあるんだ、これで回避できるから充分ありがたいだろ？」

「あー、そうだね。
柳川君、あたしは三波忍。
これからよろしくね！」

「は、はい！
よろしく願います！」

柳川は相変わらずの敬語だ。

俺はなかなか礼儀正しい奴だと思った。

まあ、一人称は『オレ』のままだけど…

そうしている内に、川村が入って来た。

川村は、すぐに柳川に気付いたようだ。

そして、そのまま柳川をじっと見つめた。

柳川は急に見られたせいか、怯えたような表情をしていた。

わずかな沈黙の中、ついに川村が口を開いた。

「貴方… 新入部員？」

「は、はい！」

や、柳川瑞穂という者です！

よろしく願います！」

「そう… 柳川君ね…」

私は川村ひより… よろしく…」

そういった川村は、俺達の前から歩み去った。

柳川は、俺の方を向いた。
顔を見ると涙目になっているのが分かる。

「て、寺岡先輩…」

川村先輩がオレに対して、何だか冷たい気がします…」

「気のせいだつて。」

川村は、大体の奴にああゆう態度だからな」

「あー、そうですか。」

はあ、何かびっくりした…」

柳川は、その場に座り込んでため息をついた。
相当気にしていたらしい。

俺は思わず柳川に言った。

「柳川さ、もろ男口調なのに気が弱いよな…」

「そ、そんな！」

口調と性格は関係ないじゃないですか…！」

覇気はないが、柳川はかなりお怒りのようだ。

「あー、そうだな…
悪いな、変な事言っつて」

「そうですよ、先輩だからって何を言っても許されるなんて思った
ら大間違いです！」

「はいはい、分かったよ。
分かったから落ち着け！」

このやり取りの間に、第三の訪問者が入って来た。

この気配は多分…里沙さんだ。
背中越したが、物凄い視線を感じる。

いつもとは違う声で、里沙さんが話し掛けてきた。

「寺岡君…?」

「は、はい!?!?」

「その横にいる子は誰…?」

「こ、こいつは新入部員の柳川ですよ!」

何だか分からないが、今日の里沙からは謎のプレッシャーを感じる
気がする。

「新入部員ね…
貴方、一年生よね？」

「は、はいい…」

謎のプレッシャーに圧倒され、柳川は縮こまっていた。
まあ、無理もないが…

すると、里沙さんの表情がいきなり明るくなった。

「…私の後輩が二人に！！
うふふ…うふふふふ…」

里沙さんは、顔がニヤけっぱなしのまま向こう側に行ってしまった。

一部始終を見ていた柳川は、目を点にしている。

「寺岡先輩…あの人は？」

「滝川高校の三年の中城里沙さんだよ。
まあ、この学校の生徒じゃないんだが気にしないでくれ」

「そ、そうですか…」

柳川と俺は、里沙さんに視線を向ける。
里沙さんは鼻歌を歌いながら、教室をスキップしながらうろついている。

「…中城先輩、何であんなに上機嫌なんでしょうか？」

「あー、きつとお前が来て喜んでるんだよ。
あの人、年下好きだからさ」

「もしかして…シヨタコンですか？」

「はい、そうです。」

「シー・イズ・シヨタコン」

「うわ…そうなんですか」

「でも、本人に言ったらダメだからな。
ああ見えて本人は結構気にしてるんだ」

「わ、わかりました…」

里沙さんゴメン。

俺、後輩に貴女がシヨタコンって事をバラしました。

そう思っていると、里沙さんがこちらにやってきた。
まさか、読心術を使ってこちらの思った事でも読み取ったのだろうか。

しかし、里沙さんは予想外の言葉を発した。

「寺岡君、柳川君…二人ともパトロール行かない？」

「…え？」

まさかのパトロール。

また同じ方法で俺と柳川を口説くのか。

もう俺には通用しないぞ…とは言えない。

正直な感想、かなりドキドキしてました。

本当にアレはきつかった。

「あ、オレは特に用事がないので構いませんよ」

オイ、柳川！！

ちよつとぐらい空気読め！！

今、ちよつと遠慮したいと思ったばっかだからさ！

「寺岡君もいいよね？」

「…はい」

こうして、俺の精神的な戦いが始まった。

その頃、並列世界ではアスタリスクとアディアが化け物と戦っていた。

「喰らえっ!!」

アディアは専用武器の『クローズ・ギロチン』という斧をダミー・サターンに投げ付けた。

その斧はダミー・サターンを真っ二つにし、円を描いてアディアの元に戻って来る。

これがアディアの専用武器の特性である。

「さて、化け物はこれで全部みたいだね」

「今回モ、現実世界二八被害八ナイトイイノダケド…」

「そうだね、それに越した事はけど…」

二人の足元に、二人の男女の死体が転がっている。
きつとデートの最中に襲われたのだろう。

「また犠牲者が出ちゃったね…」

あー、この戦いはいつまで続くんだろうね？」

「アブソール・ワールド・バインダーが死なカ、私達が死なマデヨ
…」

アスタリスクの言葉を聞いたアディアは、顔をしかめた。

「アブソール・ワールド・バインダー…」

あいつが並列世界を現実世界に出現させてる元凶だからね…」

「ソウ…ソノ元凶ヲ絶テバ、全テ解決スルワ…」

私達が並列世界カラ、解放サレルカ分カラナイケド…」

「管理人は管理人らしく閉じ込められるかも知れないって事だよな
？」

そうだとしたら、皮肉な運命だね…」

その時、二人の目の前にもう一人の黒いコートを着た少女が現れた。

少し前に、アスタリスクを見ていた少女だった。

そして、おもむろに口を開いてこう言った。

「管理人のアスタリスク・クエイクボーダー、アディア・ブロック
ウェイ…排除する!!」

「…!?」

二人に目掛けて、その少女はハンマーを振りかざして来た。

アディアは斧で、その攻撃を何とか受け止めた。
強い衝撃がぶつかり合い、お互いの武器が軋む。

「くっ…!!」

何なんだよ、お前!？」

「これから死ぬ奴が、知る必要がある?」

少女の悪意のある笑みが不気味な程生き生きしていた。

第十三話 レジストノアクセプト

俺こと寺岡光輝は、現在後輩の柳川と先輩の里沙さんのパトロールに付き合っている。

前回とは違い、今回の里沙さんは割と大人しく、パトロールに専念していた。

どうも後輩が二人いるせいか緊張しているらしい。

本人が少し前の時、年下好き属性（シヨタコンは何だか罪悪感を感じるから、なるべく使わない事にしよう）から早く抜けだせるようにしていると言っていたから、それが原因かもしれない。

そして、里沙さんがある程度の範囲を見回った時に、こう言い出した。

「ちょっと疲れたし、どこかでご飯でも食べない？」

そう言われると、確かに小腹が空いてきたような気がした。

今回も色々と（主に里沙さん関係のアクセプトに）エネルギー使ったからだろう。

「ああ、いいですよ。

柳川もいいよな？」

「はい、構いませんが」

「よし！それじゃあ二人共、早速行きましょう！」

いつもよりも、かなりご機嫌な里沙さんである。
そんなに後輩が好きなのか。

その時、俺の背筋に寒気が走ったり、俺は思わず立ち止まった。
里沙さんと柳川も同じ気配を感じたようだった。

「寺岡先輩…今は！？」

「へえー、お前にも分かるんだな…」

たちまち、周りの景色が赤く染っていく。
間違いなく並列世界の出現だった。

柳川は、目をまるくして周りを見渡して言った。

「これが…並列世界！？」

「その通りよ。」

最近はなかなか出現してなかったけど…」

そして、里沙さんは辺りを見渡して言った。

「しかも、今回は出現範囲が広そうね。

進入部員の柳川君でも気配を感じるとなると…」

「せ、先輩…！！」

何か来てますよ！？」

柳川が指さす先にいたのは、沢山の毒々しい色をした蛇のような化け物だった。

「こいつは、トーテム・スネイク…！」

「二人共、噛まれないように気をつけて！

トーテム・スネイクは神経を麻痺させる毒を持っているわ！」

俺は『フリー・シフト・カッター』を展開し、トーテム・スネイクを切り付ける。

里沙さんも柳川を庇うように、専用武器の『マテリアル・ドライバ』というショットガンを乱射している。

切っても切っても、次から次へとトーテム・スネイクが湧いて来る。

「くそっ…キリないな…
里沙さん、ここは一旦退いた方が…」

「そうね…」

「二人共、逃げるわよ！」

「は、はい！」

俺は逃げようとトーテム・スネイクに背を向けたその時、背後で柳川の悲鳴が聞こえた。

「あぐうっ!!」

見ると、柳川は転んで足を押さえている。

一匹のトーテム・スネイクが柳川の足を引っ掛けたようだ。

そして、その首筋を目掛けてもう一匹のトーテム・スネイクが近付いて来ていた。

「柳川、早く逃げる！」

「早く、柳川君！」

「わ、分かっていますよ！」

柳川は足をくじいたらしく、ずるずると足を引きずって逃げている。

トーテム・スネイクはもう柳川の目の前に迫っていた。

このままだと、確実に噛まれてしまう。

「わ、うああああ…!!」

「柳川っ…!!」

俺は柳川に向かって走った。

そして、柳川に近付いているトーテム・スネイクをナイフで突き刺した。

236

「今だ、早く!」

「す、すみません…オレの足はまだ…」

その時、俺の首筋に痛みが走った。

トーテム・スネイクが首に噛み付いて来たのだった。

「っ…! 離れろっ!」

無理に首からトーテム・スネイクを引きはがして、地面に叩き付け

る。

俺に噛み付いていたトーテム・スネイクは、逃げるように穴のよう
なところに逃げて行った。

そして、それに続くかのようにトーテム・スネイクの大群は元いた
穴のようなところに逃げていった。

俺はさつき噛まれた部分に手を当てる。

痛みどころか感覚すらあまり感じない。

手の平を見ると、大量の血がべつとりと付いていた。

完全に感覚が麻痺していた。

「あ…ああ…」

柳川が青ざめて俺を見ていた。

「柳川、大丈夫…か？」

「は、はい…」

それよりも寺岡先輩…首が…」

「ああ、ちよつと油断した…」

里沙さんも俺の近くに駆け寄って来る。

「寺岡君、大丈夫!？」

「はい、何とか生きてます…」

ただ…首の感覚が麻痺してるみたいです」

「やっぱりね…」

とりあえずは止血しないと。

放って置くと、後々面倒臭い事になるわ」

「そうなんですか…」

「そう、だから安静にしてて」

いつもより里沙さんが頼もしく見える…のは俺の気のせいだろうか？

「そういえば…寺岡君、止血に使える何か布のようなものは持ってない?」

「うーん…制服の下に着ているワイシャツぐらいしか…」

ふと、里沙さんが自分のワイシャツに目をやる。

という事は、まさか…

「私でもいいよ…」

私、寺岡君なら体見られ（ry」

「あー、いやいや！

自分ので結構です！！

自分ので大丈夫ですから止めて下さい！！」

「うふふ、やっぱり、寺岡君はかわいいわね！」

「大怪我してる人をからかうのは止めて下さいっ！！」

「うふふ、ごめんね。

でも、それだけ元気ならまだまだ大丈夫ね！」

それから里沙さんは、柳川に向かって言った。

「柳川君、何か持ってない？」

何も無かったら、私のワイシャツになっちゃうけど」

「か、勘弁してくださいよ！

そういう風になるなら、オレのを使って下さい！！」

柳川は、自分の制服を急いで脱ぎはじめる。

柳川の服なら何の問題もない。

…と想っていた俺が馬鹿だった。

「「…!!?」「」

柳川がワイシャツを抜いた姿を見た時、俺と里沙さんは呆気に取られた。

柳川が下に着ていたのは、女物の下着だった。

そして、今気付いたが、胸に少し膨らみが…

里沙さんは、この世の物とは思えない物を見たような顔をしている。

多分、俺も同じような表情をしているのだろう。

「あ…ああ…あがが…」

「な…な…何で…女物の…」

柳川はこちらの反応を見て、意外そうな顔をしていた。

「あ、あれ？オレが女って事知りませんでしたっけ？」

「「…知らないよ!!」「」

なんと、柳川は女子だった。

何処となく女子に似ている気はしなくは無かったけど。

「それで…何で男子の格好してたんだ？」

「実は…オレ、心が男の子気味なんですよね。

俺は女の子だけど、心は女の子じゃない。

ならば、せめて格好だけでも男の子という感じで…」

「そ、そうか…」

もう、どこをどう突っ込めばいいか分からない。

そんな事より、里沙さんの精神的なダメージを受けているらしく、口を押さえて涙目になっている。

「わ、わ、わ私のもう一人の後輩が…」

お、お、おお女の子だなんて…」

「里沙さん…大丈夫ですか？」

「だ、だ大丈夫う…」

私は…へ、へ、へ、平気よ…」

「全然大丈夫じゃなさそうですね…」

その後、俺は結局自分のワイシャツを破って応急処置をもらった。

柳川と里沙さんは、何かがつかりしているようだったが…

「寺岡君、私の…嫌いなのかしら？」

「寺岡先輩、オレのワイシャツ使えばよかったのに…
やっぱりオレの…見るの嫌なのかな？」

…と、二人がブツブツ言いながらこっちを見ている。
何か雰囲気怖い。

女子と話すのは少し慣れたけれど、やっぱり生き物として理解するには、まだまだ時間が掛かりそうだ。

それはそうと、今だに並列世界は消える気配を見せなかった。

多分、この並列世界は、今まで一番最大の規模の並列世界だろう。
そして、里沙さんですら体験したことがない滞在時間、四時間が経

過していた。

「おかしいわね…」

これだけ時間が経っても並列世界が消えないなんて」

「やっぱり、今回の並列世界は異常ですよ。

出て来る化け物の数が異常に多過ぎるし…」

そう言った俺はバランスを崩して、倒れそうになった。
慌てて柳川が、バランスを崩した俺を受け止める。

「て、寺岡先輩…首、大丈夫ですか？」

「悪い…大分麻酔が回ってきたらしい…」

もう、ほとんど全身の感覚が無いんだ…」

「…！」

「…すいません…オレのせいで…」

柳川の表情が暗くなる。

自分に責任があると、自分を責めているみたいだった。

俺は、できる限りの明るい表情で、柳川に言った。

「…そんな事気にするなよ。」

大事な後輩なんだ…守って当然だろ？」

「寺岡先輩…」

柳川は、潤んだ瞳をこちらに向けて来る。

俺は思わず、目を背ける。

おい、そんな目で俺を見るな。

元男子の女子にそんな目で見られると、どう反応すればいいかわからないから。

すると、里沙さんはわざとらしく咳ばらいをした。

「ゴホン…寺岡君？」

「は、はいっ！？」

何ですか…？」

急に話し掛けて来たので、声が裏返ってしまった。

里沙さんはため息をついて言った。

「はあ…まだここは並列世界なんだから、もっと緊張感を持ってくれないと困るよ？」

「は、はい…
すいませんでした…」

「ちゃんとしてね？
寺岡君はもう二年生なんだからそこら辺はちゃんとして…」

里沙さんがそう言いかけた時だった。

目の前に黒装束の女の子が吹っ飛んで来た。
黒装束…つまり、管理人だ。

「なっ…管理人!？」

俺の言葉に、その栗色の髪の毛の管理人がガバツと起き上がり反応した。

「もしかして、貴方は…テラオカコウキ!？」

「え…」

いきなり名前を呼ばれて、俺は不意を突かれた。

「まあ、そうだけど…」

「…やっぱり!!」

私の名前はアディア・ブロックウェイ。

君の噂は、アスタリスクからよくよく聞くよ」

「は、はあ…どうも」

俺は、何だかどう反応すればいいか分からないから、とりあえず挨拶した。

そして、アディアは俺の手を掴んで言った。

「お願い！助けて!!」

アスタリスクが危ないんだ！

ほら、行くよ!!」

「え、ええ!？」

今から行くのか!？」

「そつだよ、早く!!」

アディアは、俺の手を掴んだまま走り出した。

そして、呆然としている里沙さんと柳川にこう言った。

「貴女達も来て！」

今回はかなりまずいから…」

何か言いたそうな二人を余所にして、アディアはさらに走るペースを上げた。

その頃、アスタリスクは、激しい戦闘を続けていた。

相手は、正体不明の管理人。

専用武器は、この巨大なハンマーだろう。

「ほら、背中がお留守だよ！」

背中を思いつ切り殴られ、アスタリスクは廃ビルにたたき付けられる。

「クウツ…!!」

アスタリスクは体勢を立て直すと、槍を構えて突進した。

「ハアアッ！」

アスタリスクの槍を、その少女がハンマーの金属部分で受け止める。

「ナ…！？」

「全然甘いよ！」

その少女は、槍を弾き返すと、アスタリスクの頭を殴り付けた。

「アグッ…」

殴られたアスタリスクは、地面にたたき付けられた。

少女は薄笑いを浮かべながら、アスタリスクに鉄槌を振り下ろす。

その時、ある人物の声が響いた。

「その辺にしておきな！」

「…！？」

思わず、少女の手が止まる。
その視線の先に居たのは、冴被渚だった。

「お前らの敵は化け物じゃないのか？
なのに、仲間同士で何をしてるんだ？」

「君には関係ないよ…サエハラナギサ!!!」

少女はそう言うと、いきなり冴被に攻撃を仕掛けた。

冴被は、それを簡単に避けた。

「おおっと、危ない危ない…
全く、お前らはよく分からない奴らだな！」

攻撃を外した少女は、アスタリスクに対する殺意を冴被に向けた。

「僕の邪魔するなら、たとえ君でも容赦しないよ!!」

冴被はため息をついて、刀を構えて身構える。

「やれるなら、やってみな。
シグマ・レイティナ…!!!」

二人は同時に、武器を構えて突進する。

辺りに響いた金属音が、戦いの始まりを告げた。

第十四話 フォーマー・アンド・プレゼント

冴祓は、シグマ・レイティーナという管理人と戦闘を繰り返していた。

一進一退の戦いが続き、お互いにボロボロになっていた。

息切れをしながら、シグマは冴祓に言った。

「適応者でもない、ただの人間ごときに僕が…!!」

汗だくになった冴祓がニヤリと笑う。

「おいおい、どうした？」

その程度でよく管理人って言えるな」

シグマはその言葉が頭にきたらしく、顔つきが一気に険しくなる。

「な…ナメるなっ!!」

シグマは、今までよりも格段に早く攻撃を仕掛けてきた。

「…やっと本気か？」

冴袂は刀を鞘に納めると、目を閉じて刀に意識を集中させる。危機的状況だからこそ、冴袂はなるべく無心になろうとした。

（落ち着け…今だと思ったら、五歩先を切るイメージで…）

シグマは、目を閉じた冴袂にどんどん接近してきている。

「ほらほら、どうした！？
ははっ、もしかして諦めたのか！？」

勝ち誇ったように、シグマがハンマーを振り上げた。

（焦るな…まだだ…）

ハンマーが振り下ろされ、冴袂の頭を殴り付けようとしたその時だった。

（…今だ…！）

冴被は、一気に刀を引き抜いた。

刹那の沈黙。

渾身の一刀が、シグマを切り付けた。

「痛っ…！？」

シグマは、切られた肩を押さえて地面に崩れ落ちた。
その顔は、痛みと驚きに歪んでいる。

「この僕がっ…何で人間ごときに！？」

冴被はゆっくりと刀を納めると、ため息をついた。
そして、シグマを見下ろして言った。

「お前も堕ちたな。

まず、感情に左右され過ぎだ。

会った時のお前は…そんな奴じゃなかったぜ？」

その一部始終を見ていたアスタリスクは、呆然とその光景を見ていた。

「ナ、ナンテ強サナノ…」

それに気付いた冴祓は、アスタリスクに近づいて言った。

「俺は別に強くないさ。

あいつが劣るえたか、あいつより運が良かったかだけだ」

アスタリスクは、冴祓に一番聞きたい事を聞いた。

「ナンデ、私を助ケタノ…?」

「お前、寺岡が言ったアスタリスクだろ?」

「…!!」

驚いているアスタリスクを見て、冴祓はニヤリと笑った。

「寺岡からお前の話はよく聞いてるぞ。
聞く限りだけど…お前、中々いい奴みたいだな」

「私ガイイ奴…？」

ソレハ…彼ガ言ツテタ事ナノ？」

「ああ、そつだ。

なんだつたら、本人に確かめればいいんじゃないか？」

「イヤ…ソコマデシナイワ…」

二人が話していると、傷を押さえたシグマが会話に割り込んで来た。

「サエハラナギサ…」

君もしばらく見ないうちに随分と変わった…」

冴抜は、軽くシグマを睨んで言った。

「フン…復讐は人を変えるって言ったのは、何処の誰だ？」

「ああ、確かそんな事…言ったか…」

アスタリスクは、冴抜の名前を聞いてハツとした。

「サエハラナギサ…!?
マサカ…ソナナハズハ…」

「事実だ、アスタリスク。

彼は、『異世界からの殲滅者』と呼ばれた男…」

しかし、当の本人は首を傾げている。

「え？俺って、そんなに有名なのか？

確かに、化け物を沢山殺してた時期は会ったが…」

シグマは、呆れたように言った。

「沢山殺してたのレベルじゃないぞ？

今までに、五百体近くの化け物を殺しておいて…」

「え、そんなにやったか？」

「はあ…全く、君はそんな事も覚えてないのか？」

化け物を殺した数を聞いただけでも普通のこととは思えない。

たった一年で五百は、管理人でも相当なペースで化け物を倒さないと、そこまで達したりしない。

割と多く戦闘を経験しているアスタリスクですら、一年でせいぜい三百体ぐらいだった。

アスタリスクは改めて、目の前の人間の恐ろしさを知った。

人間は復讐に狂うと、化け物ですら凌駕する。

この冴抜者がいい例だ。

アスタリスクは、昔の自分を思い出し、思わずため息をついた。

「ハア…私モ人間ノ頃ハ…コンナ感ジダツタカシラ？」

アスタリスクの意識は、人間だった時の記憶を辿り始めた。

……

アスタリスクが生まれ育ったのは、とある国の工作員を育成する組織だった。

物心がついた頃から、自分のいる所は普通の家庭ではない事を分かっていた。

アスタリスクは、優秀な兵士の体細胞から造られたクローンの一人であり、もちろん家族などいるはずがなかった。

ただただ訓練に明け暮れ、他の兵士のクローン達と淡々と任務をこなすだけの日々を過ごしていた。

そして、そんな彼女の人生ががらりと変わったのは、ある人物との出会いだっただけ。

自分と同じ人間から造られたクローン、アステイラス・ブレイクボーターとの出会いだっただけ。

ある日、突然として組織の訓練に入って来たアステイラスは、自分と非常によく似ていた。

アスタリスクは最初、自分によく似たアステイラスがどうも苦手だった。

戦闘時の思考回路、よく使う武器、破壊工作の手口…全てが似ていた。

そのくせに、どの分野から見ても、アスタリスクが圧倒的に優秀だった。

アスタリスクは、同じ人間のクローンとして、放って置くわけにはいけないので、仕方なく指導をしていた。

それが新しく追加された彼女の日常だった。

そんな中で、アスタリスクにはある感情が芽生えていく。

それは、姉としての妹に抱く母性的な感情だった。

この子を自分の手で守りたい、困っていたら手助けしたい、自分を頼って欲しい…そんな感情だった。

アステイラスは自分の唯一の家族として、アスタリスクは何があっても彼女を守ると誓った。

しかし、今から三年前…。

それは、日本へ逃げ出したターゲットをアステイラスと追跡する任務の最中での事だった。

現地で、並列世界に遭遇したのだった。

最初は、周りの変化に違和感を覚えていたが、そこまで気にする事はしなかった。

しかし、見たこともない化け物が出現した事で、この場所は普通ではないと知ったのだった。

二人は、護身用として持っていた拳銃で化け物に対抗した。
作業員という事もあり、それなり数の化け物を倒した。

順調に、脱出への道を進んでいるように思えた。

しかし、ある化け物の出現で事態は一変する。

後に、『アブソール・ワールド・バインダー』と呼ばれる存在だった。

『アブソール・ワールド・バインダー』の出現で、二人は、成す術も無く打ちのめされていく。

そして、とうとう二人は『アブソール・ワールド・バインダー』に殺された…

しかし、適応者だったアスタリスクは、管理人として生き返った。

管理人になったアスタリスクは、アスティラスがどうなったかは解らないかった。

そして、アスタリスクは姉として責任を胸に、アスティラスを探すと共に、化け物を殺し、自分の脱出も目指す事を決めた。

……

これが、アスタリスク過去の記憶だった。

彼女が物思いに耽っていると、聞き覚えがある声が聞こえた。

「おい、アスタリスク！」

「アディア…！」

そして、そのアディアの後ろにいたのは、寺岡光輝だった。

「…テラオカコウキ!？」

ナ、ナンデ貴方が…？」

「えーと、ちょっとこの人に呼ばれてね…」

「ツマリ…私ヲ、助けニキテクレタノ？」

「まあ、そんなところかな？」

アスタリスクは、クスツと思わず笑った。

「ヤツパリ貴方…変ワツテルワネ…」

「え…？」

「イエエ、気ニシナイデ…
ソレヨリ、助ケニ来テクレテ…アリガトウ…」

「えっ、ああ…
それぐらい気にするなよ」

寺岡は、何だか驚いた顔をしていた。

さらに後ろの方で声がした。

「ちょっと！寺岡君をどこに連れていくつもり!？」

「そうだよテ寺岡先輩は皆の物だよ!!！」

そう、いつもの部活のメンバーが集まって来たのだった。

アスタリスクは、いつもよりも疲れそうな人が来たと思い、ため息をついていた。

「ハア…日本人ツテ、皆コウナノカシラ？」

並列世界が出現して、三時間が経とうとしていた。

今、川村と忍を除いた部員全員（管理人も含めて）が集結していた。

俺は川村と忍の二人に連絡しようとしたが、依然として携帯は繋がらない。

「くそっ…!!」

そんな俺を見て、里沙さんは言った。

「寺岡君、少し落ち着いて。

あの二人は、そう簡単にやられたりしないわよ」

「だけど…!!」

「大丈夫よ。

お姉さんを信じなさい!!」

里沙さんは、何故かどや顔で『お姉さん』の部分を強調している。

『お姉さん』の響きが気に入っているのだろうか。

そして、何故だか分からないが里沙さんと話している内に、心配をしている自分が馬鹿馬鹿しくなってきた。

「そうですね。」

心配しても、仕方がない…二人を信じて待ちますか!」

「あれ、私じゃなくて?」

「里沙さん…いい加減に、その何か如何わしい感じがする言い方は止めて下さい…」

「え、何か変な事言った?」

「いや、何でもないです…」

ちよつと自意識過剰になりすぎたみたいですよ…」

俺は、自然とため息をついていた。

それと同じ頃、川村と忍の二人は、化け物達から必死に逃げていた。

川村が鎖を鞭のように使い、化け物に対抗し、忍が川村より先に移動し、安全な逃げ道を確認する。

…という体制をとっていた。

そして、今も川村は化け物と戦っている。

「三波さん…今の内に…！」

「わ、わかった…！」

川村が、群れになったダミー・ハウンドを、鎖で威嚇し動きを止めている間に、忍は近くのマンホールの蓋を開けた。

「川村さん、とりあえずはこの中に逃げよう…！」

「…わかったわ！」

二人は、ダミー・ハウンド達からの攻撃を避けながら、急いでマンホールの中に入った。

下に着くと、辺りは真っ暗で、水が流れる音しか聞こえない。

「ここは…逃げるには、ちょっとまずかったかな？」

「降りてしまった今、そんな事を言っても仕方ないわ…
それよりも…」

川村の耳には、不規則な足音と金属音が聞こえていた。

「今は…自分の身を守る事だけを考えて…!」

川村は、暗闇に目を凝らして、音の正体を確かめようとした。だが、なかなか形として見えてこなかった。

「全然見えないわね…」

三波さん、くれぐれも私とはぐれたりしないで…」

「言われなくても、離れたりしないよ!」

すると、突然辺りが明るくなった。

「…!?!」

二人は、光から思わず目を背けた。

目が慣れてきて、目の前にいる者の姿が見えた。

そこにいたのは、体に鎖を纏った人型の化け物だった。

体は人間とほぼ変わりがなく、顔全体をサイコロのように、一面ずつ違う模様が描かれた立方体の仮面のような物を被っている。

その立方体の二面にそれぞれ一つずつ雑に開けられた穴があり、そ

こちら視線を感じる。

そして、全身のほとんどに鎖が巻き付いている。ちょうど手に巻き付いている鎖の先端部分には、指に重なるように五本の爪のような刃物が付いている。

「な、何なの…!？」

「分からないわ…」

でも…明らかに人間ではない…

化け物…または、それ以上危険な何かというのは分かるわ…」

その仮面を付けた化け物は、ゆっくりと二人に近づいて来た。

二人は、本能的な危険を感じ、後ずさっていた。

「いやっ、来ないでっ!」

「三波さん…ちょっといいかしら?」

こんな時にも関わらず、川村は冷静に忍に話し掛けた。

「か、川村さん…な、何?」

「ここは…私が囿になるから、貴女は逃げて…」

「ええ！？」

「貴女が…寺岡君達と合流して、私を助けに来て…
今は、それしかないわ…」

「そんな…あ、あたしなんかじゃ…」

そう言っている間に、敵は刻一刻と迫って来ている。

「三波さん、早く…！！」

「…！！」

わかった…川村さん、必ず助けに来るからね！！」

忍は、全力で暗闇の中に走って行った。

残された川村は、謎の化け物を目の前にして、鎖を構えた。

「私は鎖を武器として使っているから、扱いには慣れていて…
簡単に…化け物の鎖を相手にやられたりしない！！」

川村は、いつもよりも大きな声で自分に言い聞かせ、化け物に攻撃を仕掛けた。

「オカシイ…絶対二、オカシイ…」

「ん？どうかした、アスタリスク？」

行動を共にしていた管理人の一人のアスタリスクが、何やらぶつぶつ言っていた。

「明ラカニ並列世界ノ出現範囲ト、出現時間ガ異常ナノ…
今マデ、コンナ強イエネルギーヲ持つタ並列世界ノ干涉ハ見タコト
ガナイワ…」

「そうか、やっぱり異常なんだな…」

アスタリスクの顔付きが、いつもより険しい。
やはり、かなりまずい事なのだろう。

「いや、異常ってレベルじゃない！」

「あ、シグマさん…」

いきなり、冴蓑にこてんぱんにされた、シグマ・レイティーナが会話を割り込んで来た。

日本刀で切られたのに、ぴんぴんとしているし、普通に歩いている。随分と元気なものですな。

「僕の読みでは、『アブソール・ワールド・バインダー』の力が最高に達したんだと考えているんだ」

「あ、あのー…シグマさん？」

シグマは、話を夢中になって続けている。

「全ての並列世界の干渉は、あいつが原因だから…そうに決まっているー！」

「シーグーマーさん」

ダメだ。

もう、シグマの一方通行なトークは止まらない。

「だから、僕はあんな化け物と戦うなんて反対だったんだよ。

今まで『アブソール・ワールド・バインダー』に挑んで何人死んだ事か…」

「わかった！わかったから！！
もういいよ、シグマ！もういいよ！！！」

シグマは、俺の反応を見て、不満そうな顔をしている。

「んー、なぜだ？」

せっかく、この僕が直々に説明してあげているのに…」

「いや、大体分かったから…」

あんたには悪いが、無駄に話を聞くのは嫌だからさ」

シグマは、俺の言葉を聞き、うつたえていた。

「き、君は…！！
僕にそんな口を聞くなど…」

今度は、アスタリスクが会話に割り込んできた。

「何カ問題アルノ？」

「なん…だと！？

このテラオカは、僕に対する敬意が全くないんだぞ！？」

「ソレヲ強制サセヨウトスル貴女ノ方ガ、ドウカシテルト思ウケド
…?」

「な、何だと!!」

お前は、テラオカコウキの味方をするのか!？」

俺は、ぽかんとこの光景を見ていた。

そして、ため息をついて、他の面子の所に行くことにした。

何だか相手にするのも面倒臭いので、俺は彼女達は放っておくことにした。

とりあえずは…暇潰しに、冴袂と話す事にした。

「おーい、冴袂!」

「寺岡、どうした?」

「実は聞きたい事があったな…」

シグマの事なんだが…」

「ああ、あいつの事か。

答えられる限りならいいぜ」

「そうか、まずお前が最初にシグマに会った時の事を聞きたいんだ
が…」

俺は、冴被にシグマの事を聞きはじめた。

冴被と寺岡が話しているのを、何だか不満そうに見ている人物がいた。

寺岡と同じ適応者の一人、中城里沙だ。

(暇なら、私と話して欲しかったな…)

そんな事を思いつつ、里沙は二人を見つめていた。

ふと、誰かが里沙の肩を軽く叩いた。

「あ、あのー、中城先輩？」

「ん？」

振り向くと、柳川瑞穂が立っていた。

里沙とっては、男の子ではなかったのが唯一残念な新入部員だった。

「あ、柳川さん。

私に何か用でもあった？」

「はい、ちょっと先輩に聞きたい事が…」

そう言っつて柳川は、何処からか木刀を取り出した。

それを見て、里沙は思わず息を飲んだ。

里沙は、その木刀に見覚えがあつた。

「そ、その木刀は…！？」

「そうです、黒川先輩の木刀です。

オレも何度も見たことがあるので分かります」

黒川白刃は、寺岡の前のオカルト研究会の部長であり、並列世界で戦つてあっさり死んでしまった…

その黒川が、使っていた木刀が目の前にあつた。

「柳川さん…何処でそれを？」

「オレにもよく分からないのですが…
寺岡先輩がオレを庇ってくれた時に、いつの間にか、手に持っていました」

「手に…持っていた？」

「はい、何も無いはずの所から急に…」

「そう…」

里沙には、思い当たる事があった。

(今の話を聞く限りでは、特徴が専用武器とほぼ同じ…
まさかとは思うけど、この子は…)

里沙は、ある事を試してみる事にした。

「柳川さん、その木刀ちょっと貸してみて」

「…え？」

あ、はい…どうぞ」

里沙は、少し前にアディアに教えてもらった適応者を見分ける方法を試してみた。

それは、適応者と管理人なら誰でもできる事だ。

里沙は木刀に手を沿え、こっぴどい。

「適応者の名において命じる、汝の名を示せ…」

木刀の側面に、文字が浮かび上がった。

「『リメイン・ツリーブレイダー』…
やっぱり、貴女は適応者みたいね…」

「え、オレが…ですか？」

会話をしていた二人の後ろで、突然マンホールから三波忍が出てきた。

「あっ！みんな！！」

「た、大変なんだよ！！」

「み、三波さん！？」

「どうかしたの？」

「あのね、川村さんが…」

その時…忍の話を遮るように、後ろのマンホールから、鎖を纏った

化け物が飛び出して来た。

そして、その化け物の鎖に、川村ひよりが捕われていた…

第十五話 アブソール・ワールド・バインダー

冴被と話していた俺は、後方からの悲鳴のような声に気が付いた。

さらに、その声は、連絡ができなかった忍の声に似ていた。

「おい、どうしたんだ!？」

忍でも見付かったのか？」

そう言っつて振り向くと、予想外な光景が広がっていた。

そこにいたのは、今まで見たことがないような化け物。

そして、その体を纏っている鎖の一部に、行方が分からなかった川村が捕まっていた。

その様子を、里沙さんと柳川が、それぞれの武器を構えて睨んでいる。

「川村っ!?!」

何も考えず、化け物に近づこうした俺の肩を、川村と同じく、行方が分からなかった忍が掴んだ。

「光輝、落ち着いて！」

「えっ、忍!?!」

「そう、あたしだよ！」

そして、忍は俺の肩を後ろに引つ張って言った。

「とりあえず、むやみに前に出たら駄目！」

あんなのに捕まったら、もうやられたも同然だよ!」

「くっ…分かったよ…!」

俺は、思うように攻撃が出来ない事が、もどかしくて仕方なかった。

里沙さんも同じような状態らしく、ライフル銃の『エキスパート・ストライカー』は展開しているものの、微妙な表情で化け物を睨んでいる。

「これは、迂闊に打てるものではないわね…
どうしても、川村さんに当たる可能性が…」

その時、こちらの異変に気付いた冴祓とシグマが、すごい勢いで走ってきた。

「おいおい、俺らを差し置いて何をしてるんだ？」

「…冴抜！！」

シグマは、化け物を見るなり言った。

「とうとう、現れたな…『アブソール・ワールド・バインダー』！」

「なっ…『アブソール・ワールド・バインダー』！？」

そう、この化け物が『アブソール・ワールド・バインダー』…アスタリスクが言っていた、並列世界出現を支配する、元凶にして最強の化け物らしい。

その最強の化け物が、今、俺達の目の前にいる。しかも、川村が捕らえられている。

「…どうすればいい？
いや、それは最初から決まっている。」

「川村を助けて、確実奴だけを殺す…それしか無い！」

無茶な事だが、可能性に賭けるしかない。

いくら最強の化け物でも、いくら不利な状況でも、諦める事はし
てく
な
か
っ
た。

そんな俺の台詞を聞いて、シグマは、ハンマーを構えて俺の横に並
ん
だ。

「テラオカコウキ…本当にやる気なのか？」

「ああ、当たり前だ。

お前みたいに諦めて、希望を捨てるなんて御免だからな」

シグマは、少し驚いたような顔をした後、やれやれという風に言っ
た。

「本当…君達の行動には本当に驚かされるな。

君がそこまで言うなら…僕も戦わさせてもらおう！」

「シグマ！」

それを聞いていた冴抜は、横でニヤニヤ笑っている。

「ほう…少し前まで敵だったお前が、今度は見方気取りで真っ先に

戦いに協力するなんて…
どういつ心境の変化だい？」

シグマは、少し動揺しながら言った。

「い、いや違うんだ…！
君に負けたから、ただ嫌々従っているだけで…
か、か、勘違いするなっ…！」

「はいはい、分かりました。
とりあえずは、そうゆう事にしといて…！」

会話を遮るように、『アブソール・ワールド・バインダー』が、こちらに向かっていきなり鎖を飛ばしてきた。

「二人とも、話は終わりだ！
もう、来てるぞ…！」

「ああ、分かってる！」

俺達は、一斉に後ろに下がって、攻撃をかわした。

最初に、冴祓が『アブソール・ワールド・バインダー』に攻撃を仕掛けた。

冴被は、全力で『アブソール・ワールド・バインダー』に近づき、刀を構えた。

「まずは…そいつを返して貰おうか!？」

冴被はそう言うと、『アブソール・ワールド・バインダー』も格段に速い速度で、川村を捕らえている鎖を刀を切り付けた。しかし、鎖は刀を弾いて、軋んだ音を立てるだけだった。

「そんな馬鹿な…
鎖が日本刀を弾くだ!？」

冴被は咄嗟に後退し、刀を構え直して、迎撃体制を取った。

次に、シグマが『アブソール・ワールド・バインダー』に突っ込んだ。

「切断武器が駄目なら…
僕の打撃武器はどうだ!？」

シグマが『アブソール・ワールド・バインダー』を殴ろうと、ハン

マーを振り上げた。

しかし、『アブソール・ワールド・バインダー』の鎖が、シグマの手足と、ハンマーに絡み付いて来た。

「くっ…！離せっ…！」

『アブソール・ワールド・バインダー』は、シグマに向かって金属の爪を突き刺そうとした。

「そうは、させない…！」

俺は、専用武器の『フリー・シフト・カッター』を右手に展開すると、その刃物でシグマ鎖を捕らえている鎖を切り付けた。

今度は、鎖が綺麗に真っ二つに切れた。

「な…鎖が切れた！？」

「今だ…！」

シグマ、そこから逃げろ…！」

「あ、ああ…！」

鎖から解放されたシグマは、後ろに退避した。

『アブソール・ワールド・バインダー』は、急に乱入してきた俺に向かって、手に付いた刃物を向けてきた。

俺が攻撃した直後の、わずかな隙を狙って攻撃してきたのである。

「…っ！！」

このままだと、無防備な状態で切り裂かれてしまう。

(このままじゃ、殺られる！)

せめて、このナイフの長さがもう少しあれば…！！！)

『アブソール・ワールド・バインダー』の刃物が、俺の頭上から降ってきた。

「くそ…！！」

俺は、成す術もなく攻撃に飲み込まれた。

「寺岡っ！！」

「そんな…！！」

冴抜とシグマは、寺岡が地面にたたき付けられるのを見て、思わず叫んだ。

「テ、テラオカコウキが…やられてた！？」

「あの馬鹿！」

さっさと動かないからやられ…」

すると、『アブソール・ワールド・バインダー』の爪の下にできた瓦礫から、声が聞こえて来た。

「人を…勝手に殺すなっ！！」

瓦礫を跳ね退けて、顔に大きな傷ができた寺岡が出て来た。

そして、彼の片手には、専用武器の『フリー・シフト・カッター』が握られていたのだが…

その形態が、大きく変化していた。

柄の部分が広くなり、ナイフのような刃渡りが、以前よりも格段に長くなり、片手持ちの剣のようになっていた。

そして、以前と大分違うのは、長さが違う二枚の刃が合わさって、一つの刃のようになっていて二枚刃という事だ。

その様子を見て、驚いている冴被とシグマに向かって、寺岡は声をかけた。

「おい、何突っ立てるんだ？

まだ、戦いは終わっちゃいないぜ？」

すると、寺岡の復活に気付いた『アブソール・ワールド・バインダー』が、再び爪型の刃物を寺岡に向けてきた。

「おっと…」

寺岡は身を翻して、『フリー・シフト・カッター』を上手く使って、攻撃を避けた。

「同じ攻撃なんか…度も喰らうかよー!!」

寺岡は、冴袂とシグマの隣まで来て、武器を構え直した。

それと同じ時、柳川と里沙とアスタリスクがこちらに走って来た。

「助けに着ましたよ、寺岡先輩！」

「寺岡君、大丈夫!？」

「あ…柳川、里沙さん！
とりあえずは、動けます」

アスタリスクは、専用武器の『スマッシュ・ジャベリン』を片手に言った。

「コイツガ『アブソール・ワールド・バインダー』…
トウトウ姿ヲ現シタワネ…」

その横にいたのは、お祓い棒を持った、何だか頼りない雰囲気醸し出している忍だった。

「し、忍!？」

「あ、あたしだって戦うよ！
川村さんを助けるって、や、約束したから!」

しかし、忍の体は小刻みに震えている。

「あの一、忍…」

「一つ、言わせてくれないか？」

「…な、なに!？」

「忍…お前さ、ちよつと無理してないか？」

お前は大した強くないし、あんまり…無理すんなよ？」

「ち、違…!」

「そ、そんなの…よ、余計なお世話だよつ!！」

忍は、凶星だったのか、動揺して、顔が真っ赤だった。

あんまり弄つても可哀相と思った寺岡は、いつものメンバーが揃ったという事で、部長として仕切る為に、声をかけた。

「よし、みんな…」

まずは、川村の救出。

次に、『アブソール・ワールド・バインダー』を倒す…
異論は無いな!？」

全員が頷く。

オカルト研究会+管理人が、団結した瞬間だった。

「よし、みんな行くぞー!!」

そこにいる全員が、『アブソール・ワールド・バインダー』に攻撃を仕掛けようとしたその時だった、『アブソール・ワールド・バインダー』が川村を全身で覆った。

「なっ…!?!」

「か、川村さん!!」

そう叫んだ時には、川村の体はすっかり鎖に埋もれ、『アブソール・ワールド・バインダー』の体の形もぐちゃりと崩れ、ただの鎖の塊のようになってしまった。

そして、その鎖の中から、出て来た物を見て、全員が息を飲んだ。

「……………!?!」「……………」

『アブソール・ワールド・バインダー』の立方体の仮面を被り、鎖を全身に纏った川村が出て来た。

「川…村さん…」

「先輩…何で…」

「ど、ど、どついう事だ…」

川村は…川村は…」

「まさか…奴八人間ノ身体ヲ、乗ツトル事が出来ルノ!？」

「馬鹿な…そんな事、僕ですら知らないぞ!？」

「だとすれば…カワムラヒヨリは、『アブソール・ワールド・バイ
ンダー』の一部に…」

「っ…こんなの冗談だろ!？」

「そんなあ…！」

川村さん！川村さん!!」

そこにいた全員が、目の前の出来事を受け入れたく無かった。

川村ひよりは、『アブソール・ワールド・バインダー』と化した。

アスタリスク曰く、化け物の中には、人間を取り込んで、自分を強
化する化け物があるらしい。

人間を取り込むと、格段に能力が上がり、危険度が一層増す。

そして、その取り込まれた人間が無事であるはずもなく…
化け物の身体から引きはがしても、心が死んでいたり、言葉が話せなくなるという精神面で何らかの障害が生じる。

そして、この状態になった場合は…管理人なら、大概は仲間が息の根を止める。

要するに、化け物として存在するぐらいなら、一思いに殺してやる…というのが管理人の考えなのだ。

そして、それは…川村に関しても同じ…
川村を自分達の手で殺さなければならぬ…

「くそ…！」

川村…こんなの嘘だと言ってくれ…！」

「……………」

川村からは、無言の返事しか返って来ない。

「おい、俺達仲間だろ…！」

「……………」

「お前は、川村ひよりだろ！」

…俺達の仲間だろ…！」

壊れた川村が押し黙る。

そして、その濁った目線の先には……

首がもぎ取られた、寺岡光輝の変死体があった…

そこにあるのは、壊れた心と、壊れた身体と…大きすぎる絶望だけ
だった…

第十六話 テッド・アウト・エンド

赤い月が夜闇を照らす、灰色の砂が舞う砂漠。

その広い砂漠の真ん中で、寺岡光輝は目を覚ました。

「はっ…！」

「こゝここは何処だ？」

寺岡は、自分が置かれている状態を整理しようとした。

「ええと…確か並列世界で、『アブソール・ワールド・バインダー』に川村が取り込まれて…
それで、俺は…首を…」

寺岡は、自分の首や身体に触れてみる。

身体には、何の異常もない。
だが…

首を裂かれるあの恐ろしい感覚を、脳がしっかりと覚えている。

「あれは…何だったんだ？」

「へえ…今度は、君のお出ましかい？」

ねえ…寺岡後輩？」

「…!？」

いきなり、後ろから話し掛けられて驚いた寺岡は、勢い良く声の方に振り向いた。

そこにいたのは、なんと死んだはずの黒川白刃だった。

「く、黒川先輩…!？」

な、な、何でこんな場所で会うんですか!？」

「いやいや…その台詞を言いたいのには僕の方だよ」

「へ…?」

寺岡は、思わず間抜けな声を出した。

「く、黒川先輩…?」

イマイチ意味が分からないんですが…」

黒川は、意外そうな顔をして言った。

「…あれ？」

もしかして、自分が今何処にいるか分からないの？」

「はい、全然……」

「ここは……『狭間の砂漠』という場所だよ。

行くべき場所が分からない魂が行き着く場所。

冥界と現世の境目と言った所かな？」

黒川は、得意げにそう言った。

「冥界と現世の……狭間？」

「そう……要するに君は、あの世とこの世の間に存在する、今後の行き先を決める魂が、一時的に留まる場所だよ。

つまり君は、僕と同じく……死んだんだよ……」

「なっ、なんだと……!?!」

寺岡光輝は、自分が置かれている状態をようやく理解した。

寺岡は、かつての部長・黒川白刃に今までの成り行きを全て話した。

「そして俺は、あの攻撃で死んだ…
つまり、川村に息の根を止められたのか…」

「川村さんね…
まさか彼女が取り込まれるとはね…」

一部始終を聞いた黒川は、立ち上がって、何やら考え始めた。

「取り込まれたのは今日…だとすれば、まだ完全に同化していない
…
寺岡、まだ何とかなるかも知れないよ？」

「え…！？
どうすればいいんですか！？」

黒川は、真剣な眼差しでそれを言った。

「お前が生き返って、『アブソール・ワールド・バインダー』だけを倒せばいい。
そうすれば、川村も無事に戻って来るよ」

「え…？
俺が生き返って、『アブソール・ワールド・バインダー』を倒す…」

「!?」

黒川は、かなり驚いている寺岡を見て、ニヤリと笑って話を続けた。

「まあ、驚いて当然だよな。

確かに、君は人間としての人生は終わってしまった。

でも、君は適応者の一人だ。

管理人として、生まれ変わる事も出来るんだよ」

寺岡は、冷静にその事を理解しようとした。

「えーと、適応者は死ぬと、管理人として生まれ変わる…か。

確か、アスタリスクがそんな事言ってたな…」

「それなら話が早い。

もし、管理人になる気があるなら…管理人なって戦えばいい」

黒川はそう言って、寺岡に背を向けた。

「さてと、僕はそろそろ行かないといけないな…

いくら『狭間の砂漠』の案内人だとしても、あまり元の世界に干渉したりしたら、ルールに反するからね」

「案内人…？」

「そう…今の僕は、この『狭間の砂漠』に迷い込んだ魂を導く存在。
それが案内人という存在…」

「あつ…！！」

まさか…あの時、アスタリスクが言ってたのって…」

寺岡は、その案内人の特徴に聞き覚えがあった。

（聞いた事がある…）

アスタリスクのような管理人と同じような能力を持ち合わせ、とある場所に迷い込んだ魂を導いているといわれる、管理人にとっても近い人種が存在…

これは、寺岡が病院に入院中の時に、毎晩のようにやって来たアスタリスクが、話してくれた話の一つだっけ？）

寺岡がそう考えていると、黒川が寺岡の顔を見て、ウンウンと頷いている。

「なるほど、管理人にとっても近い人種…」

確かに、そういう立ち位置になるかな？」

「っ…！？」

寺岡は、驚きを隠せなかった。
何しろ黒川が、自分の回想に対する的確な返事をしたからだ。

「な、なんで…
俺が、考えていたことを…？」

「それが僕等、案内人が持っている能力だよ。
君達みたいに、武器を出せたりしないけど…
代わりに、読心術や、思考操作みたいな人の心に関する能力に特化
しているんだ」

「は、はあ…」

寺岡は、ただ驚きながら話を聞いていた。

黒川は、話を続ける。

「それと、もう一つ…僕の考えた仮説を教えてあげるよ。
並列世界は、負の感情を持って死んだ人間の魂が行き着く場所って
知ってるよね？
あと、負の感情は…苦しい死に方や、殺されたりしない限り抱かな
い感情だね」

「…？
そ、それが…どうかしたんですか？」

「つまり、並列世界は、人間が考える地獄に値する場所…にならないかな？」

「…！！」

寺岡は、確かにその通りだと思った。

今まで気付かないで戦ってきた寺岡だったが、黒川の仮説を聞いて、自分は地獄をさ迷う化け物を相手にしてきたと思いついた。

「つまり、俺達は地獄に堕ちた人間を相手に戦ってきた…という事なんですか！？」

「…そう考えるのが一番自然だね」

「なんてこった…」

つまり…今、地獄が現世に干渉してきて、飲み込もうとしてるって事か！？

そんなの、まずいつてもんじゃないぞ！！」

寺岡は、いてもたってもいられないようだった。

「先輩、今すぐ俺を元にいた場所に連れて行ってください！あんな化け物放っておいたら、この世が地獄と化します！！」

「やっぱりね…」

君なら、そう言うと思ったよ」

黒川は、何も無い空間に手を翳した。

すると、時空の裂け目のような空間が現れた。

「さあ、行くんだ。

僕らがいたあの世界を地獄の侵食から救うには、『アブソール・ワールド・バインダー』を倒すしかない…

そして、今それが出来るのは…君だけだ。

頼んだよ…管理人・寺岡光輝!!」

「…分かりました、行つてきます!

俺が世界を救えるならば…!!」

寺岡は、その黒い裂け目に飛び込んだ。

その頃、並列世界では…

寺岡が殺され、絶望の中で、残された面子が戦っていた。

「よくも…よくも…私の大好きな寺岡君を!!」

中城里沙は、両手に『エクスプロード・ピリオド』という名のロケットランチャーを構えている。

「吹き飛ばっ…!!」

里沙は、勢い良く引き金を引いた。破壊の弾丸が、川村の体に乗っ取っている『アブソール・ワールド・バインダー』に向かって打ち出された。

しかし、取り付かれた川村は爪を使って、弾丸を切り裂いた。切られたロケットランチャーは、その場で虚しく爆発した。

「…嘘!？」

里沙は、目の前の光景が信じられず、口を手で押さえている。

その里沙を余所に、取り付かれた川村は、無防備な忍に向かって突っ込んで来た。

「ころす…ころす!!」

「い、いや…」

川村さん、止めて…!!」

忍に刃物が迫る。
意外な人物への不意打ちに、誰も対応できなかった。

「…何だと!？」

「まずい、このままだと三波さんが…!!」

忍の首筋に、刃物が当たると思ったその時…
爪型の刃物を何かが弾いた。

「ナ、何が起コツタノ!？」

「あの『アブソール・ワールド・バインダー』の攻撃を弾いただと
!？」

「僕でもできない事を誰が…」

アスタリスク達が視線を向けた先にいたのは、管理人として復活した寺岡光輝だった。

「…「…テラオカコウキ!？」」「」

「え…寺岡君!？」

「光輝……!!」

「お前、死んだんじゃ……」

寺岡は、自分の出現に驚いている部員と管理人に向かって、笑顔で振り向いて言った。

「まだ川村も助けてないし、他にもやりたい事があるからね……戻ってきたよ、この地獄に!」

寺岡は、『アブソール・ワールド・バインダー』に取り付かれた川村に向き直った。

「さあ、今度こそ決着を付けてやる!」

寺岡は、専用武器の『フリー・シフト・カッター』を片手に叫んだ。

その様子を、他の部員達が呆気にとられて見ていた。

「ど、どうして生き返ったりしたんだ？」

冴被は、今だに現実を信じられずにそう言った。

それに対して、アスタリスクが冷静に答えた。

「テラオカコウキハ…生き返ツタンジヤナイ、管理人トシテ生マレ
変ワツタノヨ」

「か、管理人だと!？」

「そっだよ、サエハラナギサ…
彼は適応者から、管理人として生きる道を選んだんだ」

アディアが、付け加えるように言う。

さらに、横にいたシグマが話を続ける。

「さらに言うとな…
彼は管理人にならなくていいはずだったんだ。
つまり程度中途半端な覚悟で決断した訳じゃない。
自分がある世界を、並列世界から守る為にな…」

「そんな…あの寺岡がか!？」

冴被は、また寺岡に視線を向け直す。

「光輝…」

「寺岡君…」

「寺岡先輩…」

そう呟いたのは、忍と里沙と柳川だ。

今更自分達は、何もできない。

その三人がそう思っていた時、その三人の頭を、三人の管理人が軽く叩いた。

「ひゃっ!?!」

三人は不意を突かれて、間拔けな悲鳴を上げた。

そんな三人を見たアディアは、やれやれとため息をついた。

「何ボーツとしてるの？」

ほら、リサとミスホは戦う！

あとシノブは…サポートでもしてなよ!!」

しかし、一度攻撃を防がれた里沙は、あまり乗り気ではなさそうだった。

「でも、私なんかじゃ役に立てないわ…」

「そうですよ…
オレ達なんかじゃ何の力にもなれな…」

そう言いかけた二人の頭を、アディアはポカッと叩いた。

「…痛い！」

「このばかちん!!
二人共、そんな弱気だから駄目なんだよ!
ほら、私と一緒に、さっさと戦う!!」

アディアは、二人をズルズルと引きずって戦いに行った。

忍は、黙ってその一部始終を見ていた。
ただ、一人取り残されてしまって、何をすればいいか分からなかった。

その時、アスタリスクが急に話し掛けてきた。

「ミナミシノブ…ちょっと良いカシラ？」

「え、あ、はい!？」

忍は、思わず声が裏返る。

アスタリスクはなかなか話さない上、何を考えているのか分からないので少し恐い。

そんな忍を気にせず、アスタリスクは話を続ける。

「貴女…何モデキナイトテ思ッテルミタイネ」

「あ、はい…」

忍は、アスタリスクに対して何故か敬語になっていた。アスタリスクが発する言葉は、どこか威圧感がある。このプレッシャーは、管理人だからだろうか。

「貴女八、自分ガ思ッテイル程無力デハ無イワ…」

「え…?」

「ダカラ…アマリ自分ヲ攻メスギナイデ」

アスタリスクは、そう言って戦いの前線に向かった。

「あたしは…本当に役立たずじゃないのかな？」

忍は、何とも言えない気分でその場につ立っていた。

「よし、寺岡とアスタリスクは主に攻撃に専念して。
他の面子はサポートに回って。

いくら攻撃しても、分離しない限りカワムラにはダメージがいかないから遠慮しないで攻撃して！」

このアディアの指揮により、『アブソール・ワールド・バインダー』との戦闘が始まった。

まず、シグマと冴祓が『アブソール・ワールド・バインダー』を襲撃した。

「シグマ…行くぞ！」

「言われなくても、分かっている…！」

冴抜が刀を抜き、『アブソール・ワールド・バインダー』に向けて突きを繰り出した。

「…切るのが駄目なら、刺すのはどうだい!？」

冴抜は、『アブソール・ワールド・バインダー』が取り付いている川村の体を、刀でズブリと刺した。

「うづうづうづう…!」

取り付かれた川村は、うめき声を上げ、爪を振り回した。

「うわっ、危なっ…!」

「サエハラ、下がってて!」

シグマは、専用武器の『ジャスト・ストライク』で攻撃を受け止める。

「……………うづうづうづうづう…!？」

取り付かれた川村が、驚きの声を上げる。

爪がハンマーに触れた途端、凄い勢いで川村の体を弾いた。

これは『ジャスト・ストライク』の特殊能力である。

「テラオカ…今だっ！」

「おう…！」

寺岡は、『フリー・シフト・カッター』を片手に飛び出した。

「その姿を変化させよ…『フリー・シフト・カッター』…！」

寺岡がそう叫ぶと、『フリー・シフト・カッター』の刃が大きく変化し始めた。

その変化が止まった時、『フリー・シフト・カッター』は巨大な剣となっていた。

長さと大きさを自由に変化させる…これが『フリー・シフト・カッター』の特殊能力だった。

「喰らええっ…！」

寺岡は、軽々と大剣を振るい、『アブソール・ワールド・バインダー』の立方体の形をした仮面を目掛けて振り下ろした。

そうはさせまいと、『アブソール・ワールド・バインダー』は爪で大剣を受け止める。

「ころす！ころす！！ころす！！！ころす！！！！！！」

「うおおおおおおおおおっ！！！」

空中での鏝ぜり合いが繰り広げられ、二人の動きがピタリと止まった。

ガチャガチャと金属音を立てながら、二人は睨み合っているようだった。

その時、寺岡は突然ニヤリと笑った。

「よし…あとは頼んだよ、里沙さん！！！」

「OKよ、寺岡君！」

里沙は、スコープ付きライフルの『エキスパート・ストライク』を出現させ、『アブソール・ワールド・バインダー』に狙いを定めた。

「よし、いけるわー！」

里沙は、引き金を引いた。

ライフルの弾丸が、空気を貫くような勢いで進む。

そして、見事に『アブソール・ワールド・バインダー』の頭部に命中した。

「ぐぐぐぐぐぐぐぐ…がががががが…」

打たれた川村は、うめき声を上げながらふらついていた。

里沙が、見事に弱点を撃ち抜いたようだった。

「よしっ！里沙さんナイス！」

「ふふふ…私にかかれば、これぐらい朝飯前よ！」

冴抜とシグマも、一息ついていた。

「はあ…意外と楽勝だったな」

「うむ、仲間がいれば…恐れるに足りない相手だったな」

しかし、寺岡はどうも腑に落ちなかった。

（なんだこの落ち着かない感じは…？

まだ終わっていないような…嫌な予感がする…）

と次の瞬間、自分の身に終わりを感じた『アブソール・ワールド・バインダー』は、突然暴走を始めた。

「あああああ…ぶつつつころおおおおすすすすすううう
うううううつ…！」

「「「「「！？」「「「「」

川村は、完全にぶっ壊れていた。

爪をがむしゃらに振り回して、全てを破壊しようというような勢い
だった。

「くそっ…！往生際の悪い化け物め…！」

アディアがはっとして言った。

「まずい…このまま奴が暴れ続ければ、カワムラは奴のエネルギーとして完全に吸収されてしまう…！」

「…何っ!？」

会話に気を取られている寺岡に、無数の鎖が飛んで来て、寺岡の足に絡み付いた。

「あっ、しまった…！」

『アブソール・ワールド・バインダー』が俺の体をぐいぐい引つ張る。

「くそっ、離しやがれ…!!」

大剣だった『フリー・シフト・カッター』をナイフに変えて、鎖を切り落とす。

その隙を狙うかのように、両サイドから鋭利な爪が襲い掛かってきた。

「ちいっ…嵌められたか…！」

「テラオカコウキ……!!」

「寺岡っ……!!」

「こ、光輝い……!!」

心配する仲間達が見守る中、寺岡はゆっくりと立ち上がって言った。

「俺は、まだ大丈夫だ。

それに、ただ攻撃を喰らったわけじゃないんだ……」

「え……?」

「奴を見れば分かるさ……」

その言葉通り、『アブソール・ワールド・バインダー』に取り込まれた川村を見ると、その胴体に『フリー・シフト・カッター』が刺さっていた。

「う……うぐっ……おおおおお……」

川村が苦痛の声を上げている。

すると、寺岡は傷口を押さえながら立ち上って言った。

「ふざけんな…」

こんな事までして…諦められる訳無いだろうが…！」

寺岡は、『フリー・シフト・カッター』を強く握り直した。

「む、無茶言うな！」

カワムラと奴分離させないと、カワムラは帰って…」

「だったら…自爆する前に分離させればいいんだろ？
簡単じゃねえか…」

「しかし、それはあくまでも可能の範囲だ！
成功率は一桁も無いぞ！？」

「ゼロよりは…マシだア…！」

そう言つて、寺岡は『アブソール・ワールド・バインダー』に取り
付かれた川村に向かって突っ込んだ。

「あ、おい！」

待つんだ、テラオカ…！」

「まあ、シグマ…少しは落ち着きなよ」

シグマが振り返ると、そこにはアディアが立っていた。

「…アディア!？」

おまえは、テラオカが心配じゃないのか!？」

「もちろん、心配だよ。

けど…彼は男の管理人だよ？

私達とは違う…きっと、未知の力を秘めているはずだよ」

「…ソウヨ。

テラオカコウキラ、信ジマシヨウ?」

「…っ!？」

アスタリスクまで!？」

気が付くと、アスタリスクも横に立っていた。

「でも、さすがにテラオカ一人じゃね…

私が、彼のサポートに行くよ」

「な、何を勝手に…」

「君の武器だと、カワムラもろごと奴をぶっ飛ばしてしまうつ。
テラオカのサポートにはとてもじゃないけど向かないよ」

「くっ…！」

シグマは、悔しそうに唸る。

その横で、アスタリスクが何か言いたげにこちらを見ている。

「アスタリスク…あんたの出る幕じゃないよ」

「デモ…」

「あんたは、私にもしもの事があったら動いて。それまで私達を見守ってて」

そう言って、アディアは寺岡に続いた。

その後ろを、別の人影が追っていた。

「ア、アレハ…ヤナギカワミズホ!？」

「テラオカ、待って！」

「えっ、アディア!?」

寺岡の後を追っていたアディアが、寺岡に追い付いた。

アディアが追いかけて来た事に、寺岡はかなり意外そうな顔をしていた。

「私が援護するわ！」

貴方は、私が奴に攻撃を仕掛けたら、すぐに追撃して！」

「わ、わかった！」

まず、アディアが『クローズ・ギロチン』で『アブソール・ワールド・バインダー』に攻撃を仕掛ける。

『アブソール・ワールド・バインダー』は、爪でそれを弾き返す。

「このっ！喰らえ！」

アディアは、弾かれた反動を利用して一回転し、再び斧を振りかざす。

『アブソール・ワールド・バインダー』は、その攻撃に対応出来ず、

左腕に付いている爪を失った。

「うづうづ…ううっ!!」

片方の爪を使えなくされた『アブソール・ワールド・バインダー』は、唸りながら残った爪をアディアに向けて突き出した。

「わっ…!!」

「アディア…!!」

刺されそうになっているアディアを見た寺岡は、『フリー・シフト・カッター』を片手に『アブソール・ワールド・バインダー』に急接近する。

「アディアに…手を出すな!!
お前の相手は俺だ…!!」

そう言って、寺岡は『フリー・シフト・カッター』を両手持ちの剣に変化させる。

川村の体に取り付いた『アブソール・ワールド・バインダー』は、不敵な笑い声を上げて、攻撃対象を寺岡に変える。

寺岡は、『アブソール・ワールド・バインダー』の攻撃を体を反らして避け、見事に仮面に剣を突き刺した。

「ああ……ぐ……ああ……ああ……」

『アブソール・ワールド・バインダー』に取り付かれた川村が、力を無くして地面に倒れ込んだ。

すると、川村の体からいくつもの鎖で構成された球体が出てきた。

「テラオカ……!!」

『アブソール・ワールド・バインダー』がカワムラの体から分離した……!!

……今うちに攻撃して……!!

さあ、早く……!!」

しかし、先程の殆ど力を使い切った寺岡は、簡単に動く事はできなかった。

「すまない……体が思うように動かない……」

「そんな……!!」

鎖で構成された球体が、川村の体に入り込もうと、川村の胴体に近づいていた。

「まずい…!!」

このままじゃ、また取り込まれて…」

その時だった。

その鎖の球体を、見た事がある木刀が突き刺した。

それは、柳川の最初で、最大の攻撃だった。

「あはは…危なかったですね」

「や、柳川…!!」

アスタリスクに刺された鎖の球体は、バラバラに砕け散った。

これで、長かった『アブソール・ワールド・バインダー』との戦いが終わったのだった。

「あ…おい、川村はどうなった!？」

寺岡は、急いで川村の近くに駆け寄る。

川村は、目を閉じたまま動かない。

「川村!？」

目を覚ませよ、川村っ!!」

アスタリスクは、寺岡に近付いて言った。

「大丈夫…疲レテ寝テイルダケヨ。
憑依サレテ、無駄ナチカラヲ使イスキタノヨ…」

「そ、そうか…良かった…」

気が抜けた寺岡は、その場に座り込んだ。

他の部員達も、寺岡に近付いて来た。

真っ先に隣に来たのは、中城里沙だった。

「すごいわ、寺岡君!

これで…ようやく事件解決したね!」

「おいおい、中城…」

お前、殆ど何もできてなかったじゃねえか」

「うつ…否定できないわ…」

で、でも…さ、冴被君だって人の事言えないじゃない！
刀が効かなくて、呆然としてる人がよくまあ…そんな事が言えるわ
ね！」

それを聞いた冴被の顔が、珍しく動揺していた。

「あ、あれはな…」

予想外過ぎて理解に時間がかかったただけだ！」

「ふふふ…まあ、そういう事にしておいてあげるわ」

里沙は、今まで冴被に散々馬鹿にされていたので、何だか楽しそう
だった。

そして、二人が色々と言い争っている間に、柳川と忍が寺岡の隣に
やって来た。

「光輝…大丈夫？」

「寺岡先輩…お怪我はありませんか？」

「ああ、二人共…あの時、最初に攻撃を喰らった時の切り傷しか無
いよ」

「あ、そうだった!!
包帯、包帯とかない!？」

「はい、あります!
先輩、これを使って下さい!!」

「あれ…?
お前、包帯持ってたんだな…
なんで、俺が噛まれた時に使わなかったんだ？」

「あ、いや…気のせいですよ!
うん、間違いなく先輩の気のせいですよ!!」

「ああ…そうか？」

寺岡は、内心では絶対嘘だと思いながら、包帯を受け取る。
そして、寺岡が傷の治療をしていると、アスタリスクがある事に気が付いた。

「…!!
並列世界ノ様子ガ…オカシイ!!」

「…え？」

「サッキマデ、アンナ大キナ時空裂ケ目八無カッタハズ…」

「じ、時空の裂け目？」

少し離れた所の、斜めに空間を裂いたような場所を凝視しているアスタリスクの代わりに、アディアが答えた。

「時空の裂け目は、この並列世界と現世を繋いでいる門みたいなものだよ。」

出現率はとても低いから、管理人の中でもあまり知られていないけど、その裂け目から生還した人間を、私達は何度も見ている……」

「そ、それはつまり……」

「『アブソール・ワールド・バインダー』が死んだ今……現世に戻る為の唯一の手段だよ。」

出現時間も短いから、急いだ方がいい……」

「……！」

寺岡は、急いで部員全員に呼び掛けた。

「おい、皆！」

多分、話は聞いてたよな？

急いで、時空の裂け目に入るんだ！」

部員全員は頷いて、裂け目の目の前で集合した。

寺岡も川村を瀬尾って、裂け目の前まで来た。

しかし、誰も裂け目に入ろうとしなかった。

「ん、どうしたんだ…皆？」

「寺岡先輩は…どうなるんですか？」

本当に…管理人になったんですよね？」

柳川は、心配そうにこちらを見ている。

里沙さんも同じようにこちらを見ている。

「管理人になったって事は、まさか…」

「そうだね…俺はこの世界に縛られる。

おそらくは…二度と現世に戻れない…」

「そ、そんな…!!」

それを聞いた忍が、涙目で俺に抱き着いて来た。

「そんな嫌だよ…!!」

光輝に二度と会えないなんて…

だったら、あたしも残る!!」

「し、忍…」

「いやだあ…いやだよお…光輝い…」

寺岡は、忍に少し笑って言った。

「おい、泣くなよ。」

俺は、別に死ぬ訳じゃないんだ…
もしかしたら…また会えるかもしれないぜ?」

「ほ、本当…?」

「ああ、希望を捨てないでいればな」

そう言って、ゆっくりと忍から離れる。

「じゃあ、川村と忍は頼んだよ…冴被!」

「な、なんで俺なんだ!?!」

そういうやり取りをしている内に、時空の裂け目が揺らぎだした。

シグマが、全員を急かす。

「…早くするんだ！
もうすぐ裂け目が消滅する！！」

管理人と寺岡を除く全員が、裂け目に一人ずつ入って行った。

そして、最後に川村を背負った冴菰と忍が裂け目に入る番になった時、寺岡が口を開いた。

「冴菰、忍…！」

「…？」

「寺岡、どうした？」

寺岡は、何とも言えない複雑そうな笑顔で言った。

「川村を…頼んだぞ。

俺がいない分相手してやってくれ…」

「わかったよ、光輝…」

「まったく、最後にそんなお願いかよ…
他に言う事無いのか？」

「ああ、そうだな…言ってなかったな…」

寺岡は、二人に向き直ると言った。

「それじゃ、またな？」

「またな…か。」

「フン、いいだろう…！」

「精々死んだりしないようにな…！」

「あ、当たり前だ！」

それから、泣きそうな忍が言った。

「光輝…！」

「あ、待ってるからね…！」

「ああ、わかった！」

「それまで、元気にしてれよ…！」

「うん…！」

それから、二人は裂け目に飛び込んで行った。

それからすぐに、裂け目はいつもの空間に飲み込まれた。

この瞬間：並列世界は、完全に現世から遮断された。

この場に残っているのは、アスタリスクとアディア、シグマ、そして：寺岡光輝だけだった。

その時の寺岡の目には、涙が浮かんでいた。

「泣イテルノ？」

「泣いちゃ悪いか？」

あいつらの前で泣くのは、我慢してたんだからさ……」

寺岡は、袖で涙を拭う。

それを見ていたシグマは、やれやれという感じで言った。

「全く……君は男なんだからな？」

男なら、もっとしっかりできないのか？」

「う、うるせーな！」

冴被に勝てない奴が何を……」

「あ、あれは偶然だ……!!」

それから始まった二人の口喧嘩を見ているアスタリスクとアディアは、面白そうにその光景を見ていた。

「あーあ、早速喧嘩になってるよ。

これからこんな調子で……大丈夫かな？」

「クス……私ニモ分カラナイワ。

デモ、ソナナニ仲ハ悪クナサソウヨ？」

アスタリスクは、寺岡に向かって独り言を言った。

「コレカラヨレシク……コウキ」

くエピソードく

オカルト研究会の面子が、並列世界から脱出してから、約一週間が経った。

オカルト研究会は、その後廃部になり、その代わりに、新たにゲーム同好会が設立された。

今日も、寺岡の代わりに部長をしている川村が一番最初に部室に入る。

並列世界から脱出した後に目覚めた川村は、自分が『アブソール・ワールド・バインダー』に取り込まれた事、一度寺岡を殺した事を覚えていた。

数日は、ベッドから起きれない程精神的ショックを受けていたが、一週間経った今、何とか精神が安定し、ゲーム同好会の部長として活動をし始めたのである。

「はあ…今日はチェスでもしようかしら？」

川村が独り言を言っていると、忍が部室にずかずかと入って来た。ちなみに忍は、ゲーム同好会の副部長になっていた。

「川村さん、こんちゃあ！」

「あ、三波さん…」

今日は、チエスでもしようと思っっているんだけど…」

「あ、いいね！

あたし、やるやる!!」

ゲームが大好きな忍は、ぴよんぴよん跳びはねている。

寺岡がいなくなっただけからは、同好会の雰囲気は、大体はこんな感じである。

そして、もう一人の部員が入って来た。

好きで男装をしている柳川だ。

「川村先輩と三波先輩、こんにちはです！」

「こんにちは、柳川さん」

「あ、瑞穂ちゃん！

ねえ、チエスやろう!!」

「あ、いいですね！

先輩が相手でも、簡単には負けませんよ!!」

こうして、ゲーム同好会の活動は始まるのである。

一方の中城里沙は、ゲーム同好会にもよくよく遊びに来るが、寺岡がいなくなってから、自分の学校の部活に専念し始めていた。

今日も書道部の部室で、筆を手に取っている。

「さてと、今日は何を書こうかしら？」

もう、見本になるものは大会とかで全部書いたし……」

里沙は、何となく思い付いた言葉を半紙に書きはじめた。

それは、なんて事はないただの気まぐれだった。

「よし、書けた……」

里沙は、『平穩』という漢字を半紙に書いていた。

「やっぱり何事も平穩が、一番よね？」

里沙は、そんな独り言を言っただけ息をついた。

（寺岡君…元気かしら？）

やっぱり寺岡君がいないと、調子狂うわ…）

そんな考え事をしてしていると、書道教室に別の女子部員が入って来た。

「こんにちは、里沙先輩！

今日は、一体、何書いてるんですか？」

「あ、今日はね…」

里沙は、笑顔で答える。

里沙にとって、寺岡がいなくなって変わって事がもう一つあった。

里沙と少し距離を置いていた部員達との距離が、かなり縮まった事だ。

これは、里沙にとって大きな前進だった。

「…でやああつ！！」

「…ぐああつ！！！」

冴抜清は、演劇部の演技の真っ最中だった。

今は、『日本刀を持った高校生とチェーンソーを持った殺人鬼が、高校のグラウンドで決死の決闘！！』という設定で演じている。

もちろん、日本刀を持った高校生というのは冴抜だ。

「この…俺が…高校生なんか…ガクッ…」

「フン…口ほどでも無いな」

役を演じきった冴抜は、壇上から降りた。

そして、まっすぐ舞台裏の休憩所のベンチにどっかりと腰掛けた。

「はあ…疲れた…」

「冴抜君、お疲れ様！」

冴祓の隣に、演劇部の部長が座ってきた。

「あ、部長。

…どうかしましたか？」

「いやー、君が提案してくれた演劇の脚本…お客さんが沢山来たし、大成功だね！」

「あ、はい…どうも」

冴祓は部長の質問に、怠そうに答えて言った。

部長は、冴祓の行動を見てやれやれという風に言った。

「冴祓君、もつたいないな」

顔は良いのに、そんな態度だから…」

「いいんですよ…」

俺は、面食い女子なんかに興味はないですからね」

「うっ…！」

冴祓君、何でそんな目で私を見るの！？」

動揺している部長を余所に、冴祓は立ち上がった。

「さて、昼寝でもするか……」

「ふーん……みんな、寺岡無しでも上手くやってるね」

『狭間の砂漠』では、黒川白刃が現世の様子が映されている水溜まりを覗き込んでいた。

「……」

「なんて……幸せそうなんだろうねえ……
本当に、上手くやって……」

「ああ、もう！

黒川先輩、止めて下さい！！」

ニヤニヤしている黒川の隣にいたのは……
なんと、寺岡光輝だった。

「つたく…」

現世と並列世界が分断した代わりに、『狭間の砂漠』と並列世界が干渉し合うことになるなんて…驚きましたよ」

「まあ…当然といえば、当然なだけどね。

あるものが消えれば、代わりにあるものが補う…

世の中のものは、大体この法則に基づいて動いてるからね」

黒川が得意げに答える。

それを聞いた寺岡は冷めた目をして言った。

「中二病…ですね」

「なっ…！」

先輩に失礼な事言っつな…！」

「はいはい…」

寺岡は立ち上がり、生返事をする。

「さて、そろそろ並列世界に戻るか…

里沙さんとか、川村は大丈夫そうだしね」

「ん、もう用はないのかい？」

「急いでるし、無いな…

こっちも大変だからな…」

寺岡の脳裏には、新たな化け物の姿が過ぎっていた。

寺岡は、時空の裂け目の前に立ってから、黒川に言った。

「じゃあ、黒川先輩…」

また生きてたら会いましょう」

「ああ、分かった。

アスタリスク達によろしく」

「ほいほい、言っておきますよ」

寺岡は、化け物の群がる巣窟に戻って行った。

T o b e c o n t i n u e d . . . ?

〜エピローグ〜（後書き）

どうも、AnotherChapterの作者のノノ川玲二です。

AnotherChapter最後までご覧いただきありがとうございます！
ございました！

今回が初めて筋の通ったストーリーを書きましたので、読みずらい箇所や、誤字脱字があつて読みずらかつたかもしれません。

そんな方がいたかもしれないので、この場を借りてお詫び申し上げます。

次回作ですが：AnotherChapterの続編を書くか、新しいシリーズを書くか迷っています。

そのことを踏まえ、感想をいあたけると幸いです。
普通のご感想でも大変ありがたいです。

それでは、最後に改めて…

最後まで本当にありがとうございます！！

それでは、次回作でお会いしましょう！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302s/>

AnotherChapter

2011年7月13日20時02分発行